

第4章

ケーススタディ「京都」

第1節 祇園祭山鉾町 —— 中心市街地の文化的景観

1 はじめに

南北に走る烏丸通・室町通・新町通と東西に走る四条通とが交叉する辺りは、昔も今も京都の中心市街地であり、経済活動の中心地である。この地域は八坂神社（祇園社）の氏子圏の中心でもあり、室町時代以降、祇園祭（世界無形文化遺産）の山鉾巡行を担い続けている。山鉾町とは、山や鉾、船などをだす町々のことであり、およそ戦国時代の下京の範囲にあたる。

八坂神社・祇園・先斗町と山鉾町を結ぶ四条大路（四条通）は信仰と遊樂の都市軸であり、町小路（新町通）と室町小路（室町通）は商業・経済の都市軸といってよい。四条町の辻が室町幕府の高札場「札の辻」であり、四条室町の辻が祇園祭山鉾の中心「鉾の辻」と称されたのは、地域の実態に即したものであり、地域性をはっきりと示している。

本節ではこの京都の中心市街地（経済センター）・祇園祭山鉾町を文化的景観として評価し、その特性と価値評価を示したい。それが山鉾町のまちづくりの基盤を示唆するからである。具体的には、都市史の立場から場所性・重層性・象徴性を視軸として山鉾町の文化的景観の特性を探り、また「生業と信仰と遊樂」や「京町家」、「まちづくり」の一端を眺めたい。



図1 膏薬辻子（こうやくのずし）の町並み
 繁華な市街地・山鉾町にも閑静な伝統的空間が残る。

※以下で用いる「上京」・「下京」は、前近代における京都の地域区分であり、二条大路（二条通）が境界となっている。

2 祇園祭そして山鉾の復興と再生

祇園祭は東山の八坂神社（祇園社）の祭礼であり、令和元年（2019）は「祇園御霊会」の始まりから1150年にあたるとされ、盛大に神事や祭礼行事、山鉾巡行が執行された。

この祇園祭の歴史は、神社からみても氏子からみても復興と再生の歴史である。応仁の乱（1467～77）をはじめ、戦国期（16世紀）や幕末期（19世紀中頃）、20世紀の動乱・戦争、さらにたびかさなる都市火災などによって、山鉾の破壊・焼失はもとより、祭礼行事そのものの廃絶に至る事態に陥ったこともあったが、そのたびに復興、再生、発展を遂げてきた。その不死鳥のような生命力は現代にも受け継がれているようである。

昭和の戦後復興期、すなわち20世紀後半におけるいわゆる「休み山鉾」の復興を眺めてみると、昭和28年（1953）に菊水鉾（中京区四条通室町上ル）が復興し、その後、昭和54年（1979）に綾傘鉾（下京区綾小路通室町西入）、昭和56年（1981）に蟻螂山（中京区西洞院通四条上ル）、昭和63年（1988）に四条傘鉾（下京区四条通西洞院西入）が再興され、32番目の山鉾として巡行に加わった。

21世紀に入ると、平成26年（2014）には四条町（下京区新町通四条下ル）の大船鉾（凱旋船鉾）が再建されて山鉾巡行に復帰したが、これは幕末期、元治元年（1864）の兵火による焼失以来、150年ぶりのことである。現在も、衣棚町（中京区三条通室町西入ル）では、令和8年（2026）までの鷹山再建・巡行を目指して着実に活動している。

こうした動きのなかで、山鉾の再建・修理などとともに、町会所の再生・復興も注目される。

町会所は、近世京都の町々にあった共有の施設であり、町の寄合などがおこなわれる自治の場である。おおよそ町家と同様の外観や構造をもっているが、山鉾町の町会所では祇園祭のために必要な特別の機能（山鉾の部材の収蔵、

囃子の練習、本尊などの飾り場など)を備えているところに大きな特徴がある。

三条町八幡山(新町通三条下ル)では平成20年(2008)に江戸時代後期の町会所を改修・再生し、四条町大船鉾では平成29年(2017)に町内にあった町家を改修して大船鉾のための機能を付け加え、町会所を復興している。

近年、最も重要なできごとは、平成26年の祇園祭において7月17日の前祭の巡行に続いて、24日に後祭の巡行がおこなわれ、祇園祭本来の祭儀の姿を取り戻したことである。祇園祭そのものの復活といえるものであり、それが山鉾町の人々を中心におこなわれたことは、ある意味で当然のことである。

しかし、見過ごしてならない大切なことは、この都市祭礼の維持と復興と再生の営みを続ける山鉾町が、その一方で、というよりも本来のあり方として平安時代以来ずっと1000年をこえて京の「中心市街地」としての都市機能を保ち続けているということである。

3 *The City of Kyoto* あるいは「町まち/ちょう」—— 場所性

山鉾町は、京都の歴史的街区の中核をなす「中心市街地」であり、いうまでもなく都市民衆の祭礼として500年ほどの歴史をもつ世界民俗遺産・祇園祭を運営し、祇園祭の歴史と文化を伝える町々である。

この山鉾町を一言で表すなら、「町まち/ちょう」となるであろう。〈まち〉とは市場の通り、〈ちょう〉とは地域生活空間とともに、地域コミュニティを意味している。シティ *The City* といえはロンドンの有名な金融街であるように、「町」は首都・京都の経済機能を担い続けた地域であった。山鉾町一帯は、今も銀行などが集中する京都の経済の中心地であるが、このような地域の特徴は、はるかな昔、1000年近く前にまでさかのぼることができる。

The City of London にならって、*The City of Kyoto* と呼んでも差し支えあるまい。もちろん経済機能のみならず、地域空間、地域社会の意義が複合している都市空間であることも共通している。

「町」の形成と持続 —— 中心市街地 こうした山鉾町の町々の分布域は、現在、姉小路以南・松原以北・東洞院以西・油小路以東となっている。四条烏丸の周辺に広がり、

京都の中心市街地である、いわゆる田の字型地区の中心に立地するといつてよい。

ただ、烏丸通が山鉾町の南北中軸街路となったのは現代のできごとである。この地域の中軸街路は、西から東に新町通 → 室町通 → 烏丸通と移り変わってきた。そのことは、前述のように、四条と室町通の辻が「鉾の辻」(戦国期から祇園祭山鉾の中心)、また四条と新町通の辻が「札の辻」(室町幕府の高札場)と呼ばれたことが端的に示している。

「新町通」は近世～現代の道路名であり、戦国期には「町通り」、古代・中世には「町小路」と呼ばれた。原点ともいべき「町小路」の出現は平安時代に遡る。道の名称としては一条から九条に至る南北の通りを指すが、文字通り「まち」= 市場として活況を呈したのが、三条や四条、五条、七条と交叉する辻の周辺であった。四条町辺りは洛中で最も賑やかなところで、道に面して女性たちが商う小さな店屋(小物座などの町座)が並び、その背後に民衆の住まいなどがあった。

山鉾町の中核である地域はいつの時代にも京都を支えた経済的な中心「まち」であったが、さらに社会的・文化的な特色も濃厚である。いくつか事例を挙げてみよう。

- ① 祇園社の氏子圏 —— 二条以南、五条(今の松原通)以北 —— に含まれる(祇園祭の地域的基盤)。
- ② 戦国期の下京「惣構」の範囲は二条以南、五条以北、東洞院以西、堀川以東の地域である。
- ③ 戦国期に成立した下京の町組は「丑寅組」・「巽組」・「西組」などと称したが、山鉾町の多くが属する町組の名は「中組」である。山鉾町が、地理的な意味のみならず、経済的な、また社会的な意味においても占めていた立場を物語るものであろう。
- ④ 戦国期の町衆文化の1つとして「下京茶湯」はよく知られている。その中心は「市中の隠」(「市中の山居」)で名高い四条室町の「数寄の上手」奈良屋宗珠であり、四条町の十四屋宗吾であった。ちなみに宗吾の弟子となった堺の武野紹鴎は、四条室町夷町(菊水鉾町)に大黒庵を営んだ。

祭礼と都市構造 今の山鉾町の母胎ともいべき戦国期の下京についてももう少し詳しくみておこう。

個々の町(ちょう)の領域、いいかえると下京の町割はすでに基本的には固定されていた。現在の下京鉾町にみら

れる町割の骨格は、少なくとも天文期（1532～1555）に遡り、おそらくは町単位の祇園会出銭によって山鉾運営がおこなわれるようになった時期に形づくられていた敷地割の状態に源をもつと推定される。

一方、戦国後半期の京の道路は、ほとんどすべてが条坊制の規模・形態を失っていた。つまり巷所化して道幅がかなり狭くなっていた。そして前述のように町割が固定化するにしたがい、道幅もおのずから定まるとみられよう。巷所化した道路部分をそのまま敷地と公的に確定することになったのが、おそらく豊臣秀吉による天正年間（きょうちゆう）の京中検地であり、その後実施された道路幅員の統一などの整備の結果、実体としても確定されたのであろう。

さて、祇園会山鉾を維持するための条件が、町共同体の存続、「役」負担における町共同体間の平等であるとする、それは町割形成の大きな要因として、必然的に下京全域における町の規模の平均化、町内の均質化をもたらす契機となったにちがいない。逆に、祇園会に関わる役負担そのものが、下京の町々にいわゆる鉾町と寄町の上下関係をもちこむ契機となった。

本来的には水平的・平等的な地縁組織であるはずの町々は、祇園会のみならず、^{かまえ}構の堀普請など恒常的な、あるいは臨時に賦課された少なからぬ課役に対応を余儀なくされるなかで、おのずと経済力の差にもとづく階層分化が進行したのであろう。結果的にはそうした階層差が町の内部にまで入り込み、町人による自治、町組の自治をその根元からゆるがせたのであった。

町衆の祭といわれる祇園会山鉾の維持運営が下京の都市空間構成＝町割に大きな影響を与え、また地域社会を構成する町々の間に階層構造をもたらし、^{そりがまえ}惣構に囲まれた戦国期の下京は、都市民の祭礼に規定された都市集落なのであった。

微地形と地域性 周知のように京都の旧市街地は全般に北が高く、南に向かって低くなる地形である。そうしたなかで興味深いのは、街と道は平坦ではなくて起伏に富んでおり、微高地やまた低地がいくつもあることである。小高く南北に連なる微高地、いわば尾根筋には道が開かれている。上京では新町通や室町通、下京では新町通である。

水はけのよい微高地に平安京の町小路や室町小路が開か

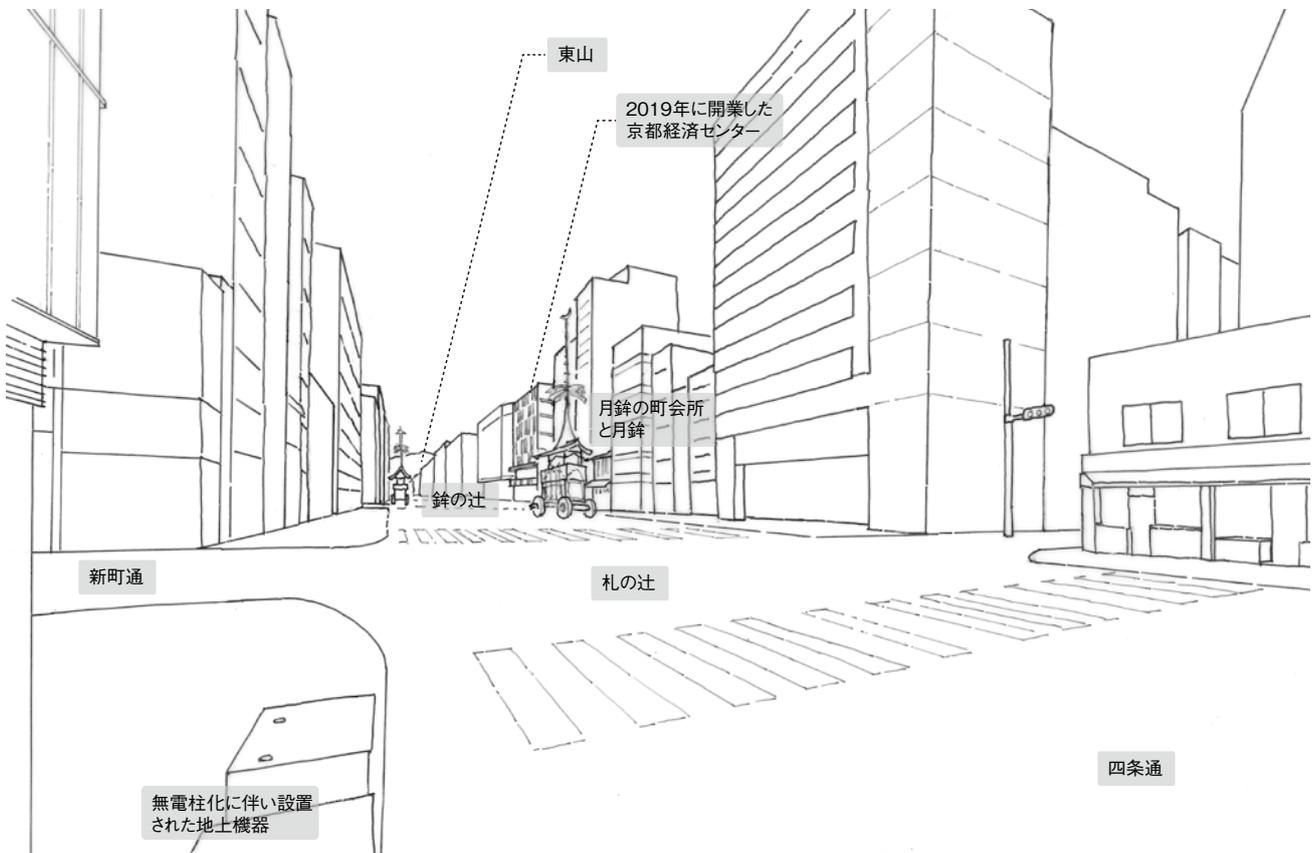


図2 四条と新町通の辻「札の辻」の図解（東をみる）

れたことはおそらく偶然の賜物であるにしても、新町通が平安時代中期から今に至るまで居住地・商業地区として繁栄を持続できたことは、そうした微地形的な立地条件に恵まれたからであろう。平安京以前に遡る可能性のある微地形が、地域の性格、「町」の基本的な骨格を規定したと考えることができよう。

山鉾の分布が、南北の室町通・新町通と東西の四条通との辻周辺に濃密であるのは、この地域が山鉾町の自治・経済・文化・信仰の中核であったからにはほかならない。新町通に放下鉾・大船鉾（凱旋船鉾）・船鉾（出陣船鉾）、そして鉾に匹敵する大型の山である北観音山・南観音山、そのほか八幡山・岩戸山が並び立っている姿は、古くから京都の中軸街路であったこの通りの歴史の一端を示しているのである。

山鉾町は、平安京の時代から現代に至るまで1000年をこえて、人・モノ・情報の交流の場として、都市機能が集中する拠点として、地域コミュニティの中核として、持続的に発展してきた京都の中心市街地である（この点に上京とのちがいをみることもできる）。

また山鉾町は、伝統と革新の調和する地域、都市民衆

文化の中心でもあった。まさに「町まち／ちょう」、*The City of Kyoto* であった。

4 自然・町・町家・坪庭・路地 —— 歴史と文化の重層性

いわゆる自然は、平安京の建設とともに失われ、また西洞院川や堀川も残念ながら近代になって地上から姿を消した。今もよく残っているのはただ微地形的な特徴だけかもしれない。

とはいえ、戦国期の「市中の山居」は、繁華な市街地の中に山里の閑寂なたたずまいを創り出す思想として注目に値しよう。しかもそれは、都市大衆文化の新時代を迎えて町衆が独自の生活環境文化を創造し、生業と居住の空間に次元の異なる数寄の空間を付け加え、都市民衆の生きる空間を多彩にした。現在見られる京町家の坪庭や奥の庭は、そうした環境志向の所産なのである。

山鉾町には、古代・平安京条坊制の格子状街路パターンや、四行八門制の二面町から変化した中世の四面町の形態、四条町近くに開かれた数本の辻子、多数の「路地 ろーじ」

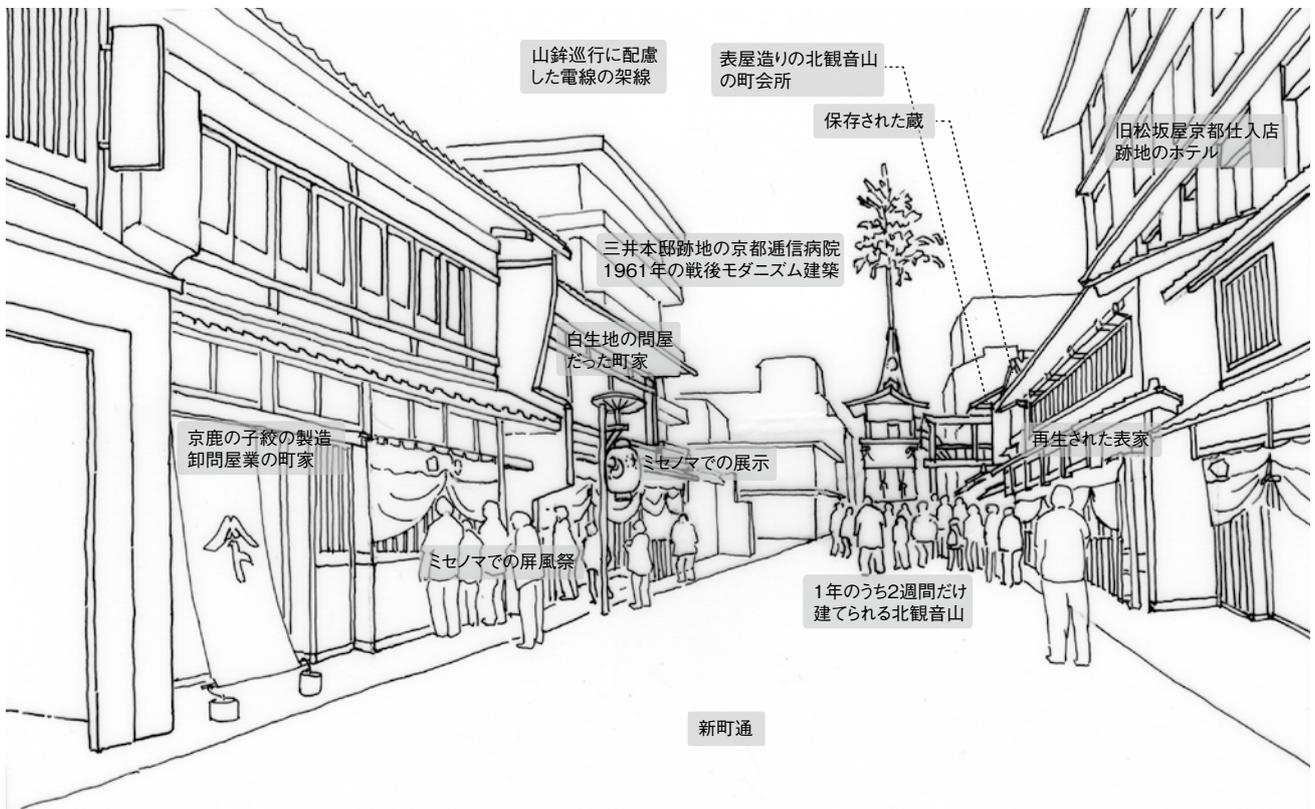


図3 新町通の図解（北をみる）

史と文化を体現しているからである。

さらにいうなら、京町家の保全・再生は文化遺産の保存や歴史的風致、文化的景観の継承にとどまらない意味も持っている。京町家は、京都の中心となる最も大切な‘ところ’、京都の最も奥深い大切な‘ところ’であり、京都の‘ところ’なのではなかろうか。

その京町家は新たな都市建築と都市景観を創造する可能性を秘めている、と私は思っている。

6 文化的景観の継承と再生 —— *The City of Kyoto* と“山鉾町”

(1) 特性と価値

山鉾町は、日本における首都京都の発展の各段階を投影した都市構造を現在まで継承する中心市街地であり、条坊制街路を基盤に中世の辻子や近世の路地、近代街路網などの諸要素が現在の都市景観に反映されるとともに、商業都市・下京が醸成した伝統と文化、信仰に基づく寺院や町家群が独特の情趣を生み出す貴重な「文化的景観」であり、類い稀なすぐれた価値も持っているといえることができる。

The City of Kyoto 「町 まち／ちょう」の文化的景観

これまでわかりやすいように広く知られている祇園祭山鉾町を冠してこの地域の文化的景観を呼んできたが、それではその特性の一面しか伝えられないのではないかという危惧がある。祇園祭と山鉾巡行に関わる景観形成は、この地域の生業や暮らし、信仰が形成する景観の一部でしかないからである。より正確にはいうなら、*The City of Kyoto*、「町 まち／ちょう」がふさわしい。京都経済街あるいは京都経済センターの文化的景観といってもよいであろう。

アーバニシティとアイデンティティの継承 山鉾町の景観形成に関わるステークホルダーのそれぞれが山鉾町の固有の都市性を理解し、その文化的景観の価値、景観の価値、町家の価値を共有し、未来へ伝えることこそ、この地域の今後の発展にとって最も大切な基盤であると考えられる。その根幹にあるのが祇園祭と山鉾巡行である。

祇園祭と山鉾巡行は、この地域の人々にとって活力の源泉であり、発展の礎ではなかろうか。戦国期、下京の人々が「神事なくとも山鉾渡したし」と願ったのと同じなのではないかと思われる。

シンボリティとインテグリティ 1年に1度、姿をあ

らわす山や鉾、船、傘はそれぞれの〈町 ちょう〉を、そして山鉾町という地域全体を統合するシンボルなのであろう。吉符入りに始まり、町会所での囃子の練習、山や鉾、船の組み立て、曳き初め・舁き初め、山鉾上での囃子、宵山、巡行、解体・収蔵などの一連の儀式や行事は、地域コミュニティ——近隣や町（ちょう）、その連合組織——の統合をたしかめあう‘よりどころ’となっているようにみえる。

山鉾町の文化的景観は、あらためていうまでもなく〈有機的に進化する景観〉のカテゴリーのなかにあるし、事実として有機的に進化を遂げてきたことは、現在の景観の変化にも明瞭にあらわれている。生活と生業と信仰に関わる山鉾町の文化的景観が、さらに将来にわたって進化し続けるためにどのようなことが重要であろうか。

現代においてもあいかわらず京都の経済活動の中心地であり、祇園祭山鉾巡行の運営・執行の母体であるこの地域が持続することは、もちろん大前提であろう。そのうえで、この地域に関わる多種多様な、しかも多数のステークホルダーの動きを良好な景観形成に向けて調整することが文化的景観の保全・継承・創造に寄与するのではなかろうか。このきわめて困難な課題を前にして、京都の知恵というべき「京都」システムに期待するところが大きい。

(2) 景観づくり、まちづくり —— 最近の動向

この地域は経済・社会の動向に敏感な地域であり、国内・国際社会の変化に応じて経済的な活力が増大し、活性化すると、地価が上昇、高騰して生活の場であり続けることが難しくなるし、またインパウンドの増大は地域の機能と構造、そして景観の転換、たとえば町家からホテル・民泊へといった劇的な変化を引き起こす。このように活発な経済活動は諸刃の剣なのであり、良好な景観の保存、継承、創造をうながすこともあるが、その一方で過度な経済価値の優先は良好な景観の劣化やオーセンティシティの喪失、さらには景観の破壊そのものをもたらすことにもなる。実際、こうした危機的状況が今や日常的になりつつあるといえよう。

以下では、産業・経済、社会、観光などの動向を踏まえてさまざまなステークホルダーの景観形成に関わる活動を一瞥することにしよう。

行政 —— 文化財保護・景観づくり・まちづくり 山鉾町の文化的景観の重要な構成要素に関わるものとして指定

文化財を挙げると、国指定には杉本家住宅（建造物・庭園）があり、京都市指定では長江家住宅・川崎家住宅・野口家住宅などの町家、頂法寺本堂（六角堂）、そして小結棚町会所（放下鉾、新町通錦小路下ル）をはじめとする山鉾町の会所4件がある。いずれも典型的・代表的な文化遺産といえよう。これらのほかにも国や市の登録文化財も少なからずある。

景観づくり・まちづくりについては、景観法による景観重要建造物指定なども数件なされているが、京都市独自の制度として特筆すべきものは、平成29年11月制定の「京都市京町家の保全及び継承に関する条例」（京町家条例）である。「歴史都市・京都の歴史、文化及び町並みの象徴である京町家の保全及び継承を、多様な主体との協働の下に推進していくことを目指し」たものであり、いくつもの画期的な特徴があるが、ここでは条例に基づいて京町家や地区を指定できることに注目したい。

この条例では「趣のある町並み又は個性豊かで洗練された生活文化の保全及び継承を効果的に進めるため、個別の建物や区域を京都市が指定する」こととしている。現在、先斗町をはじめとして7つの地区が「京町家保全継承地区」に指定されているが、このうちの「膏薬辻子 京町家保全継承地区」（令和元年5月指定）は、山鉾町域にあって市街中心地とは思えない町並みを残し伝えており、重要な構成要素というべきものである（図1）。四条新町の辻の西南にあたる街区にある膏薬辻子は、北の郭巨山町（郭巨山）から南の矢田町（伯牙山）に、途中で折れ曲がりながら貫通する。およそ南半分は杉本家住宅に接している。

この地区指定制度は、危機に瀕している山鉾町新町通の町並み景観を守るためにも有効な手だてと考えられるので、可能な限り早い地区指定が望まれる。

経済・社会 「経済センター」下京を象徴するできごとがあった。

四条室町南西角、函谷鉾町に「京都経済センター」が建設され、平成31年（2019）3月オープンしたのである。このセンターは、経済界と行政が一体となり進めてきたものであり、四条室町に京都の経済団体等が集結して京都経済百年の計として「交流と融合」の場を提供し、また京都府域の中小企業の総合支援（オール京都体制での対応）拠点としても活用し、さらに「賑わい施設」を併設して「四条烏丸、四条室町エリアの一層の魅力向上と活性化を図」

るものであるという。

この「京都経済センター」のコンセプトでは、四条室町は「京都の繊維産業の振興拠点であり、京都ファッション界の情報発信拠点として、地域経済の発展をリードしてきた」と位置付けられている。山鉾町の中核の地、四条室町「鉾の辻」が、現代においても重要な経済拠点として認識されていることは重要である（地域特性の認識の共有）。

地域社会 京都の地域社会は、戦国期の自治組織「町（ちょう）」を基盤として創りあげた連合組織「町組」や惣町上京五組・下京五組から発展した。江戸時代の多数の上下京「町組」から近代・明治2年（1869）の「番組」制度——「番組小学校」は地域自治の拠点——や、昭和4年（1929）の「学区」制度などの紆余曲折を経て現代に至った。今の地域コミュニティはかつての学区を単位としてまとまっているのが特徴といえよう。

山鉾町中心地域は、もともと戦国時代の下京五組の一つ「中組」（文字どおり中心部の町組）に由来するが、現在では明倫学区と成徳学区をもとにしてそれぞれ明倫自治連合会（おおむね三条通、四条通、烏丸通、西洞院通）と成徳自治連合会（おおむね四条通、松原通、烏丸通、西洞院通）をつくっている。2つの自治連合会による地域性の自己評価は、実質的にはほぼ同じといってよいが、明倫自治連合会の「地区計画」の説明をみると、「京都の都心部に位置する商業・業務の中心地であるとともに、わが国三大祭のひとつである祇園祭を伝える地域である。また、室町時代以来の町衆によって形成された自治の気風や文化・芸術に親しむ心が今に伝わり、商いと共存しながら多くの人々が住まう地域」と的確に述べている。



図5 杉本家住宅（重要文化財）

ところで、平成27年(2015)、「明倫地域景観づくり協議会」とその「明倫自治連合会地域景観づくり計画書」が京都市に認定されている。明倫地区の住民が地域の景観の保全・創出に主体的に取り組みだしたのであり、生業と暮らしの安全、商いと住まいの共存、文化と美しい景観とコミュニティの形成のまちづくりを目指している。

ところで、戦国時代の京の人びとや町は、洛中の屎尿とそれを肥料とする洛外の蔬菜農業のエコロジカルサイクル(循環型社会)、「構 かまえ」(要害)に囲われた安全な都市空間の構築、「下京茶湯」と茶屋、「市中の山居」など生活空間と市民文化の創出を実現したが、現代と共通する点があるのは、ある意味で自然なことであろう。背景に共助とコミュニティの形成があるのもおなじである。

共助と自治の伝統は、確かに受け継がれている。これからも末永く伝え、守りたい歴史と文化である。「京都」システムの最も重要な基盤である地域の人びとがどのような景観づくり・まちづくりの活動を展開するのかが、文化的景観の継承と再生の動向を左右することになる。

公益法人・NPO・協議会 もちろん、単独で地域の人びとや明倫自治連合会がそうした課題に立ち向かわなければならぬということではない。

時には産業経済の側からも支援がなされることもあるが、行政、さらに公益法人・NPO・協議会のさまざまなサポートが大きな役割を果たすことになるであろうし、いっそう協働の推進が期待されている。

山鉾町の景観形成にも深く関わる祇園祭と山鉾巡行などの執行は、八坂神社と氏子、関係者全体によって運営されるが、山鉾巡行については山や鉾それぞれの保存会、公益財団法人祇園祭山鉾連合会に対して行政を始めさまざまな組織が支援・援助をおこなっている。

景観形成に寄与することを目指した組織として、平成9年(1997)に設立された公益財団法人京都市景観まちづくりセンターがあり、京都市都市計画局や大学などの研究者と連携しながら、地域の景観まちづくりと京町家の保全・再生などの事業を実施している。

平成4年(1992)に発足し、平成14年(2002)にNPO法人となった京町家再生研究会はいうまでもなく、京町家を保全・再生することを目標に掲げ、研究者や技術者、町家の住人が集まって調査・研究・提言・広報などの活動を

を展開している。活動は京都市全域に広がるが、山鉾町に拠点を置いていることもあって、山鉾町における町家や町会所の保全・再生、明倫地域景観づくり協議会との連携など、景観まちづくりの課題に実践的に対応しており、この地域への貢献・寄与が大きいと評価できよう。

7 おわりに

景観と価値を守り、歴史と文化を伝えること、また景観を守り育み、「こころ」を伝えることは容易ではない。とくに都市の、その中心市街地においては。しかし、この山鉾町の地域に関わる人々の活動には秘かに少なからぬ期待感を抱いている。1000年を超えて日本の、京都の経済センターであり続けた経験やそれによる豊かな知恵が共有されているように思うからである。

山鉾町の人々が国の「重要文化的景観」への道を進むかどうかはわからない。しかし、新町通の三条町八幡山と四条町大船鉾の新たな町会所は、山鉾町の重要な景観構成要素の復興・再生としてだけでなく、またそれぞれの町にとって大切というだけでもなく、山鉾町にとって大きな意味や価値をもっている。祇園祭の維持・継承、また復興・再生は、京都の中心である最も大切な「こころ」、すなわち*"The City of Kyoto"*、祇園祭山鉾町の「こころ」を表している。そうした「顕著な地域的価値(Outstanding local value)」は、世界遺産の「顕著な普遍的価値」(Outstanding universal value)に通じている。

(高橋 康夫)

※本稿は、拙稿「京町家とまちづくり —— 祇園祭山鉾町の〈文化的景観〉をめぐって ——」(日本民俗建築学会公開シンポジウム資料集、2011年10月、高橋康夫『海の「京都」—— 日本琉球都市史研究』、京都大学学術出版会、2015年に再録)などをもとに、大幅に加筆したものである。

参考文献

- 高橋康夫(1983)『京都中世都市史研究』思文閣出版
- 高橋康夫(1988)『洛中洛外 —— 環境文化の中世史』平凡社
- 高橋康夫・吉田伸之・宮本雅明・伊藤毅(1993)『図集 日本都市史』(東京大学出版会)
- 高橋康夫(2001)『京町家・千年のあゆみ —— 京都にいきづく住まいの原型』学芸出版社
- 高橋康夫・中川理編(2003)『京・まちづくり史』昭和堂出版
- 高橋康夫(2015)『海の「京都」 —— 日本琉球都市史研究』京都大学学術出版会

第2節 西陣 —— 周辺市街地の織物商工業景観

1 西陣の景観形成史

(1) はじめに

「西陣」の指す領域は時代や主体によってさまざまであった。しかしながら、西陣織物同業者組合の所轄区域を「西陣」とみなす例のように西陣織物の生産地域を西陣として捉えてきた傾向が認められる（本庄 1930）。

こうしたまなざしは、西陣地域における基幹産業としての西陣機業の重要性を反映したものとと言える。ただ、西陣を文化的景観として捉えるためには「自然も歴史も暮らしも一体となったひとまとまりの地域」（文化的景観学検討会 2016）という視点からのアプローチが重要である。以下では機業を中心としながらもさまざまな要素から西陣の歩みを振り返りたい。

(2) 平安京北郊の開発

西陣地域は、京都盆地北部の扇状地上に位置する。ただし、北西部は紙屋川などによって形成された扇状地性の地形が段丘化した段丘低位面であるのに対し、南東部は鴨川などによって形成された緩扇状地であった（足利 1980）。また、両者の境界線となる大宮通附近には有栖川と若狭川が近代まで南流していた（片平 2013）。北西部の低位段丘上は高燥な「野」となり、平安貴族の遊獵地として、また北縁の蓮台野は古代中世の風葬地として利用された（足利 1980）。

一方で南東部の緩扇状地については、高橋康夫（1983）によって以下のような変遷が確認されている。平安前期、この地域には平安宮北郊のランドマークとなった園池司園池などが成立した。摂関期には貴族らによる開発・宅地化が進むなかで、貴族によって世尊寺や妙覚寺のような寺院が建立された。妙覚寺が廃寺となった後、その跡地には大徳寺による再開発を経て屋敷地が成立した。そこには辻子が通され、屋敷地奥には畠が設けられたものの町通が形成されて茶屋や鍛冶屋、紺屋、能楽師などが居住した。

一方、西陣機業の源流は平安京で機業に従事した織工たちに求められ、その初期は以下のように西陣地域とは異なる文脈で展開した（高橋 1983）。

平安時代の織手はもともと律令制度上に位置づけられたが、11世紀には制度外で機業に携わる者が出現し、彼らは平安末期には大宿直と呼ばれる地域に集住するようになった。大宿直は衰微した大内裏の北東角に比定されるが、ここは近世西陣の領域外に位置する。当初の大宿直は方一町の区画であったが、室町期には相当な範囲を占めた。ここには織工だけでなく金融業者である酒屋や土蔵も居住し、洛中と区別されるようになっていった。

そして織工たちは室町將軍家直属の織物所に指定され、うち6家が宮廷装束製作を担う御寮織物所に任じられるなど、権力からの保護がなされた。しかしながら、大宿直は応仁の乱（1467-1477）の兵火を蒙り、織工は和泉国堺などへ離散した。

(3) 街区形成と千両が辻の繁栄

応仁の乱の戦火は、大宿直だけでなく、やや北の西陣地域にもより深刻な被害をもたらした。にもかかわらず、西陣地域の復興は早急で、1480年代には「構」を備えた繁華な市街地に再生していた（高橋 1983）。

この時点の市街地は、縮小した戦国期上京の「川_ヨ西組」であった。その西側には上京惣構が連なり、都市の境界を画していた。「川_ヨ西組」の範囲が、おおよそ先述の緩傾斜地に含まれるのと同時に、西陣西部の低位段丘面は惣構の外に置かれた。つまり、戦国期の西陣は都市の外縁上に位置していたことになる。これ以降、24町からなる「川_ヨ西組」を基本として17世紀初頭にかけて市街地が広がっていった結果、160余町からなる「西陣古町」が形成された（杉森 1983）。図1からは、大宮通を中心とする「川_ヨ西組」以来の市街地から、北と西を指向して現在の西陣の骨格となる街区が形成されていったことがわかる。この形成段階を反映してか、現在の大宮通東側では辻子や突抜を含む複雑な街区が形成されているのに対して、西側は横町を基本とした整然とした街区が形成されている¹⁾。

一方、離散していた織工たちは1490年代には京都への還住を果たす。しかし、居住したのは惣構の外に取り残され復興もままならない大宿直の故地ではなく、戦国期上京のなかで市街地化をみせていた西陣地域であった。ここに

西陣地域における西陣織の生産が本格的に始動することとなり、織豊期には明からの技術を取り入れて「唐綾」の発案を果たし、また「高機^{たかばた}」の技術を確立させた。

近世初期における西陣織への需要は奢侈の気風が広まるなかで拡大し、江戸での明暦の大火後の衣服需要を受けて一層本格化した。こうした需要を背景に幕府は長崎での輸入生糸の直買を認めて糸価高騰の際には幕府が所持した生糸を斡旋するなど、機業の保護を図った（佐々木 1932）。

以上のような権力からの保障を背景に、西陣機業内部は個々の事業主である織屋と、そのもとで機業に従事した主に女性からなる織物下織の2層で以下のように組織されていた（杉森 2008）。

織屋たちはそれぞれに本家・分家関係を基として織屋仲間に属した。そのうちの約半数が帰属した高機織屋仲間は、高度な紋織物を生産した。また、室町期に御寮織物司に任じられていた先述の6家は、引き続き公家や武家の装束の作製を引き受けて最高級の織物を生産していった。

近世西陣織の工程では分業化が進展したが、織物下織は工房内での技術の習得に応じて単純作業から機織りまでを順次こなしていった。

こうした制度と体制のもとで西陣織の生産規模は拡大を遂げ、17世紀末には7,000余機の織機数を数えた。今出

川大宮の交叉点では、原料となる和糸の取引がおこなわれ、下京の商人との間で千両箱が行き来したことから、ここは千両が辻と称された。このような繁栄により、西陣織は京都第一の産業として、市中の景気を左右するものとして捉えられるようになっていく（杉森 2008）。

（4）機業の縮小と商いの諸相

近世前期に繁栄を迎えた西陣機業であったが、それ以降は丹後国や上野国桐生などの新産地の勃興、または幕府の政策転換による保護・援助の解消を受けて、次第に勢いを失っていくこととなる（佐々木 1932）。この不況に追い打ちをかけたのは18世紀に発生した2度の大火であった。特に享保15年（1730）の「西陣焼け」では、3,797軒の民家が類焼し、3,000台以上の織機が焼失した。これにより生産空間の物理的な損失だけでなく、織工のさらなる流出を招いた（佐々木 1932）。

この時期の西陣織に関して、織物下織の零細性と流動性が指摘されており、彼女らは機業とさまざまな雑業を移動した（杉森 2008）。幕末の芝薬師町の場合、機業関係に従事したのは全体の6割であり、残りの4割はさまざまな商工業者であった。こうした点を踏まえれば、不況や火災に際して、下職の人々は機業以外の職に就いたことが想定できる。近世中後期における西陣地域の生業について、縮小した西陣機業だけでなく、他の生業にも言及しておきたい。

機業以外の生業について、大宮通では周縁・周辺地域からの物資の搬入によって中世以降に促された可能性が示唆されている（足利 1980）。この点に関して、近世前期成立の『京雀跡追』では大宮通界隈に猪や煙草、古道具を売る商家が存在していたことが記される（新修京都叢書刊行会 1967）。丹波国からの産物である煙草は、山国街道や周山街道などを通じてもたらされたと考えられる。古道具はもしかすると市中でのリサイクル品であって、西陣の人々だけでなく猪や煙草をもたらすような周縁・周辺地域の住人が買い求めたのかもしれない。また、明治2年（1869）には薪炭や野菜、塩肴、米、菓子などの販売に携わる住民が居住していたことが指摘されている（杉森 2008）。こうした例からは、周縁・周辺地域からの産物の売買を基とした西陣における商業活動の側面が確認できよう。

（5）西陣織生産地の拡散と景観の継承 / 刷新

近代の西陣と機業の展開については、以下のように報告されている（水島 2003）。幕藩体制の崩壊に伴い、生産と

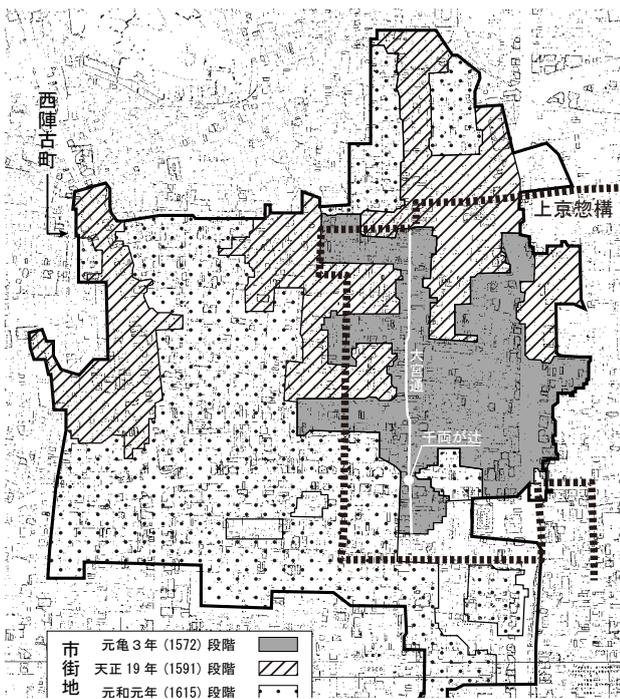


図1 16-17世紀における市街地形成²⁾

取引の枠組みとなっていた織屋仲間の制度が解消されたことで、新規に織屋が参入するなど近代黎明期の西陣機業界には混乱が生じた。さらに明治2年の東京奠都に伴って重要な顧客層であった公家、有力町人らの多くを失った。

こうした危機に対して、京都府は明治2年に西陣物産会社を、明治10年(1877)に西陣織物会所を設立し、取引の統制や品質の管理をめざしたが、いずれの改革も実を結ばなかった。一方で、京都府の援助を受けてフランスへ派遣された織業者は、ジャガードなどの最新鋭の設備と技術を西陣へもたらした³⁾。その結果、生産量を飛躍的に増加させ、織元や工場主から原料を得て製織に従事する賃織業者の雇用とその生産・生活空間である織屋の建造が促された。明治10年代の松方デフレも影響して、多くの小規模自営業者が賃織業者へと没落し、有力機業家と賃織業者の上下関係が確立した。

これ以降、西陣機業は戦後にかけて増産の傾向を見せる。近現代における機業家の分布を示した図2は、各年代により典拠とした資料が異なり「機業家」の指すところがまちまちであるものの、ここからは西陣織生産地域の拡大が確認できよう。また北郊の農地には「京都織物株式会社」などの大規模工場も設立された。

しかし、図2からは生産地が拡散する一方で、戦後には中心部での織屋の分布が空疎となっていることが確認できる。この背景には、産業構造の変化があった。金融機関を備えた中心部には製品の企画や準備、出荷を担う有力機業家が集中し、その外周部分や丹後地方では零細な賃織業者による「出機」がおこなわれるようになった(松井1979)。

こうした西陣機業の展開と併行して、明治大正期には大地主による旧武家屋敷などを対象とした小規模な土地集積が図られた。集積された土地では、最新の設備を有する工場などに利用される場合もあった。さらに昭和期にかけ、集積された区画は細街路や路地が通されることで細分化または開発されることが多かった(水島2003)。その場合、木造低層の町家や長屋が建設され、表は有力機業家の店舗となり、裏には西陣織生産に携わる徒弟が居住することで機業との関わりを物語る独特の町並みと空間が形成された(図3・図4)。図4には、路地奥に織屋を意味すると思われる「織」の表記が見られる。また、こうした開発から取り残された区画は昭和後期に駐車場や大規模建築へと変貌した。特に材料の搬入や製品の出荷に必要な駐車場が急増した(松井1979)。

昭和50年代以降、着物離れを背景として西陣織の需要



図3 大正期の糸屋町の町並み
京都府立京都学歴彩館「京の記憶アーカイブ」より



図2 近現代における西陣機業家の分布⁴⁾

が下火になる中で、先述した「出機」の影響も相俟って中心部での工場や織屋の閉鎖が進行した。こうした現象を前提として地主主導による共同住宅の建設が進み、昭和58年（1983）を境に転入者が急増した。転入者たちは、京都以内での住み替えによるものと、他府県からの一時滞在者である学生が中心となっていた（藤塚1992）。

近年では、新たに共同住宅を建てるのではなく、織子が起居した織屋そのものを異なる用途で活用する取り組みも以下のような展開を見せている（宗田2009）。西陣織の最盛期、有力機業家たちは織屋を所有し、そこに織子たちを住まわせて織物生産を進めた。織子の激減に伴って空家となった織屋の多くは、生活空間として貸しに出されることもなく、また課税の問題から取り壊しもされずに放置されていた。こうして打ち捨てられていた織屋は、1990年代後半からアーティストたちによって職住一体のアトリエ兼住居として着目されるようになった。こうした試みが新聞に取り上げられると、国内各地から町家への居住希望者が集まった。貸主と借主を結びつけ、町家の活用を担って来たのは「西陣ネットワーク」（平成7年〈1995〉設立）であった。現在は「町家倶楽部」（平成11年〈1999〉設立）として、西陣だけでなく東山区も対象に町屋の斡旋、活用を推進している。

（6）小括：固定と流動の「西陣らしさ」

西陣の性格に関して、都市内部にありながら村落のような固定性を持つという見解がある（松本1968）。この評価は、一見すると前述した近世以来の織子の流動性と相反す



図4 昭和26年の妙蓮寺界限
京都府立京都学歴彩館「京の記憶アーカイブ」より

るように思われるが、実は両者は併存可能な性質であり、むしろ双方の均衡によって西陣の文化的景観は形成されてきたといっても過言ではない。

というのも、まず西陣地域は中心地域である都市と周縁地域である近郊農村の中間領域に位置してきた。そして、中近世に形成された街区を素地とし、土地所有は基本的には近代以降においても緩やかな変動を見せるのみであった。こうした過程で形成された地割や町家は、西陣の文化的景観の骨格となっている。一方、この固定的な都市空間に暮らす人々は、西陣織の織子や寄宿する学生のように流動的な性格を有した。西陣機業の盛衰をはじめとするコンテクストに即して都市民が入れ替わるなかで、景観構成要素を基本的には継承しつつ、手を加えてきた。織屋を活用する近年の町家再生は、西陣らしい緩やかな都市の新陳代謝を表す好例と言えよう。（竹内 祥一郎）

2 現在のすがた

西陣の範囲は捉え方によって様々であるが、『京都御役所向大概覚書』（享保2年〈1717〉頃）は、東を堀川通、西を七本松通、北を今宮神社御旅所（鞍馬口通一筋北）、南は一条または中立売通に囲まれた範囲とする。

（1）景観の要素

町割りは、南北道が優位（街区が南北に長い）な洛中と異なり、東西道が優位なのが特徴である（図5）。東西優位の町割りは西陣の範囲とほぼ一致する。智恵光院通から大宮通にかけては南北に細長い建物が多い。いわゆる鰻の寝床型で、通り庭の奥を吹き抜け土間にした職住一体の織



図5 南北に細長い町家が並ぶ東西の通り

屋建てが並ぶ。このうちの染屋では北側からの自然光によって色味を確認するといわれる。また染める工程で蒸気を排出する煙突も多く見られる。これには屋根の棟部分に乗せた煙出しのような形状のものや、小型の煙突、作業場に取り付く大きな煙突（図6）も見られる。

また通りに漏れる機の「音の景観」が、来訪者にここが西陣であることを強く意識させる。路地に並ぶ長屋住宅が多いのも特徴である（図7）。近年ではこのような町家や長屋に、織物だけにとどまらない若いクラフト作家などが工房を構えることが増え、新たなものづくりが息づき始めている（図8）。

浄福寺通では間口の広い建物が多い。問屋でありつつ制作をする店もある。2階には座敷があり、接客、検品、住居としての機能も持つ。この通りは道幅も広く、電柱の地中化や石畳風舗装の整備が進んでいる（図12）。

細密な分業によって成る西陣では、織元・機業のみならず、企画製紋（図案・紋意匠図・紋彫・紋編）、原料準備（原糸・

撚糸・糸染・糸繰・整経）、機準備（織機製造・機料・機拵・杼・綜統）・整理加工などの各業者が地区内に集住している。織物業以外では、共働きの職人町であるために出前も請け負う食堂や、銭湯、取引のための銀行が多い。特に大宮通では飲食店が多く、昼頃には店から岡持ちを持って向かいの建物へ入る姿などを見ることができる（図9・13）。また一方で、大宮通には糸屋格子の町家もみられる。

今出川智恵光院の交差点より東南に位置する栄町と鏡石町の間の位置では、南北の敷地に大きな段差がみられる（図10・11）。ここは豊臣秀次が増築したとされる聚楽第北之丸の堀跡と陸部の境と推定されている。

（2）地域での活動

上京区は、地蔵盆の実施率が88.7%と東山区に次いで高いなど、地域のつながりの強いまちである。

まちづくりについては、西陣では20年以上前から地元の人によって活動が進められている。「西陣織の産地の継承はアーティストの集まりから始まる」として、織元会社



図6 棟部分の開口部と巨大な煙突



図7 西陣の長屋住宅



図8 クラフトショップ



図9 出前をおこなう食堂も多い大宮通

の経営者や、新たに移住してきた写真家等と共にアーティストと町家を結ぶネットワークを広げていった。その中で町家を工房、住居、店舗等に活用したいアーティストと家主を結ぶ仲介システムを立ち上げた。平成7年(1995)に「ネットワーク西陣(NWN)」が結成され、平成11年(1999)にはそれまでの活動を集約した形として「町家倶楽部ネットワーク」が立ち上げられた。空町家や空工場等の調査、借りたい人と家主との「京町家の仲人」のシステムの構築と実施などを実施している。これまでアーティストを中心に、暮らしとアートの場として町家が選ばれ、170組のアーティストとその家族が入居していった。場所も西陣に限らず、東山区にも拠点ができるなど活動が広がっていった(宗田2009)。

景観部局と密接にかかわる組織としては、西陣まちづくり委員会による地域の活性化や高齢化問題に対する早い時期からの取り組み、大黒町まちづくり協議会では、景観保全のための協定を独自に結んでいる。

京都市では、総合企画局が、「西陣を中心とした地域活性化ビジョン」を推進し、西陣地域の活性化の担い手となる得る若手クリエイター等を地域に呼び込む事業などをこなっている。(千木良 礼子・堀 大輔)

註

- 1) 足利(1980)は、西陣地域において横町が卓越する原因に、その南部に存在した大内裏跡地が「野」(内野)と化したために、内野以北への南北方向の道路の延伸が進まなかったことを求めている。
- 2) 杉森(2003)、高橋(1983)、本多(2013)をもとに作成。
- 3) 明治初期の西陣機業における技術的な発展に関して、今宮神社や北野天満宮には「新織縺子碑」や「稲田玉鳳翁碑」、「西陣名技碑」といった新技術発案者の顕彰碑が現存する。
- 4) 松井(1979)所収図に加筆。



図10 北之丸北堀推定地の段差(左:堀跡, 右:陸部)

参考文献

青山吉隆(2002)『職住共存の都心再生—創造的規制・誘導を目指す京都の試み』学芸出版社

足利健亮(1980)「自然と景観」『史料京都の歴史7 上京区』平凡社

京都造形芸術大学通信教育部webマガジン・アネモメトリウェブページ「京都 西陣の町家とものづくり」<https://magazine.air-ukyoto-art.ac.jp/feature/59/>, 令和2年2月1日閲覧

片平博文(2013)「平安京北郊における有栖川の流れ」『中西健治教授退職記念論集』

片方信也(2007)『西陣—織のまち・京町家』つむぎ出版

京都市編(1973)『京都の歴史6 伝統の定着』学芸書林

京都市編(1980)『史料京都の歴史7 上京区』平凡社

京都市(2019)「西陣を中心とした地域活性化ビジョン」<https://www.city.kyoto.lg.jp/sogo/page/0000251782.html>, 令和2年2月1日閲覧

京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課(2017)『京都市文化財ボックス31 天下人の城』

小林紘来(2016)「生産構造からみた都市と建築の横断的分析に関する研究—京都西陣地域を対象として—」京都市工芸繊維大学大学院建築学専攻修士論文

佐々木信三郎(1932)『西陣史』芸艸堂出版部

新修京都叢書刊行会編(1967)『新修京都叢書 第1巻』臨川書店

杉森哲也(2008)『近世京都の都市と社会』東京大学出版会

高橋康夫(1983)『京都中世都市史研究』思文閣出版

豊田武(1949)「西陣機業の源流」『社会経済史学』15(1)

藤塚吉浩(1992)「京都市西陣地区におけるジェントリフィケーションの兆候」『人文地理』44(4)

文化的景観学検討会(2016)『文化的景観スタディーズ01 地域のみかた—文化的景観学のすすめ—』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所

本庄栄治郎(1930)『西陣研究』改造社

本多健一(2013)「中近世京都の祭礼と空間構造—御霊祭・今宮祭・六斎念仏—」吉川弘文館

松井久美枝(1979)「大都市機業地西陣の地域構造—その中心と縁辺部における実態調査より—」『人文地理』31(2)

松本通晴(1968)「西陣機業者の地域生活—とくに西陣機業を規定する地域生活の特質について—」『人文学』109

水島あかね(2003)「西陣における都市空間の再編」『京・まちづくり史』昭和堂

宗田好史(2009)『町家再生の論理—創造的まちづくりへの方途』学芸出版社

森谷尅久(1999)「西陣機業の歴史と展開」『繊維製品消費科学』40(11)

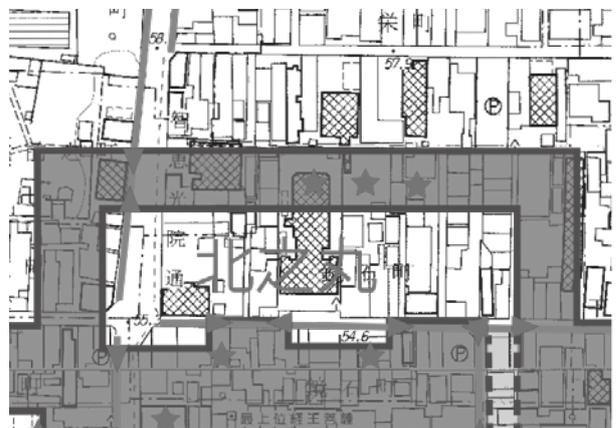


図11 北之丸北堀推定地

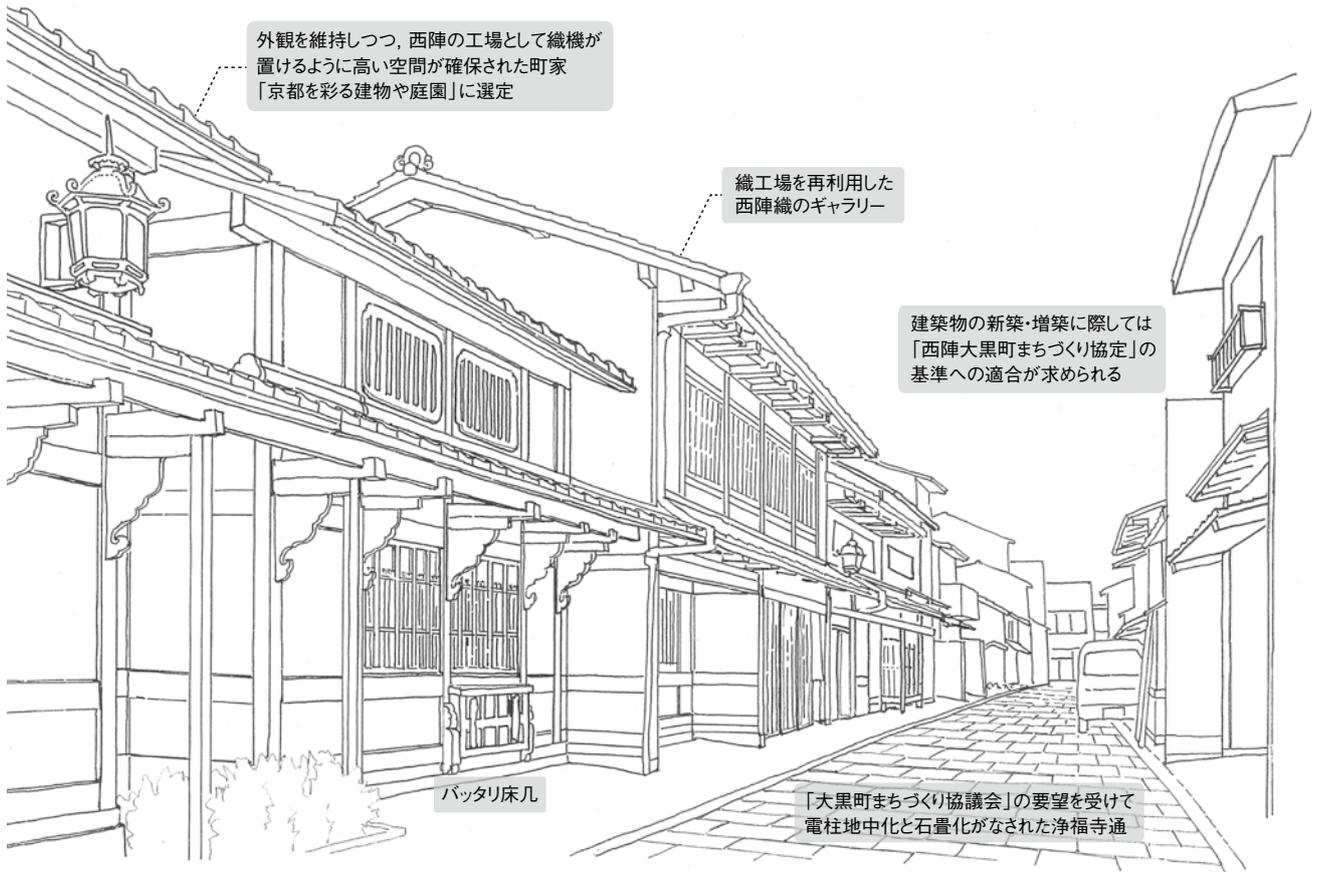


図12 浄福寺通の図解（北をみる）

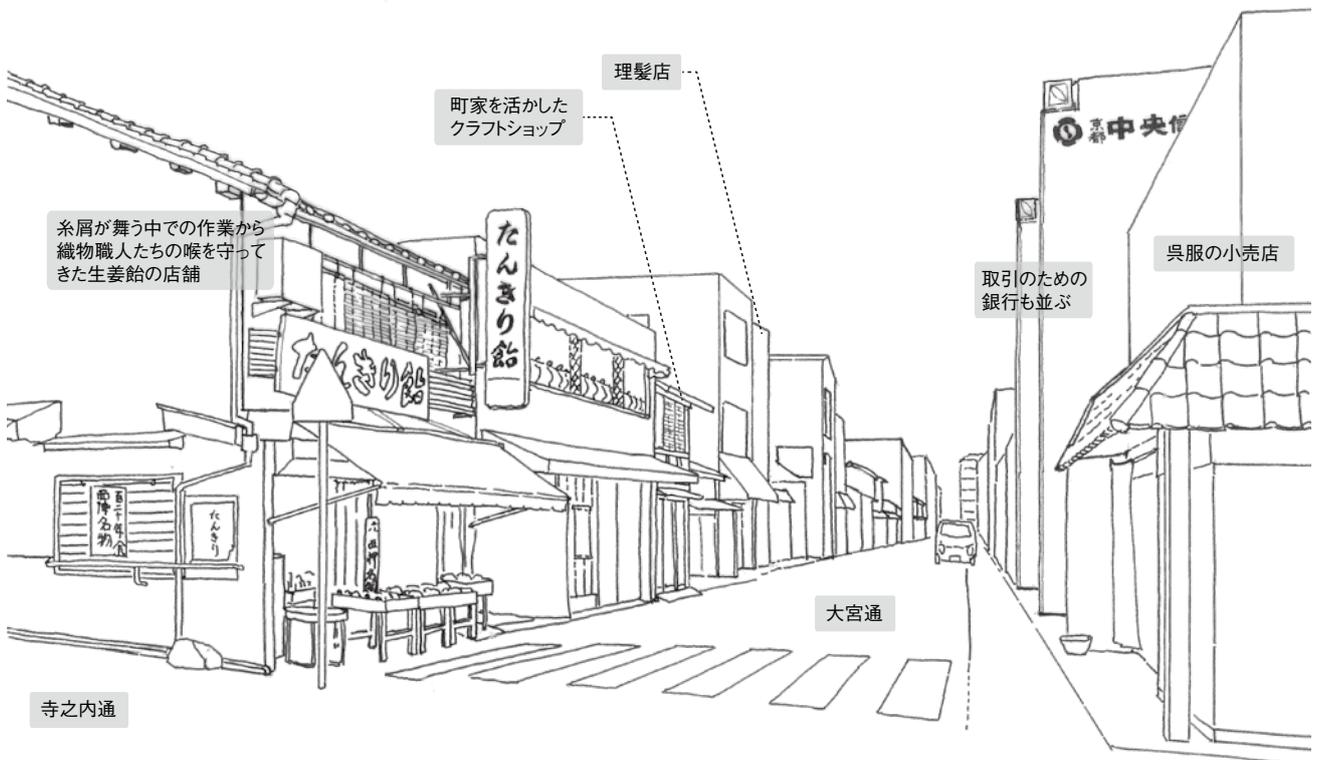


図13 大宮通寺之内通角の図解（南をみる）

第3節 東山—景勝ヒンターランドの信仰・遊歩空間

「おもしろの花の都や。筆に書くとも及ばじ。東には祇園清水落ちくる瀧の。音羽の嵐に。地主の桜は散り散り」『閑吟集』(永正15年・1518)

この室町期の歌謡で、花の都=京都の筆頭として表象される「祇園清水」を含む東山は、現代京都において観光客からの人気を集め(京都市産業観光局2017)、京都の周縁地域における歴史的観光地として発展を遂げてきたといえる。しかしながら、東山の文化的景観のストーリーは観光業のみに収斂されるものではない。本稿では、東山の文化的景観の歩みを論じたい。その営みとイメージを明らかにし、文化的景観としての価値を探っていききたい。

1 東山における景観の変遷

東山の景観構成要素に関する史料が網羅的に集成された『史料京都の歴史10 東山区』に基づき、疎漏ながら構成要素の消長を示した(図1)。構成要素の消長のあり方から、寺社が特出する古代・中世、居住地の開発が進む近世、土地令を契機に諸施設が成立する近現代に区分できる。以下では、先行研究の成果を踏まえながら、区分した各時代での景観の変遷過程を述べる。

なお、広義の東山とは、東山山地の稜線から鴨川東岸に

かけての一带を指すものである。その北辺の岡崎は、平成27年(2015)に「京都岡崎の文化的景観」として国の重要文化的景観に選定されている。以下では、岡崎以南の現在の東山区に相当する狭義の東山の景観形成史を分析した上で、東山全体の景観形成の特徴を明らかにしたい。

(1) 京都近郊の副都心・葬送地としての確立

図1中、史料の乏しい古代中世において、ひととき存在感を誇る構成要素が寺社である。本書第3章第1節でみたように、これらの寺社は東山山地のなかでも侵食谷を避け段丘上を指向して立地した。6・7世紀には存在が確認さ

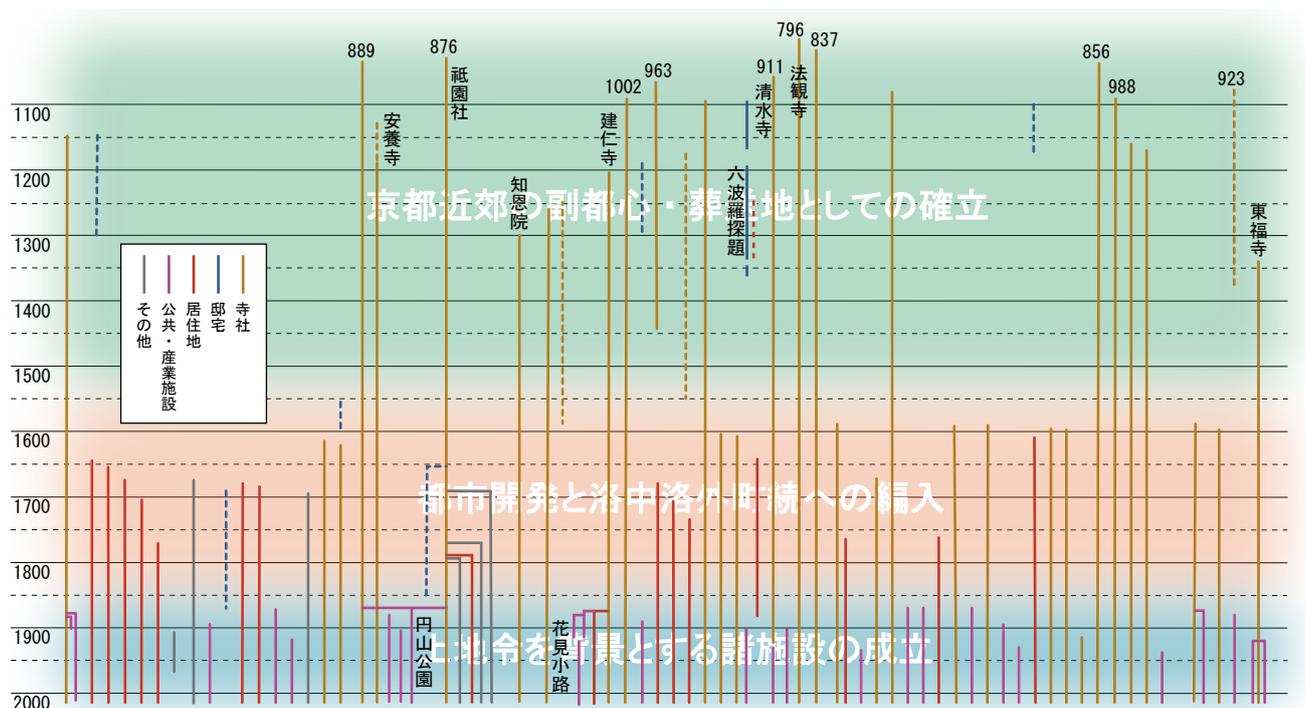


図1 東山における景観要素の消長¹⁾

れる法観寺や祇園社（祇園感神院、明治以降は八坂神社）は、いずれも渡来氏族の八坂造が創建に関与したと考えられている。

延暦13年（794）に平安京への遷都がなされると、平安京内への寺院造立が禁じられた反面、東山への寺社の建立は貴族らによってより一層進展した。例えば、法観寺に隣接する雲居寺^{うんこじ}は9世紀前半に桓武天皇の冥福を祈った菅原真道によって創建された。また、10世紀前半に撰関藤原忠平によって創建された法性寺は、代々の撰関家・天皇家の寄進によって寺域を拡大し、法性寺に隣接した泉涌寺は、平安初期に創建された仙遊寺を13世紀に再興するかたちで建立された。

寺院の建立に関連して貴族の邸宅も営まれるようになる。なかでも、先述の法性寺に隣接していた法住寺の跡地²⁾には、後白河法皇の院御所である法住寺殿が造営された。さらに院近臣の援助を受けて北殿と南殿を備えた御所に発展し、平清盛寄進の蓮華王院（三十三間堂）や、建春門院御願の最勝光院といった寺院が、法住寺殿に付属するかたちで成立した。これよりやや以前、12世紀初頭には平清盛の祖父正盛によって六波羅の邸内に持仏堂が建立され、12世紀中葉には藤原忠雄による粟田口山荘の造営に伴って邸内に堂舎が造営されている。これらの事例は、平安後期における構成要素としての寺院と邸宅の密接な関係を明示している。

低位段丘上に立地した平家の六波羅邸に関して、『平家物語』には「六波羅殿とてののしる所は（中略）元方町なりしを此相国（清盛）の時四丁に造作あり。是も屋敷百二十字余に及へり」³⁾と記されている。「屋敷百二十字余」は誇張であるとしても、平家によって六波羅の都市化が進んだのは間違いないと考えられる。平家の都落ちにともない邸宅が灰燼に帰した後も、その跡地に源頼朝の邸宅が営まれ、のちにはここに鎌倉幕府の六波羅探題が置かれた。六波羅探題の周辺には被官らの邸宅が立ち並び、六波羅は「武家の空間」として景観形成が進んだ（高橋1996）。しかし、室町幕府が室町に拠点置き、守護大名らの邸宅も洛中に営まれるようになる。一時、足利義政によって慈照寺銀閣が執務の場とされることがあったが（野田2016）、東山の政治的副都心としての機能は休止したと言える。

図1中において、わずかに居住地が確認できるが、それらは茶屋などからなる寺社の門前町である。中世京は、

いくつもの都市からなる「巨大都市複合体」であったとされるが、東山では、寺社とその門前町の組み合わせからなる都市群が存在していた（山田2016）。東山都市群のなかのそれぞれの都市は独立性が強く、自己の権益保障のためには争論も辞さなかった。例えば、治承3年（1179）には祇園御霊会の馬上役をめぐって「清水坂車借」と「祇園社大衆」が対立して放火に及び、法観寺の八坂塔が炎上するなどの事件⁴⁾も勃発した。

古代中世の京都東山において、もう1点重要なのは、鳥部野での葬送である。この点は景観要素として史料上は捉えがたく、図1には反映されていない。鳥部野での葬送は、天長3年（826）には親王や皇女らが鳥戸寺に葬られたのが史料上の初出であり、万寿4年（1027）には藤原道長が葬られている。

山田邦和（2009）によると、鳥部野の墓地は、平安京の近郊で耕作地や集落の少ない地域に営まれ、平安京の成熟に伴って自然発生的に成立し、皇族や貴族の墓が存在するなかに庶民の葬送地⁵⁾も広がり、被葬者の範囲や階層が限定されない大規模複合葬地であったという。また、鳥部野と呼称されるエリアは、平安時代には旧鳥部郷の南辺であったのに対して、六波羅や清水坂へと移っていった。

さらに、山田（2012）によると、鳥部野や清水坂、もしくは五条中島には、都市と郊外の境界にあって、被差別民が集住した。この被差別民空間は鳥部野での葬送に関与する人々から誕生し、彼らの生産活動の場となっていった。

古代中世の東山は、京都近郊という条件のもと、山麓や低位段丘に寺社や邸宅の造営が進み、寺社に付属して門前町が形成され、平家六波羅邸や六波羅探題などの邸宅・機関の周辺には、その被官の居住地が営まれた。こうした都市化の動きを見せる一方で、都市周縁の葬送地として、鳥部野の墓地が丘陵地に形成された。

（2）近世における開発と洛中洛外町続への編入

統一政権がもたらした兵乱の収束と新秩序により、東山における景観形成は新たなステージへと移行した。

知恩院の場合、天正元年（1573）に足利将軍を奉じて入洛した織田信長によって陣所とされ、その行賞として諸堂修葺のための費用が下付された。さらに豊臣政権により所領の確定がなされ、財産の保護と固定化が図られた。そして、徳川家康が征夷大將軍に任命されると、彼は生母の菩提を弔うために知恩院の寺域・寺領拡大と堂舎建設に乗り

出した。この事業によりほぼ現在の知恩院の境内が整備された反面、寺域の拡大に伴って周辺の寺院が移転を余儀なくされた。

このような権力による諸寺の兵火からの再興、または強制移転は、豊臣政権による方広寺や祥雲寺（のちの智積院）の建立と御土居築造に伴う天部村の移転や、徳川政権によって二条城建設予定地の町々が方広寺近くへ移転され「新シ町大仏組三十三町」が形成されたことなどにも認めることができる。

こうした上からの景観形成は近世初期に顕著に見られたが、近世後期においても、祇園社境内の祇園北林が「仙洞御所御造営土取場所」に指定されるなど、権力側が洛中を支える近郊として東山を認識していたことを示している。

一方で、図1からは、17世紀後半以降、居住地の成立が活発化している様子が確認できる。これは人口の膨張が招いた開発ではなく⁶⁾、アクターとしての町や寺社、または「開発人」らの請求を背景として加速した扇状地における都市開発であった。17世紀後半、洛中での新規町屋敷の開発は限界に達していた反面、鴨川での「寛文新堤」築造により河原が開発の対象となり、さらに鴨東の地が雑色によって一括的に支配されるようになると東山での町地開発は本格化した（高橋ほか編 1993）。その際に活躍したのが「開発人」、または「地面支配人」と呼ばれる開発専門業者であり、有力寺社に対して都市開発をもちかけ、地代収益を高めることを斡旋した。こうして成立した新地には、大規模な借家が設けられ、洛中から追いやられた零細民や流入民が居住する一方で、新地発展を図る町が、公儀の許可を得て茶屋や水茶屋を設立することで風俗業が営まれた（高橋ほか編 1993）。こうして洛外東山に開発された町地は幕府によって「町続町」と認可され、京都の都市域として組み込まれていったのである（朝尾 1996）。

開発が進むなかにあつて、京都町奉行所で与力を務めた古老は、東山の原風景を以下のように回顧した。祇園新地開発以前、祇園から知恩院門前にかけての一面は「郊野」であり、そのなかを通る繩手通は人家もなく田畠が広がる文字通りのなわてのなわてであり、三条大橋から祇園社の西門を望むことができた⁷⁾。

扇状地の「郊野」が開かれていく中で、「真葛原」と呼ばれた知恩院山門以南の段丘上の一帯は、地目上は原野のままに、鎌倉時代の僧慈円によって「わが恋は松を時雨の

染めかねて真葛が原に風騒ぐなり」と詠まれた面影をとどめていた。しかしながら、「いにしへは閑寂幽静の原野にして秋日には殊さら名にしおふ真葛の裏葉のうら悲しかりし土地なりしも今は洛下の騷客遊興のかよいしよ往返所となりて四時ともに春色ある田園」⁸⁾に様変わりしており、場所の利用と性格は大きく変容していた。

このような遊山の対象となった景勝地には、真葛原の隣に広がっていた既出の祇園林も該当する。『花洛名所図会』によれば、「いにしへは雑木林なりしか、今は彼岸桜数株を植て花の頃は一しほ美観」を誇り、馬場や揚弓屋、栗飯などを振舞う料理屋があり、年間を通じて遊客で賑わう「雅俗兼用」の「繁盛の地」となっていた⁹⁾。人々でごった返す林は、桜の植樹によって美しく仕立てられた二次的な自然であった点は興味深い。

近世の東山山地における植生は場所により異なり、比叡山附近や阿弥陀ヶ峯以南は柴草からなる低植生であったのに対し、その間のおおよそ狭義の東山に該当する範囲の植生は松林を中心とし、寺社の周辺には桜や楓からなる「よい林」が散在した（小椋 1992）。祇園林の植生はまさに寺社周辺の「よい林」であり、その背後の高植生と併せて山腹の景観が保全されていたと言える（本書第2章第1節参照）。

（3）近現代における上地を前提とする諸施設の建設と「京都市らしさ」の表象

図1における近代の特徴として、公共施設と勤業施設の登場が挙げられる。これらの存在を示す線が、寺社から分岐していることからわかるように、多くは寺社の旧境内に開設された。この土地利用の変化をもたらしたのが、明治初年に出された上知令である。上知令によって収公された寺社の所領や境内が、新たな施設を建てる素地となったのである。

このような動きの顕著な例として、建仁寺旧境内の利用が挙げられる。明治5年（1872）まで、建仁寺とその塔頭の境内は54,179坪を誇ったが、上地により23,479坪にまで減少した¹⁰⁾。収公された30,000坪余りは、翌年に払い下げられて民有地となり、花見小路、初音小路、南園小路、青柳小路が通された¹¹⁾。京都府は、「府下人心開化ノ域ニ進歩セルニ従ツテ、道路ノ間モ大ニ開キ、市井ノ隙地ヲ画シ、各所ニ新路ヲ造リ、以テ庶民ノ往来ニ便ス」と捉えたが¹²⁾、建仁寺側からは敷設中止の請求もなされていた¹³⁾。

結局、形成された街区には、隣接する祇園新地の遊女のための女紅場とその分局である養蚕所や製茶所、または療病院、歌舞妓場が設けられた。さらに、払い下げられた建仁寺塔頭の正伝院の茶室では芸妓によって茶が振舞われた。

円山公園の成立も、真葛原の六阿弥や祇園社の上地・解体を前提とするものであった（丸山 1984）。このほか、産寧坂伝統的建造物群保存地区の一画をなす石塀小路の場合も、上地を経て払い下げられたのち、資産家によって土地集積と宅地造成が図られ、大正初年にかけて現在のような石畳と石塀と高垣の構えを備えた町並みが形成された（三浦ほか 1997）。こうして形成された円山公園や花見小路、石塀小路などは、現在の京都において「京都らしい」景観として認識されるものである（後述）。

石塀小路を含む産寧坂伝統的建造物群保存地区は、国の重要伝統的建造物群保存地区として保存の措置が図られている町並みであるが、用途が住宅から観光商店へと変更される建物が多く、さらに所有権の移動も激しく、伝建地区外に居住する所有者によって観光商店が営まれる例が増加していった（金・宗本 2001）。この調査は平成 11 年（1999）時のものであるため、現在は観光への傾斜は一層加速していると考えられる。近現代に形成された「京都らしい」と認識される路地や町家は、外観上、冷凍保存がなされながらも、内部の用途や営みといったソフト面を観光に対応するかたちで柔軟に変化させてきた。

（4）小結 ― 岡崎との比較から

岡崎と狭義の東山は、京都東辺の周縁地域として歩みを重ねてきた地域である。両地域は、古代中世に政治・宗教の副都心として邸宅や寺院の建設が進んだと言う点で共通するが、それ以降の景観形成のあり方は大きく異なるものであった。

近世、岡崎は京都で消費される聖護院だいこんなどの蔬菜生産を担う農村へ変貌した一方、東山は幕府の認可の下で寺社を開発主として町の形成が進み、町続町として都市域に編入された。

幕末の岡崎では藩邸の設置が進み、再び政治・軍事都市の相貌を呈したが、明治初年にこれらは撤去され、さらに南禅寺境内地が上地されることで近世以上の空地が広がった。琵琶湖疏水の建設と第 4 回内国勸業博覧会の開催以後、別荘地や岡崎公園の建設が進み、再び大規模な土地利用が展開された。一方で、すでに都市化が進行していた東山で

は、大規模な土地利用はなしえず、寺社境内の収公と払い下げを経て、各種の施設や小路が成立した。こうして近現代に形成された東山の町並みは観光化の中で新たな価値づけがなされている。

つまり、岡崎は都市と農村を繰り返し経験する反復的な土地利用がなされたのに対し、東山は都市化という一貫した方向の中で文化的景観の形成が進んだといえる。

また、各時代において大規模な土地利用がなされた岡崎に対して、東山の文化的景観はより細やかな規模で累積的に形成されてきた。それゆえ、東山の文化的景観は小さな景観単位の集合体として捉えることができる。具体的な景観単位として、中・近世の開発を経て花街が形成された祇園界隈、都人が通う近世以来の遊興地・園地であった円山公園附近、信仰と観光を背景に発展した清水寺参道、葬送に関係する冥界性を備えた六道の辻界隈、葬送地として位置づけられた鳥辺山や阿弥陀ヶ峰、中・近世の権力者によって邸宅や寺院が造営された六波羅・七条附近などが想定できる。

こうした多様な景観単位を含みこんだ周縁地域である東山は、中心地域との関わりがなからず、独自の文化的景観を形成してきたと言える。

2 営みの持続と変容

（1）祈りと遊山

東山での人々の営みの古層を探るため、貴族日記から「東山」の記述を抜き出した（表 1）。

ここに表れる貴族の活動は、「仏事」と「遊山」に二分できる。「仏事」と捉えた活動の内訳は、寺院での参詣や供養、または葬送である。平安時代中期に藤原実資によって記された『小右記』には「打金鼓」という表現が頻出するが、これは仏堂に取り付けられた「金鼓」を打ち鳴らしたことを意味すると考えられる。そのほかにも、『実躬卿記』では藤原為経の娘がその母の一周忌にあたって、母が最期を迎えた「東山草庵」で写経などをして菩提を弔ったことが記録されている。さらに、『看聞日記』には、今出川家の「南向殿」を葬送するために左大臣以下の家族や下人、または尼僧らが東山の宝幢寺へ赴いていることが確認できる。

一方で、「遊山」のほとんどは花見である。これは旧暦

表1 貴族日記にみる東山での営み

年・月/日	記事	出典
天元5 (982) .2/8	〈左藤原為長, 同師頼右大江匡衡,〉向東山打金鼓, 〈寺數十一金〔ケ〕寺,〉晚景帰	『小右記』
寛和1 (985) .3/6	六日, 庚戌, 早朝参院, 侍臣為打金鼓向東山辺, 便見花, 晚景到民部卿 (藤原文範) 所	『小右記』
寛和1 (985) .3/7	《院覧東山花事》七日, 辛亥, 依召早朝参入院, 為御覧花御東山, 侍臣皆布袴衣也, 先御白河院, 次円成寺, 次観音院, 供御膳, 右大将, 藤中納言追候,	『小右記』
寛和1 (985) .3/13	十三日, 丁巳, 早朝院人々相共向東山辺, 見山花, 向小野, 午後雨降, 臨晚帰浴	『小右記』
長徳3 (997) .2/10	早詣東山, 打金鼓五十寺, 左衛門督・源拾遺同道,	『小右記』
寛弘7 (1010) .8/7	七日, 癸丑, 東山観音寺, 被渡一条北方, 詣彼寺	『御堂関白記』
長元2 (1029) .3/2	諸騎駒馬, 先到六波羅密寺, 出自其寺經東山到白河院, 於文義 (小野) 山庄被食,	『小右記』
天仁1 (1108) .4/2	此十余日未定之間, 数千軍兵相禦之間, 東山・河原・賀茂・吉田之辺, 下人之田畠為兵	『中右記』
弘安10 (1287) .2/27	廿七日, 晴, 今日東山花歴覽, 万里小路大納言: 藤中納言: 右兵衛督: 右京大夫: 為雄: 師行: 公尹: 下官: 親家: 為俊等参, 各乗車, 阿彌陀院: □□院: □居寺: 長樂寺: 禪林寺殿: 法勝寺等花御歴覽	『実躬卿記』
正応5 (1292) .3/21	十八日参禅林寺殿, 予参御車, 如法密々東山花歴覽, 入夜著御,	『実躬卿記』
永仁3 (1295) .11/5	晴, 参白川殿, 今日為花歴覽臨幸東山, 謂鷺尾: 阿彌陀院: 長樂寺: 雲居寺等也	『実躬卿記』
乾元1 (1300) .11/5	又蜜々東山花有歴覽, 予乗車参御共	『実躬卿記』
正安2 (1300) .11/5	(藤原為経室) 他界, 〈日来所勞間, 經廻東山辺,〉仍母堂 (為経女) 渡御他所	『実躬卿記』
正安3 (1301) .2/19	(為経女) 聊修小仏事, 仍有仏供養事, 於東山草菴 (最期之所) 一日経書写供養	『実躬卿記』
永和1 (1375) .9/23	晴, 東山辺有出遊事	『後深心院関白記』
康暦1 (1379) .10/13	晴, 歴覽東山辺寺院, 及晚帰宅	『後深心院関白記』
永徳1 (1381) .7/25	昨日東山墳墓参詣之間, 預御札候けり, 晩頭罷帰候,	『後愚昧記』
応永23 (1416) .3/4	於東山宝幢寺令茶毘, 左府・大納言・宰相中將・女中・家僕等悉罷向云々, 慈雲院比丘尼達・相国寺僧達, 其外比丘尼・尼衆等済諷経罷云々,	『看聞日記』
応永32 (1425) .7/12	中御門宰相 (宗継) 等, 詣東山泉涌寺, 彼寺者律宗也, 開山俊仍法師	『薩戒記』
応永32 (1425) .9/10	午後快晴, 今日上皇御幸東山泉涌寺, 予可候御留守之由	『薩戒記』
応永33 (1426) .12/25	向東山救願寺, 而赴彼所之日, 自路上病気発動	『薩戒記』
正長1 (1428) .7/14	被奉入東山若王寺 (忠意僧正房也,) 云々	『薩戒記』
正長1 (1428) .7/28	先是自武家奉迎取, 奉入東山若王寺	『薩戒記』
正長1 (1428) .7/8	天晴, 今日為主上御惱御祈, 於東山泉涌寺被頓写五部大乘経	『薩戒記』
永享4 (1432) .3/11	晴, 室町殿 (足利義教) 今日花御覧, 東山・花頂: 若王子等御出	『看聞日記』
永享7 (1435) .7/23	殊勝風流云々, 此間東山諸方花御覧	『看聞日記』

実線を施した箇所が「仏事」、点線を施した箇所が「遊山」に関わる記事である。東京大学史料編纂所作成データベース「古記録フルテキストデータベース」を利用して作成。

の2・3月になされ、上皇や室町将軍が配下の者を引き連れておこなっている。永仁3年(1295)の花見では「鷺尾・阿彌陀院・長樂寺・雲居寺等」の花を「歴覽」しており、他の花見でも「歴覽」という表現がみられることから、一か所での花見ではなく、数か所をめぐり、面的に東山を堪能していたと推測される。そして、この過程において貴族は東山の花を歌に詠んだ。冒頭にあげた『閑吟集』の一節は、こうした東山の風景を愛でる行動や視線が庶民層にも普及していたことを示している。

狂言『武悪』の、東山へ遊山にかけた主従が、成敗したはずの家僕の幽霊に鳥部野で遭遇するという場面は、遊山の対象でもありながら、仏事に関わる葬送地でもあった東山の二面性を如実に示している。

(2) 東山観光の変遷

室町期から戦国期にかけて、洛陽三十三箇所観音霊場のような霊地名所を巡る寺社参詣が庶民の間でも流行し、やがて信仰目的であったはずの名所めぐりが、物見遊山の性格を強めていった(高橋2015)。こうして、信仰と遊山という別個の営みは近接していくこととなった。以下では、近世・近代・現代におけるガイドブック類で提示されたモデルコースと、名所の性格は図示した図2・3をもとに、観光の実態と変遷を述べる。

近世は、京都にとって観光都市へと変貌を遂げた時代である(鎌田2000)。そして、京都旅行の需要に応じて多種多様な名所案内記が作成されたなかで、宝永3年(1706)に三条大橋西詰の本屋から刊行された貝原益軒の『京城勝覧』は、初めて日割のモデルコースを設けた画期的な名

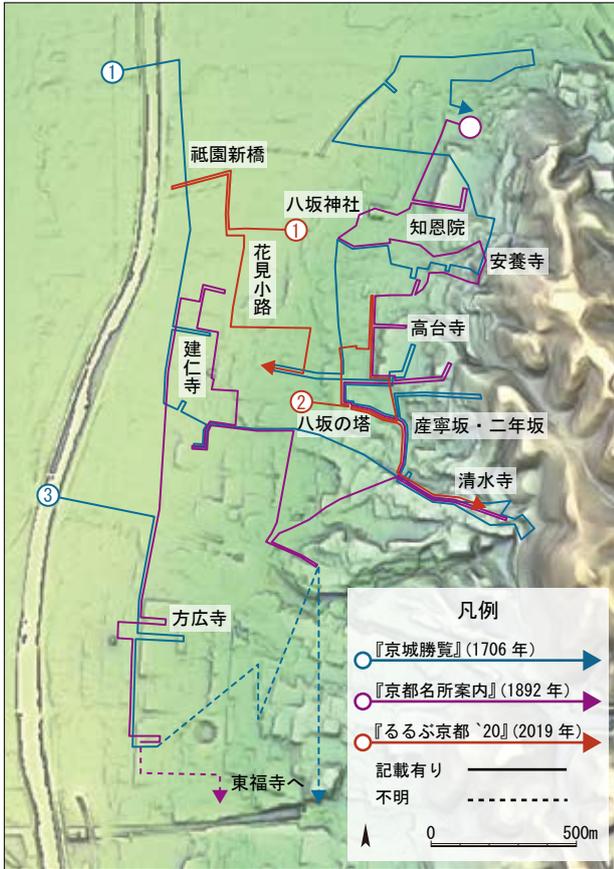


図2 各ガイドブックのモデルコースと地形条件¹⁴⁾

所案内記であり、近世を通じて影響力を持った（金 2010）。16日のモデルコースのなかで、3日間は東山の名所めぐりに割かれている。『京城勝覧』に記されたそれぞれの名所の性格は、以下のように分類できる（図3）。

「遺産」は社寺の歴史や文化遺産の価値を示す記述がなされる名所である。「伝を以て見るべし」などの記述が示すように、文化遺産は常に開かれた存在ではなかった。その反面、このころからおこなわれるようになった寺社での御開帳にあたっては多くの参詣者が訪れた。

「植栽」は、境内の桜や紅葉、藤といった花や植栽の見事さが評価されたものである。『京城勝覧』の記述は、作者の益軒自身の京都経験が反映されているとされるが（金坂 2011）、確かに益軒の元禄年間の日記からは東山の桜の「佳景ニ驚_レ目」し、老齡ゆえに「東山之花永訣也」と名残を惜んでいる姿が確認できる¹⁵⁾。

また、「遊興」では遊興の場としての性格が表現される。安養寺境内の六阿弥は東山西麓の起伏を活かした庭園と建築を備え、京の町を眺めることができた「貸座敷」は詩歌連俳・歌舞遊宴の場として知られた（出村ほか 2001）。益軒も出版業者の接待を受け、晩餐と琵琶法師の弾き語りを楽しんでいた（横田 2018）。『京城勝覧』での安養寺の眺望や料理に関する記述¹⁶⁾は、この時の経験に基づくものかもしれない。

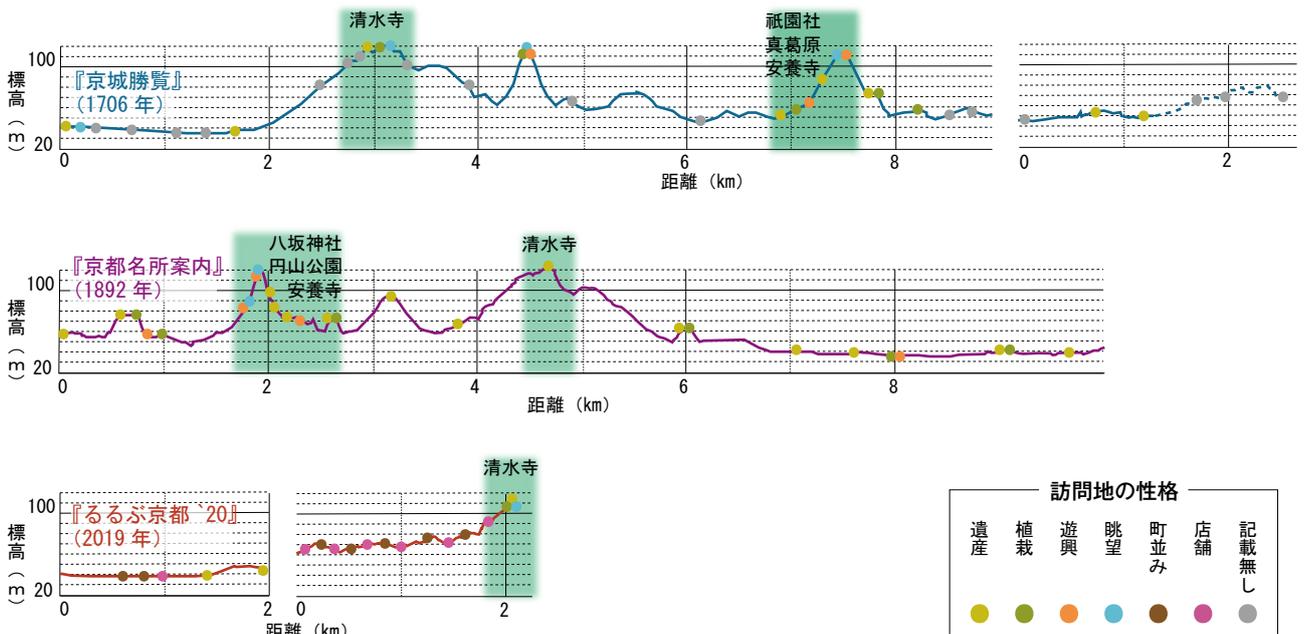


図3 モデルコースと名所の性格¹⁷⁾

見晴らしのよさが記された「眺望」の名所は、三条大橋を除いて、京都の町を俯瞰できるような標高の高い地点に位置している。

図から、祇園社から清水寺にかけてみられる名所は、さまざまな性格を兼ね備えて成立していたことがわかる。近世の名所は、古歌や由緒から意味づけられる「過去名所」と現在の状況に由来する「現在名所」に分類でき（上杉2004）、近世京都の名所は18世紀以降に現在名所の比率が高まっていったとされる（塚本2006）。東山の場合、18世紀初頭にはすでに現在名所の存在感が強くなっており、京都の景勝地のなかでの先進性を感じさせる。

近代京都における名所案内記の刊行は、博覧会の開催や鉄道の敷設に応じて数回のピークを迎えた（長谷川2012）。そのなかで、第4回内国勸業博覧会と平安遷都千百年記念祭が開催された明治28年（1895）にかけてが最大のピークであった。このピーク時に刊行された案内記のひとつが、村上勘兵衛のもとから刊行された『京都名所案内』（明治26年・1893）である。『京都名所案内』における名所は、「東部の名勝」と「西部の名勝」に分類され、それぞれを1日ずつで廻ることが前提とされている。

「東部の名勝」内の東山の名所は以下のように案内される（図3）。ここでの名所の性格は、前述の分類に概ね適当するものであり、しかも、八坂神社から知恩院にかけての遊興空間が『京城勝覧』から大きく変化していないように、東山の名所の近世・近代間の連続がうかがえる。ただし、円山の「鉦泉場」や花見小路裏の「有楽館」（旧正伝院）など、前述した近代特有の景観形成により成立した新名所についても記されている。

また、本書の「遊覧案内」冒頭には、遊覧の2番目の目的に「其信仰する神社仏閣は風景絶佳ならざるも亦参詣を望むべき」と記されており、信仰の対象としての名所の性格がなお息づいていた。

訪問層が多様化した現代、東山観光の実態は一概にはつかみがたいが、ここでは令和元年（2019）出版の『るるぶ京都'20』で提示された数種のモデルコース（図2）と訪問地（図3）についてみていきたい。

まず、東山エリアでのモデルコースは①「はんなり祇園さんぽ」と②「清水寺参道さんぽ」の2コースからなる¹⁸⁾。②のコースは従来の名所めぐりと類似した行程を採るが、①は従来にはない行程をたどる。これは、花街である祇園

が観光地としても認識されていることを示している。

この点に関して、訪問地の性格も、これまでの「遺産」や「植栽」といった側面は減退し、特に「遊興」に該当するような名所は確認できない。ここからは、近世・近代の遊興空間であった真葛原・円山公園一帯は、観光地としての性格を失ったようにみえる。しかしながら、近世の真葛原が、「洛下の騷客遊興の往返所^{かよいしよ}」であり、京都の出版業者が作者をもてなす場であったように、この一帯はどちらかといえば京都内部の人々にとっての遊興空間であった。この点では、円山公園北縁の料亭群や、桜の季節に「洛下の騷客」で賑わう園内の光景は現在も継承されている（図4）。

この一方で重視されるようになった訪問地が「京都らしい」とされる「町並み」である。ここでの観光行動は、フォトジェニックな風景の撮影に主眼が置かれている。例えば、八坂の塔の前では塔を背景にテイクアウトのコーヒーを持った写真を撮ってSNSに載せることを推奨したり、花見小路では石畳と町家を写し、交通量の激しい四条通側ではなく建仁寺側を背景とすることを勧めている。また、観光コースに組み込まれた「店舗」も重要な役割を果たす。「店舗」のなかに着物レンタル店も含まれ、和装した観光客が被写体として東山の風景を構成することが想定されている。さらに、現代のモデルコースには、それまでのような一筆書きのルートではなく、産寧坂や祇園新橋といった伝建地区を行き来する特徴が見受けられる。これもベストショットを求めて歩き回る観光のあり方に関係すると考えられる。

以上のように、東山における観光の実態は、各時代の観光のあり方に応じて変化してきた。各時代を通じて共通点を見出すとすれば、歴史や文化遺産といった過去を体感さ



図4 円山公園での花見

せる寺社と、現在の楽しみを享受することができる場所が数珠つなぎのように連なり、複合的な観光地が形成されてきた点が指摘できる。また、ここでの移動手段は、基本的には徒歩であり、いずれの時代のモデルコースも山麓の自然基盤とそれに即して成立した名所に規定され、軌跡を重ねることも少なくなかった(図3)。特に、産寧坂・二年坂一带は、各時代でルート上に位置した。『京城勝覧』ではすでに茶屋の存在が示され(図5)、訪問客に対する観光業が成立していたことを確信させる。先述のように現在は観光業への傾斜と職住分離が進むものの、この坂は観光地としての歴史的な連続性を示す要素として重要である。

(3) 六道まいりの象徴性

六道とは、仏教用語で生前に重ねた業に応じて往くこととなる六種の冥界をいう。六道の辻は、文字通り六道への分岐点であり、此岸と彼岸との結節点を意味した。この辻は具体的には洛中から延びる松原通沿い、六道珍皇寺門前あたりの交叉点を指す¹⁹⁾。

この辻から東へ行くと葬送地であった鳥部野に至ることから、この附近一带は、「祖霊を迎える場所」として位置付けられ、西福寺や六波羅蜜寺、六道珍皇寺といった寺院が集中する(松山 2009)。このなかの六道珍皇寺では、盂



図5 『京城勝覧』における二年坂(筆者蔵)



図6 「六道まいり」の光景

蘭盆会に先駆けて毎年先祖の霊魂を迎える「六道まいり」がおこなわれ、毎年8月7日～10日は宗派を問わず多くの参詣者が集まる(図6)。また、近辺の生花店では仏花の販売もなされ、「幽霊船」が販売されるなど、当日の六道の辻周辺は特有の賑わいを見せる。

この行事の原型は、近世前期に黒川道祐によって著された『日次記事』に認めることができる(大東 2006)。そしてその本質は、京都の人々にとっての盆花迎えと精霊迎えが融合したものと捉えられる(大東 2006)。

では、実際に参詣に訪れるのは、京都の中のどのような地域の人々であろうか。この点に関して、令和元年8月7日に100組の参詣者に対して実施したインタビューに基づき、参詣者の分布を示した(図7)。ここからは、参詣圏は洛中洛外に広がり、宇治市や城陽市などからも参詣者を集めていることがわかる。しかしながら、多くの参詣者が鴨東地域に居住し、珍皇寺周辺に集中している。同時期に同様の行事がおこなわれる千本えんま堂附近からの参詣者

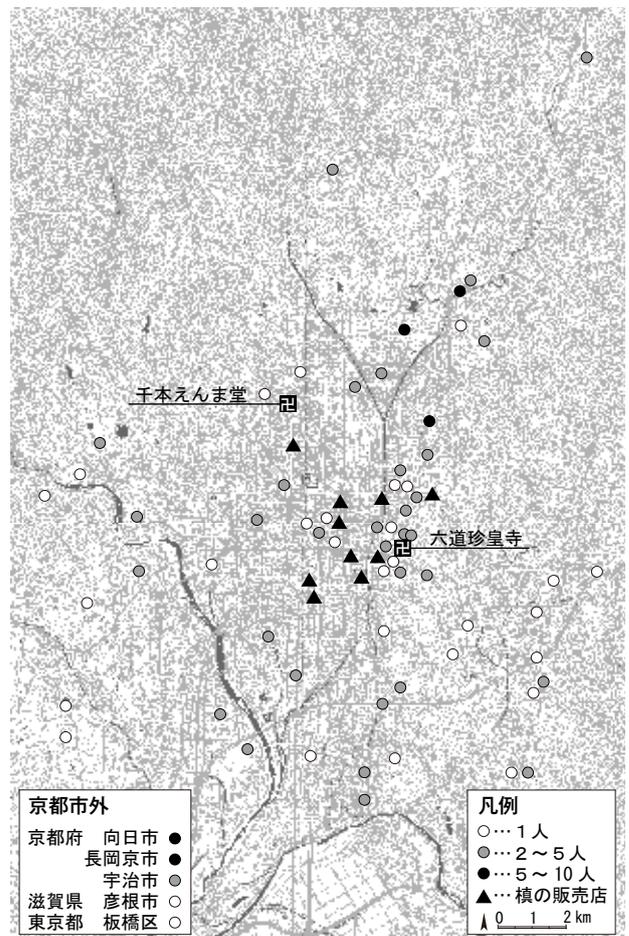


図7 「六道まいり」参詣者の分布²⁰⁾

が少ないことから、京都全体から等しく参詣者を集めているわけではなく、精霊おくりをおこなう寺院の近くに篤い信仰層が存在しているといえることができる。

京都北郊における盆行事に関して、近年は珍皇寺で教えられる行事をおこなうようになり、行事の地域性が失われつつあるという報告がある（中村 2018）。この点を考慮すれば、図中にみえる京都近郊からの参詣者は近年になって訪れるようになった可能性も想定できる。この点を踏まえれば、六道まいりを京都の人々全体にとっての重要行事とみなすよりは、東山を象徴する行事として捉える方が妥当であろう。

3 「京都」イメージのなかの東山

現在の東山は、ガイドブックにおいて「京都らしい」と表象されていることはすでに述べた。以下では、その東山イメージの構造を、「都をどり」の上演記録から明らかにする。

「都をどり」は、祇園甲部の芸妓・舞妓による舞踊公演であり、明治5年の内国勸業博覧会の「附博覧」として開催されて以降、令和元年までに145回の公演を重ねている。公演は、複数の「第〇景」と呼ばれる舞踊から構成される。それぞれの景では、その舞台となる場所を描いた背景の前で舞踊が展開される。管見のパフレットから、各年の景で舞台とされた地域は以下のように分類できる（表2）。

歴代の公演では、それぞれの「歌題」が設けられてきた。その題材は、御大典や東京五輪、または昭和初期の皇国史観の影響を受けたものを除くと、古典や名所をテーマとしたものが多い。古典を題材とした場合、舞台は過去に設定され、名所をテーマとした作品は基本的には現在が舞台となる。戦前期には現在を対象とした作品が多い反面、戦後に過去を舞台とする比重が増加している。

古典のテーマには、平安文学などに取材した作品群が存在する。ここでは洛中などが舞台とされるため、背景に東山の風景が描かれることは稀である。しかしながら、平安文学以外の出雲阿国や赤穂浪士、幕末の志士といったテーマを選択した作品も多く、これらは祇園甲部の芸妓たちにゆかりのある人物や出来事が取り上げられるため、東山が舞台となる景が多くを占める。京都の名所をテーマとした作品では、一層多くの景で東山が舞台とされる。

そして、全体的な傾向として、最終景に東山を選び、公演全体を現在の東山に帰結させようとする姿勢が認められる。ここで背景に描かれるのは、八坂神社や円山公園、清水寺などの代表的なランドマークである。例えば、昭和47年（1972）の「能楽風流百年春」最終景では、円山公園の枝垂桜をバックに「春は花 花の都の花^{はなぐは}美妙し 桜尋めて櫻狩 西山 北山 東山 花逍遥の名所をめぐるや春の日も遅々^{うらら とぎま こうぎま} 東 西 行きつれば これぞ都の花の王^{きみ}（中略）この一樹 京の春をぞあつめたる」²¹⁾と謳われ、枝垂桜が春の京都を代表する存在として主張される。古典作品を題材とした場合でも、本筋とは関係ないような東山の風景（特に現在の風景）で公演が締めくくられる。

「京都」イメージは、平安遷都千百年祭や内国勸業博覧会の開催や『平安通史』編纂を通じて、王朝文化などと結びつけられながら構築されたといえる（丸山ほか編 2008）。しかしながら「都をどり」のなかの東山は、近世以降の人物や出来事、そして多くの名所を抱える景勝地という性格に関連して表現されるものであった。さらにそのなかで、観光都市京都を代表する存在として表象されてきたと言える。

4 おわりに

周縁地域である東山では、都市京都の成立と変容に応じて、副都心や葬送地、遊興地、観光地と性格を重ねながら独自の文化的景観を形成してきた。さらに、近現代にはガイドブックや舞踊を通じて「京都」イメージが（再）生産されていくなかで、東山の風景はその中核として表象されてきた。

景観形成の過程で基軸となってきたのは、観光と信仰という営みであった。本稿では、地形条件に即した観光のあり方の不変性や、東山における信仰を象徴する六道まいりについて確認した。こうした営みの持続を通して形成された、産寧坂の茶屋や土産物店が並ぶ景観や、六道の辻・鳥辺山墓地の葬送や墓参に関する独特の景観は、「東山らしさ」が端的に表われた点景である。

こうした場所性を備える東山の文化的景観は、さまざまな営みと歴史的な歩みを背景として括られる景観単位の集合体であった。近年、祇園町南側地区が私道での観光客による写真撮影を禁止するなど²²⁾、観光客の増加による問

表2 都をどりの舞台 各年のパンフレットによる

西暦	歌題	題材	第1景	第2景	第3景	第4景	第5景	第6景	第7景	第8景	第9景	第10景	備考
1914	新古今御代のことほぎ	新古今和歌集	×	▲	▲	▲	▲	×	—	—	—	—	
1915	今様ゆかりの四季	『源氏物語』	×	▲	▲	▲	▲	▲	×	—	—	—	
1915	都名所	大典記念	●	●	●	●	●	●	●	●	—	—	
1917	菊花弥栄薫	明治維新	×	●	▲	×	▲	●	●	●	—	—	
1918	五十鈴の調	『源氏物語』	×	●	●	●	●	●	●	●	●	—	
1924	浮宝春の賑	京名所	×	●	●	●	●	●	—	—	—	—	
1925	長久楽御代の壽	東国の名所	×	●	●	●	●	×	●	●	●	—	
1926	千歳の都風	古今の京名所	×	●	▲	●	▲	●	●	●	—	—	
1927	隆栄の暁天	京名所	×	●	●	●	●	●	●	●	●	—	
1928	旭の輝	伊勢の名所	×	●	●	×	×	●	●	●	●	—	
1928	寿楽萬歳楽	大典記念	×	●	×	●	●	●	●	●	●	●	
1929	色繪の繪扇	京名所	×	●	●	●	●	●	●	●	●	—	
1930	都めぐり	都巡り	×	●	●	●	●	●	●	●	●	—	
1931	浮模様義士の面影	赤穂浪士	×	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	—	—	
1932	都の壽恵廣	大京都市	×	●	●	●	●	▲	●	●	●	—	
1933	御國の礎	忠臣	×	●	▲	▲	▲	●	▲	●	●	●	
1934	四絃の調	国学者	×	●	●	▲	●	▲	●	●	●	—	
1935	謡曲今様鏡	能楽	×	▲	●	●	●	×	●	●	—	—	
1936	続謡曲今様鏡	能楽	×	●	×	▲	▲	×	▲	●	—	—	
1937	風流於國歌舞伎	出雲阿国	●	●	▲	●	▲	▲	▲	●	—	—	
1938	旭光遍輝	京都と天皇	×	●	●	▲	●	●	●	●	—	—	弥栄会館竣工
1939	建武の源	尽忠報国	×	●	●	▲	●	▲	●	●	—	—	
1940	輝く聖蹟	紀元二千六百年	×	●	●	▲	●	●	●	×	●	—	
1941	旭光遍海洋	良妻賢母	×	▲	▲	×	●	●	▲	×	×	×	
1950	京洛名所鑑	京名所	×	●	●	●	●	●	●	●	—	—	南座で上演
1951	色競戀繪姿	観光文化都市	×	●	●	●	●	●	●	●	—	—	南座で上演
1952	舞姿忠臣蔵	赤穂浪士	×	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	—	—	
1953	謡曲六佳撰	能楽	×	×	×	●	×	▲	▲	▲	—	—	
1954	春色阿国歌舞伎	出雲阿国	×	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	—	
1955	舞扇源氏物語	『源氏物語』	×	▲	×	▲	▲	▲	▲	▲	—	—	
1956	極彩色近松絵巻	近松浄瑠璃	×	▲	▲	▲	▲	▲	×	▲	—	—	
1957	謡曲平家物語	『平家物語』	×	▲	▲	▲	×	▲	▲	▲	—	—	
1958	風流京洛の四季	京名所	×	●	●	●	●	●	●	●	—	—	
1959	夢模様謡曲絵巻	能楽	×	×	▲	×	▲	▲	▲	—	—	—	
1960	京舞華洛屏風	浩宮出生祝	×	▲	▲	▲	●	●	▲	—	—	—	
1961	京舞扇八景	(親鸞御遠忌など)	×	●	▲	●	▲	▲	●	●	—	—	
1962	巴紋都繪姿	赤穂浪士	×	▲	▲	▲	▲	▲	▲	—	—	—	
1963	王朝都の栄華	平安文学	×	●	●	●	●	●	●	●	—	—	
1964	都とりどり色模様	東京五輪	×	●	●	×	●	●	●	—	—	—	
1965	美彌古風流	京都の歴史	×	▲	▲	▲	▲	▲	×	●	—	—	
1966	舞扇源氏物語	『源氏物語』	×	×	▲	▲	▲	▲	▲	▲	—	—	
1967	維新其前夜	明治維新	×	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	—	—	
1968	舞扇観世水	能楽	×	▲	▲	▲	▲	▲	×	▲	—	—	
1969	舞姿容洛中洛外	(豊臣秀吉と京都)	×	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	—	—	
1970	都風流京の四季	京都の四季	×	●	●	●	●	●	●	●	—	—	
1971	京舞忠臣蔵	赤穂浪士	×	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	—	—	
1972	能楽風流百年春	能楽	×	▲	×	×	▲	×	▲	●	—	—	
1984	京近江名所絵尽	京滋の名所	×	●	●	●	●	●	●	●	—	—	
1988	雪月花洛中洛外	故事	×	●	▲	●	×	●	▲	●	—	—	
2001	新世紀歌舞姿絵	二十一世紀	×	●	▲	●	▲	●	●	●	—	—	
2002	仮名手本都玉章	赤穂浪士	×	●	▲	●	▲	●	▲	●	—	—	
2003	京曆歌舞伎魁	出雲阿国	×	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	—	—	
2004	春宴京歌謡都伝説	(京都の伝説)	×	●	▲	▲	▲	●	●	●	—	—	
2005	雪月花古都映絵	(古都の風景)	×	●	▲	●	▲	●	▲	●	—	—	
2006	京舞歴史絵鏡	京都府の歴史	×	●	▲	●	▲	●	●	●	—	—	
2007	都風流名所絵巻	(京都の名所)	×	●	●	●	▲	▲	●	●	—	—	
2008	都今源氏面影	『源氏物語』	×	●	▲	▲	▲	▲	▲	▲	—	—	
2009	水映桜花絵巻	京都周縁の名所	×	●	▲	▲	▲	●	●	●	—	—	
2010	桜花訪京都歴史	幕末の京都	×	●	▲	▲	×	▲	●	●	—	—	
2011	春花京都名所尽	春花京都名所	×	●	●	●	●	●	●	●	—	—	
2012	平清盛由縁名所	『平家物語』	×	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	—	—	
2013	春宴四季巡昔語	昔話	×	●	▲	▲	▲	●	×	●	—	—	
2014	昔伝来大和宝尽	世界遺産	×	●	▲	●	▲	●	▲	●	—	—	
2015	花都琳派染模様	琳派	×	●	▲	▲	▲	▲	▲	●	—	—	
2016	名所巡四季寿	近畿の名所	×	●	●	●	▲	●	●	●	—	—	
2017	洛北名所遺逸	洛北の名所	×	●	▲	●	▲	●	—	—	—	—	春秋座にて開催
2018	続洛北名跡巡	洛北の名所	×	●	●	●	×	●	—	—	—	—	春秋座にて開催

●…東山 ●…西山 ●…京都市南部 ●…北山 ●…洛中 ●…京都府内 ●…近畿 ●…その他 ▲…歴史上の舞台 ×…偏在 —…存在なし

題が深刻化している。この問題は、観光とは関係のない文脈の景観単位に観光客が立ち入ることによって生じる問題と考えられる。東山の文化的景観の継承のためには、丁寧且つ細やかに景観単位を設定したうえで、観光客の適切な誘導を図る必要があると考える。

最後に、本稿では東山の文化的景観についての自然的特性や、東山に居住する人々の生活・生業といった点は深く掘り下げることができなかった。重要文化的景観の選定を受けるためには、こうした観点からの調査が必須となろう。

(竹内 祥一郎)

註

- 1) 京都市編(1987)をもとに作成。
- 2) 信西の邸宅跡地でもあると言う(京都市編1987, 25頁)。
- 3) 京都市編(1987), 267頁。
- 4) 京都市編(1987), 327~328頁。
- 5) 庶民の鳥部野への葬送が進んだのは平安後期以降とされ、それまでは、平安初期には鴨川河原への遺棄葬が顕著であった(山田2009)。
- 6) 京都の人口は、近世後期には減少傾向にあった(浜野2007)。
- 7) 京都市編(1987), 174頁。東山における開発対象地がの内であったことは、祇園内六町の開発地が「広小路畑地」であったことから裏付けられる(京都市編1987, 168頁)。
- 8) 京都市編(1987), 213頁。
- 9) 京都市編(1987), 192~193頁。
- 10) 新修京都叢書刊行会編(1968), 562頁。
- 11) 明治11年(1878)には下京第十五区の区長より、新築により建て増しする可能性があるため、小路の名を取り消してほしいという願いが出されている(京都府立京都学歴彩館所蔵「明治11年諸願伺」)。
- 12) 京都市編(1987), 200頁。
- 13) 京都府立京都学歴彩館所蔵「道路一件」。
- 14) 『京城勝覧』、『京都名所案内』、『るるぶ20 京都』をもとに作成。ベースマップには「スーパー地形」を使用。
- 15) 九州史料刊行会編(1956), 22頁。
- 16) 「景よき坊多し。此寺も精進料理を人の所望によりて拵出す。醬、めめ漬、かき餅、豆腐、此寺の名産なり。遊人多し」『京城勝覧』。
- 17) 『京城勝覧』、『京都名所案内』、『るるぶ20 京都』をもとに作成。
- 18) 清水寺と高台寺については、境内のモデルコースも紹介されている。
- 19) 「六道の辻」を示す石造物は、六道珍皇寺門前と西福寺門前に2点存在する。
- 20) 令和元年8月7日の聞き取り調査から作成。参詣者のプロットは、近世段階の町や村単位で再集計した。
- 21) 祇園甲部歌舞会(1972)。
- 22) 「許可なき撮影は1万円」京都・祇園、観光客の迷惑行為で対策」(『京都新聞』令和元年10月25日付)。

参考文献

- 朝尾直弘(1996)「“洛中洛外町統”の成立—京都町触の前提としての」『京都町触の研究』岩波書店
- 上杉和央(2004)「17世紀の名所案内記にみえる大坂の名所観」『地理学評論』77
- 小椋純一(1992)「“再撰花洛名勝図会”の考察からみた江戸末期における京都近郊山地の植生景観」『絵図から読み解く人と景観の歴史』雄山閣出版
- 金坂清則(2011)「『京城勝覧』とその旅—貝原益軒にとつての京都を視野に一」『アジアの歴史地理Ⅰ—領域と移動』朝倉書店
- 鎌田道隆(2000)『近世京都の都市と民衆』思文閣出版
- 祇園甲部歌舞会(1972)『都をどり—創始百年記念—』
- 九州史料刊行会編(1956)『九州史料叢書7 益軒資料2』
- 京都市編(1987)『史料京都の歴史10 東山区』平凡社
- 京都市産業観光局(2017)『京都市総合観光調査』
- 金弘己・宗本順三(2001)「産寧坂伝建地区における住宅の観光商店への用途変更と所有権移転の関係」『日本建築学会計画系論文集』66(545)
- 金廷恩(2010)「近世案内記における観光モデルコースの登場—貝原益軒著『京城勝覧』から見えるもの」『日本研究』41
- 新修京都叢書刊行会編(1968)『新修京都叢書16 京都坊目誌下京乾』光彩社
- 高橋慎一郎(1996)「空間としての六波羅」『中世の都市と武士』吉川弘文館
- 高橋康夫ほか編(1993)『図集日本都市史』東京大学出版会
- 高橋康夫(2015)「京都と名所の形成」『海の「京都」—日本琉球都市史研究』京都大学出版会
- 大東俊一(2006)「京都人の死生観」『人間総合科学会誌』2
- 塚本宏(2006)「近世京都の名所案内記に描かれた場の空間的分布とその歴史の変遷」『GIS—理論と応用—』14
- 出村嘉史・川崎雅史・田中尚人(2001)「近世の京都円山時宗寺院における空間構成に関する研究」『土木計画学研究・論文集』18
- 中村治(2018)「京都北郊の益の行事」『国立歴史民俗博物館研究報告』207
- 野田泰三(2016)「東山殿足利義政の政治的位置付けをめぐる」『室町政権の首府構想と京都一室町・北山・東山』文理閣
- 長谷川奨悟(2012)「明治前期の名所案内記にみる京名所についての考察」『歴史地理学』54
- 浜野潔(2007)『近世京都の歴史人口学的研究—都市町人の社会構造を読む』慶應義塾大学出版会
- 松山由布子(2009)「京都の都市民俗と伝承世界—小野篁冥界往来譚を中心に」『メタプティヒアカー名古屋大学大学院文学研究科教育研究推進室年報』3
- 丸山宏(1984)「京都円山公園成立前史」『昭和59年度日本造園学会研究発表論文集』2
- 丸山宏・伊従勉・高木博志編(2008)『近代京都研究』思文閣出版
- 三浦要一・谷直樹・岡佳子(1997)「近代京都における東山・下河原地域の市街地形成—石堀小路の宅地開発を中心として」『大阪市立大学生活科学部紀要』45
- 山田邦和(2009)『京都都市史の研究』吉川弘文館
- 山田邦和(2012)「中世京都の被差別民空間—清水坂と鳥部野」『日本中世の首都と王権都市 京都・嵯峨・福原』文理閣
- 山田邦和(2016)「東山中世都市群の景観復元」『室町政権の首府構想と京都一室町・北山・東山』文理閣
- 横田冬彦(2018)『日本近世書物文化史の研究』岩波書店

第4節 伏見——京を支える水と道の交錯点

京都市域の最南部に位置する伏見区は、市域最大の28万人を擁し、区域も旧郡でいうと紀伊・宇治・久世・乙訓・綴喜の5郡にまたがる、多様な歴史的地域を取り込んだ京都市のマンモス区である。区を中心となるのは旧紀伊郡の伏見町であり、秀吉による伏見城築城に際してできた城下の系譜をひく。

本稿では、広範囲にわたる伏見のすべてではなく、旧城下の系譜をひく地域のなかでも特に南浜学区を中心とした旧伏見港湾部ゾーンに限定して、文化的景観としての特性を描いてみたい。

1 伏見と伏水

伏見は伏水であり、伏流水が豊富な場所として特に認識されるに至るのは、酒造業が盛んになって以降のことだという説がある。氷河期には巨大な湖だった伏見あたりは低湿地が多く、現在は埋め立てられたが宇治川が山間の溪谷から平野部に出たところに巨大な巨椋池という遊水地をつくり、広大なヨシ地を擁していた。京都の母なる川である鴨川は、伏見北部を南西方向に流れ、桂川と合流して淀川に流れ込む。伏見は、伏流水だけでなく、事実水にあふれた地であり、歴史上も多くの水害にも悩まされてきた。

『日本書紀』雄略天皇17年3月に「俯見村」とあるのが、伏見の文献上の一応の初見とされる。この記事は、土師連等に朝夕の御膳のための器を調えるように詔したところ、土師連の祖先の吾筈^{あけ}が撰津国来狭々村、山背国内村（現京都府八幡市内里）、俯見村（現京都市伏見区）、伊勢国藤形村、そして丹波・但馬・因幡の私部を献上したという記述である。また「万葉集」第9に、「巨椋の入江とよむなり射目人の伏見が田居に雁渡るらし」という歌があり、巨椋池の入り江に飛び立つ雁の羽ばたきが、伏見の田にわたっていくことを歌っている。『日本書紀』の俯見は、陶土が採れる深草近辺の地を示すだろうし、『万葉集』の伏見はもっと南、宇治川沿いあたりを示しており、この時代においても伏見はかなり広い地域を示す名称であったことがわかる。

2 城下町伏見の成立と再生

(1) 近世城下町としての伏見

さて、現在の伏見の基礎は、秀吉の命によって伏見城建設が着手されることよりはじまる。それまでの伏見は、伏見九郷といわれ、山、船戸、久米、法安寺、成就院、石井、森、北尾、北内の9村からなる農村地帯であった。室町期には、御香宮を総鎮守社とした精神的紐帯が存在したことがわかっているが、そうした村々は伏見築城に際した城下の縄張りによって解体、強制移転されたのである。総鎮守社であった御香宮も伏見城中へ移転し、城内の鬼門守護神にされたというが、関ヶ原合戦以後に家康の命により旧地（現在地）に復した。ちなみに同社は、徳川家の庇護を受け、現在残る指定文化財の建造物は江戸初期の徳川の寄進によるものである。また未指定ではあるが、おそらく京都で最古級、最大級の神輿（千姫神輿）が同社に保存されている。

城としての存在はわずか30年余りにもかかわらず、時代の転換期にあった伏見城は、変遷が激しく、次の4期に分けて把握できる。

第Ⅰ期：天正20年（1592）8月指月^{しげつ}城築城開始

第Ⅱ期：文禄3年（1594）正月指月城増築開始（同年8月にひとまず完成）、この時に城下町の整備が行われる。慶長元年（1596）閏7月13日の慶長の大地震で倒壊

第Ⅲ期：慶長2年（1597）5月場所を山裾から山上に移して再建、慶長5年（1600）関ヶ原合戦の前哨戦により焼失

第Ⅳ期：慶長6年（1601）家康が再建、元和9年（1623）廃城

城としては30年余に過ぎないが、都市としての伏見は、町勢の浮沈はあるものの、その後も継続する。伏見の創建より現在に至るまでの都市的な発展を、その機能によってみれば、政治都市⇒宿場町的機能を軸とした経済都市⇒産業都市／軍事都市、そしてベッドタウンという推移として把握できる。

城下町プランが生み出した伏見の都市性 政治都市としての伏見は伏見城が存在した時期にあたるが、同時期に町人町の建設が着手され、交通網の整備が図られる。秀吉がつくりあげた伏見の都市としての骨格は、その後の伏見の発展と維持に欠かせないものである。

近世城下町の先駆的存在と考えられてきた伏見の城下町プランの最大の特徴は、ヨコ町プランの城下町であることである。近世城下町プランの一般的な理解は、戦乱が常態であった戦国期と違い、①山城より平山城・平城へと城地及び城下が立地移動をする。②この際、山岳地形に代わる防禦機能として水系が採用される。③主要街道および海運・内陸水運の港津の城下町への繰り込みがみられる。④城—武家屋敷—町人町が空間的にも機能的にも緊密な関係で結ばれ、ワンセットとして都市プランのなかに位置づけられる。という要素が強くみられる点にある。

伏見はいずれの特徴も有している。それが象徴的な名称として現在に伝わるのが、伏見の繁華街「大手筋」である。伏見城の表玄関というべき大手門に続く道が、プラン上は通りではなく副次的な道路であることを示す「筋」であることが、象徴的に伏見の都市的性格を示している。後述するように、伏見の主要道は京都—奈良を結ぶ京街道（伏見街道）である。京街道の主要道は京町通であり、それに直行する大手筋はあくまでも副次的な道であった。そういう意味でヨコ町プランの城下であった。

城が平地におり、水系に隣接するようになったのは、城を交通の要衝におき、経済的中心地としての機能を持たせる目的がある。伏見も平山城であり、防禦機能及び河川交通の城下への引き込みを目的とした宇治川の流路の変更と主要街道の城下への繰り込みがみられる。

近江の瀬田から狭隘な谷あいぬって流れる宇治川は、平野部に出る宇治橋あたりから三分流して広大な巨椋の入り江に流れ込んでいた。秀吉はその宇治川の流路を、槇島堤と太閤堤を築くことによって北行させ、伏見山の裾に導いて伏見城の防禦機能をもたせたのである。さらに、伏見

湊を新設し、淀川河川交通、瀬戸内海海運の終着点と位置付けた。また、槇島堤の西方に新たに小倉堤を築堤し、その上に新大和街道を通す。そして小倉堤と槇島堤が交わる地点から、宇治川をまたぐ豊後橋を架橋した。大友氏に命じて架橋した故に豊後橋と命名されたと伝わるこの橋は、現在の観月橋の位置にあり、これによってこれまで大きく宇治の方へ迂回していた大和街道は、南からほぼまっすぐに伏見に入ることになる。

他に、大津街道、宇治街道、竹田街道などの新設及び改修がおこなわれ、また七瀬川に総外濠の役目を担わせたことなどが挙げられる。これらの城下外縁部の土木工事と並行して城下内においても、街路網の整備や敷地割がおこなわれる。

町人町の原初プランは、京町一丁目より四丁目まで、京町大黒、大坂町、上油掛町、中油掛町、下油掛町、帯刀町、京橋町、車町、塩屋町、南浜町、本鐘木町、本木材町の16ヵ町（以上南組本町）と、京町五丁目から十丁目まで（七丁目、八丁目は南北に分れる）、山崎町、鍛冶屋町、魚屋町、伊達町の12ヵ町（以上北組本町）である。これは大別すると、①京都へ通じる街道である京町通を軸にした地域（A）と、②伏見湊一帯の港湾地区（B）、そして京町十丁目より③東国へ向かう大津街道沿道の両側町（C）

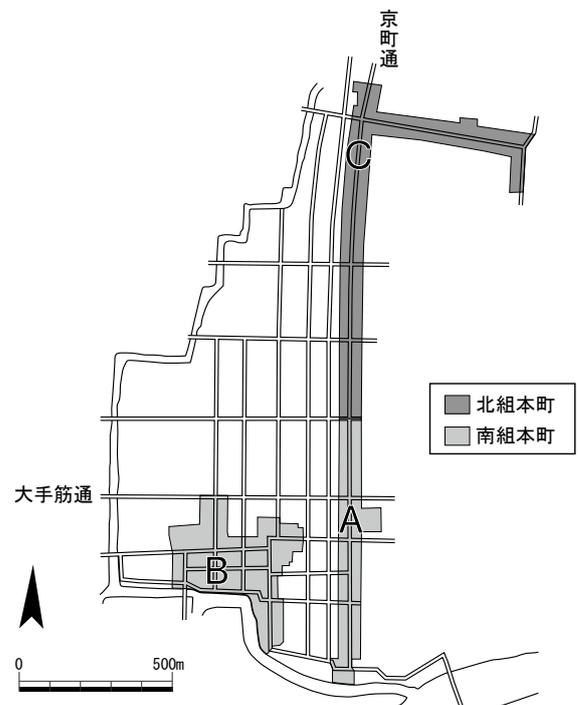


図1 町人町原初プランにみる3つのブロック

の3ブロックに分けられる(図1)。町人地の区割りからみても、京都一奈良を結ぶ陸上交通、淀川河川交通に加えて、東国へと通じる陸上交通の3者を伏見に収斂させることで、天下の大動脈を1点で掌握しようとした秀吉の伏見経営構想が窺えるのである。

(2) 経済都市としての再生

徳川政権の樹立によって、伏見は政治都市としての機能を徐々に低下していく。それは元和9年の廃城により決定的となり、大名屋敷はそのほとんどが破棄されるに至る。これにより伏見の町勢は急激に衰退したが、17世紀後半から経済都市として再び活況を呈していく。その礎になったのは、伏見の立地(京都・大坂の中間点)と城下町建設に伴う交通網の整備、さらに慶長16年(1611)よりの高瀬川の開削等である。後に竹田街道等の車道の整備によって、交通網はさらに充実し、宿場町、港町として発展したのである。

廃城にともなう混乱を経て、経済都市伏見として再生した時期の古地図として「山城国伏見街衢近郊図」(寛文10年・1670)がある。そこには市街地と八カ村(堀内村・向島村・六地藏村・三栖村・毛利治部村・景勝村・大亀谷村・深草村)が描かれ、そのまわりに境界が示されている。天領としての伏見の範囲である。町数は263と記されており、伏見の町数は江戸末まで260余で変わらないことや、後世の伏見の古絵図との差異は少ないことから、近世の経済都市伏見の骨格はこの時期にできあがっていたと考えられている。

御香宮神社には9本の剣鉾が収蔵されている。いずれも伏見地域の剣鉾に共通する形態的特徴をもつもので、元禄7年(1694)から同9年(1696)にかけて新調されたものである。元禄9年8月に伏見奉行宛に出された御香宮宮司三木善勝の伺書によれば、前々より神輿の前に9本の竹鉾をつけていたが、氏子中より金鉾の寄進があり、昨年は5本の金鉾を出した。今年(元禄9年)はさらに4本の金鉾の寄進があり、9本揃ったので、神輿に先立って巡行に参加させたいとしている。剣鉾の奉斎は基本的には氏子側の役目であるが、寄進銘からみても、経済力をつけた伏見の町人が自らの氏神祭祀に傾注していく時期であったろう。

3 内陸港としての伏見

(1) 船運と伏見湊

先の「山城国伏見街衢近郊図」にはもちろん伏見湊が描かれているが、湊から河川に出たすぐのところの河川内に「淀川」と記される。現在では大山崎の三川合流地点より下流を淀川と称することが一般的だが、これは明らかに伏見湊から下流は淀川であるという主張のようにみえる。河川や道路の名称は、場所によって名称が違うことが多いので、どの地点から変わるのかの特定が難しい。

伏見の総合的な記録としては最も古い『伏見大概記』(享保13年・1728)によれば、この当時伏見湊を中心に、淀川船運の中心であった過書船が507艘、高瀬舟が150艘、伏見茶船11艘、砂取船26艘が出入りし、伏見から大阪だけでなく、宇治や木津川を遡って笠置まで往来していた。

こうした川船の発着は、京橋界限であった。『都名所図会』(安永9年・1780)には「大阪より河瀬を引登る舟着にて、夜の舟昼の舟、あるいは都に通ふ高瀬舟、宇治川くだる柴舟、かずかずこぞりてかまびすしく、川辺の家には旅客をとゞめ、驚忽なる声を出して饗応けるも、此所の風儀なるべし」(図2)とあり、当時の賑わいを記している。

慶長16年、角倉了以が方広寺大仏再建の資材を運搬するために開鑿した高瀬川は、京都と伏見を結ぶ江戸時代から明治前半の物資の一大流通ルートとなる。江戸時代はじめの高瀬川は、二条大橋西畔から鴨川の水が引き入れられ、鴨川の西木屋町通りに沿って南流し、四条橋の下流で鴨川と合流、五条大橋の南で分岐し九条まで流れ、東九条で鴨川と交叉し伏見に至るというものであった。流路は変更し

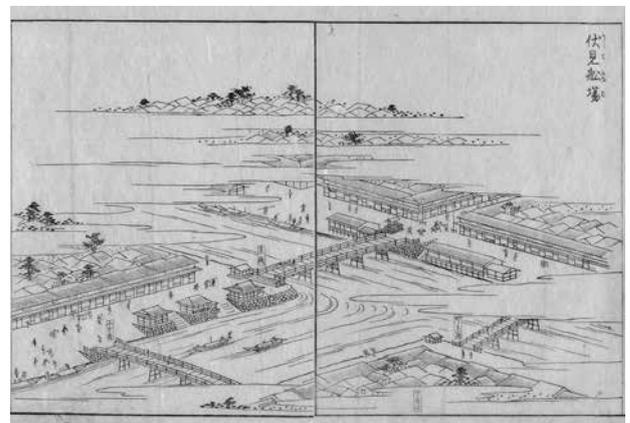


図2 伏見京橋 『都名所図会』

つつ明治を迎えるが、京都—大阪の物流の中心が鉄道に移ることによりその地位が低下、大正9年（1920）に廃止される。

高瀬舟は平底の小型船で、長さは平均13m、幅は2mで、舟首に向かって舟底がそり上がっていた。人力で曳く曳き船で、原則として一方通行で、昼間は伏見から京都へ上り、夜は下り船となった。数十年前までは利用した方からの話も聞くことができた。早朝日まだ陽の昇らぬうちに、下り船で大阪まで反物を積んで商いに出かけた話なども聞け、重量物だけでなく、様々なものが運ばれていたようだ（図3）。

高瀬舟だけでなく、伏見湊からは陸路も利用された。伏見の港に陸揚げされた物資は、牛車によって陸路で京都に搬入された。車輪が道に食い込まぬよう、車石を敷いた牛車専用の車道が通されたのである。こうした車道は京都との主要道であった竹田街道に敷設されていた（図4）。

京橋の東側に蓬莱橋がかかり、中書島へとつながってい



図3 高瀬舟を曳く 明治末頃 七条木屋町



図4 竹田街道の車道 『拾遺都名所図会』

る。中書島は伏見湊の往来客を見込んで元禄期に遊郭として開発された地で、この開発によって伏見湊はますます繁栄する。開発に先立ち、元禄12年（1699）に深草大亀谷即成院から多聞院を分離して長建寺が建てられた。同寺は弁財天を本尊とする珍しい寺院で、赤壁と中国風の竜宮門が、遊郭内の寺院の雰囲気をよく醸し出している。

（2）鴨川運河と三栖の閘門

京都伏見間の水運は、明治期になって新たな展開をみる。明治27年（1894）に琵琶湖疏水の建設に引き続き開削された鴨川運河は、産業物資輸送を目的としたものであった。鴨川の夷川から鴨川東岸に沿って南下し、七条以南は鴨川筋を離れて伏見に至るルートで、途中8ヵ所に閘門こうもんをもち、高低差解消のためのインクライン（傾斜鉄道）も有した。インクラインの形跡は墨染発電所近辺に残る。これにより、大津—琵琶湖疏水—鴨川運河—伏見の全長20km余の舟運ルートが完成した。

また大正11年（1922）から着手した宇治川右岸の観月橋～三栖の間の築堤工事により、伏見湊と宇治川との船の通航が出来なくなるという事態を解消するため、昭和4年（1929）3月31日、宇治川と壕川との合流点に三栖閘門が建設された。現在伏見湊の象徴となっている三栖閘門は、完成当初は、石炭などを輸送する船が年間2万隻以上も通過していた（図5）。しかし、陸上輸送が発達するとともに次第に減少し、昭和37年（1962）に遂になくなった。さらに洪水を防ぐための宇治川改修や天ヶ瀬ダムの完成により宇治川の水位が低下し、ついに三栖閘門はその役目を終えることになった。ちなみに、伏見の西側は、天ヶ瀬ダムができるまでは、洪水多発地帯であり、軒下に災害用の



図5 三栖閘門

小舟を吊るす家々がみられた。

(3) 伏見湊の末裔

すでにその時代的役目を終えた水運ではあるが、かつての従事者により創造された時代の片鱗を、残された遺構や伝承文化からみることができる。

たとえば御香宮祭礼に伴って巨大な獅子が出る。獅子は雌雄1対で、獅子頭は、幅87、奥行74、高さ71cmの木製で、重量が約60kgもある大型のものである。御香宮祭礼の神幸祭の朝、4時間ほどかけて、1対の獅子頭を先頭に伏見の町々をまさしく疾走するのである。この祭礼行事は「御香宮祭礼獅々」として京都市無形民俗文化財に登録されている。

伝承母体である御香宮獅々若会は、木挽町青年団と、乾青年団、札幌青年会の三者によって構成され、その中核組織である木挽町青年団は、木挽町通沿いの8ヵ町で構成される。木挽町というのは江戸時代より使用されている通称名であるが、おおよそ南北は油掛通と丹波橋通までの間、東西は高瀬川と濠川に囲まれた南北に細長い地域を示す。この地域は、江戸期より大正にかけて、高瀬川水運に従事した船頭たちが集住したところで、御香宮祭礼獅々をはかれる力技のパフォーマンスなのである(図6)。

また先に触れた中書島の長建寺には、弁天囃子が伝承されている。現在のそれは復興されたものであるが、江戸時代には遊郭の女性たちが奏でる囃子船の船渡御にあわせて、船上でかがり火がたかれ、淀川の河上での夜の祭礼として盛大に行われていた。

また、現在の伏見港公園の北に、金井戸神社がある。同社は三栖神社の御旅所であるが、本宮である三栖神社は、

伏見の町場の西方に広がる農村地帯にあり、中世荘園の系譜をひく。三栖神社の氏子域は、新高瀬川を挟み東と西に大きく二つに分けることができ、新高瀬川より西の本宮周辺の集落を本三栖、東の金井戸社周辺の集落を浜三栖と通称するが、大まかにいうと本三栖が農村、浜三栖が高瀬川および淀川水運によって栄えた都市集落の系譜をひく。浜三栖には葦を利用した職人たちが集住し、そうした系譜上に、浜三栖の人たちが中心となって、淀川の葦を使った大松明を祭礼に奉仕しているのである。この祭礼は「三栖炬火祭」として京都市無形民俗文化財に登録されている(図7)。

4 酒造業の隆盛とマンション建設

今でこそ酒で名高い伏見であるが、伏見の酒造業が全国的な展開を見せるのはそんなに古いことではない。確かに伏見が経済都市として再生する江戸前期より酒造業は伏見を代表する産業ではあったが、実のところ江戸時代だけで見れば、江戸前期が天であって、そこから不可逆的に衰退していったのが実態であった。明暦3年(1657)83軒あった酒造家も天保4年(1833)には27軒になり、生産高も15,000石から2,100石に落ち込んでいるのである。その大きな理由は、京都という一大消費地に近いながらも、洛中の酒造家による京都市中の専売権を打破できなかったことや、伏見湊があるとは言うものの、内陸であることから江戸への回送に後れを取ったことなどがあげられるであろう。

伏見の酒造が、一大産業として成長するのは実に明治後期になってからのことである。現在の伏見の景観を象徴す



図6 御香宮祭礼獅々



図7 三栖炬火祭

る、堀と大型酒蔵群の景観は近代の景観ということである(図8)。伏見の町は、今日と同様両側町であるが、江戸時代末頃には街区の中央部には「町裏」と称される空閑地が目立って広がっていた。伏見湊周辺の地域では、天保期頃より、そうした町裏が宅地開発されていくが、多くの町裏は、有効利用されない藪地や雑種地として明治時代を迎える。それが明治33年(1900)以降急速に開発されていくのである。その開発主体は酒造業者であった。都心部の非有効利用地であった町裏に目をつけ、そこを取り込む形で工場や酒蔵を建てたのである。明治33年に伏見の旧市街地に約40,000㎡あった町裏は、40年ほどの間に2,000㎡まで縮小するが、そのほとんどが酒造家による占取であった。

アジア太平洋戦争後、酒造業も近代化の波にさらされ、酒蔵もどんどん近代的な工場へと建て替えられる。町なかの工場では対応できないことから、町の西側の国道1号線沿いに工場移転し、町なかの酒蔵が不要になっていったのである。伏見はJR奈良線、近鉄京都線、京阪電鉄本線が通り、京都、大阪への交通も至便であることから、ベッドタウンとしても適していた。交通至便な町なかの酒蔵は、大型マンションへと変貌していったのである。

古い家並みや商店街と、その背景にある大型マンションというのも、伏見の歴史が生み出した景観のひとつであるかもしれない。



図8 酒蔵群と堀

5 みなと伏見の創造

京都府は、京都と大阪を結ぶ船運復活を見据えて、令和元年度から伏見みなと公園の整備に着手する。国土交通省が主導する「みなとオアシス」への登録を準備している。阪神淡路大震災以後、淀川河川事務所は緊急時の船運利用の見直しを図ってきたが、今回の取り組みはそのひとつになる。また令和6年開催の大阪万博やIRも視野に入れた地域活性化の取り組みとなることは必至であろう。

こうしたことは、京都市都市計画局の「伏見南浜界わい景観整備地区」指定による整備事業や、現在十石舟の就航を主宰している地元のNPO法人伏見観光協会、そのほか葦地の保全を進めている伏見学舎など、数多くの市民団体の活動やこれまでの成果とも連動していかねばならない。三権閥門に代表される大型の建造物だけでなく、先に見た祭礼行事に至るまで、まだまだ伏見湊や水運の歴史や生活に関連した有形無形の景観要素は色濃く残っているのである。(村上 忠喜)

参考文献

- 足利健亮(1984)『中近世都市の歴史地理』古今書院
- 京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会(2014)『京都剣鉦のまつり調査報告書2 民俗調査編』御香宮神社(1924)『御香宮神社』
- 聖母女学院短期大学伏見学研究会(1999)『伏見学とはじめ』思文閣出版
- 伏見酒造組合一二五年史編纂委員会(2001)『伏見酒造組合一二五年史』
- 伏見町役場(1928)『伏見町誌』
- 村上忠喜(1988)「伏見における“町裏”の開発と都市化の様相」『鷹陵史学』14



図9 造り酒屋の家屋と大型マンション

第5節 中川 —— 北山林業を中心とする山稼ぎの村

1 中川の成り立ちと歩み

中川は、京都市街地から車で約30分、徒歩でも2時間ほどの位置にある林業集落である(図1)。「北山」の通称で親しまれる丹波高地の南縁に位置し、北から南へと流れる清滝川による侵食で生まれた深い谷間に集落が展開する。中川は洛中に近いという立地により、中世以来、山稼ぎの村として存続してきた。

中川が初めて史料に現れるのは13世紀の初めである。もともと仁和寺の荘園「中河庄」^{なかこ}であったとされるが、寺領であると同時に、朝廷とも結びつく供御人の村として、山の産物を調進して、その代わりに特権を得ていた。京都近郊の山村として、都と結びついた経済を徐々に発展させてきたことが、中世の中川の大きな特徴である。

近世に入ると、中川は神護寺末の西明寺領となる。近世初頭の中川村の石高は35石余、耕地・屋敷面積は3.4町弱、戸数は53であった。35石という村高は、戸数に比してかなり小さく、生活の糧を耕地ではなく山林に依存していたことがわかる。食糧の自給は低く、村外に頼っていた。近世中期になると、中川やその周辺で人工的なスギの育林が成功し、スギ丸太の生産が軌道に乗るようになる。

中川は京都に近接しているながらも、清滝川に十分な水流がなく、峠越しの陸路の輸送は人力に依ったため、長大な木材の移出には適さなかった。消費地に近接しているながら

重量物の輸送が困難という立地条件においては、小規模な輸送に適した薪炭材の生産が重要であり、そのなかで輸送が比較的容易な小径木の材を育てるようになる。さらに、その付加価値を高めるために、杉皮を剥き、丸太の表面を磨き、丸太のまま材として使われる磨丸太や絞丸太、タルキ(小丸太)の生産へと傾斜していった(図2)。この独特の樹形の杉の木立を「北山杉」と呼び、また、その北山杉から生産される製品としての丸太を「北山丸太」、北山杉を育林し北山丸太を生産する林業を「北山林業」と呼ぶようになり、それが戦後になると小説や絵画などを通じて全国に知られるようになった。

2 自然条件が育んだ北山林業

(1) 京都における中川の立地

中川の集落部は東西を標高450～550mほどの峰に囲まれた谷間にあり、南北に約1km、東西に約150mと細長く展開する。地元では東側の山の連なりをヒガシヤマ(東山)、西側の山の連なりをニシヤマ(西山)と呼ぶ。

中川は山間にあるものの、京都盆地とは周山街道(国道162号)を通じて10kmほどしか離れていない。周山街道が車道として全通する明治35年(1902)までは、中川と京は主に菩提道で結ばれていた。菩提道は中川集落の南端から菩提川に沿って南下し、標高350mの上ノ水峠を越えて

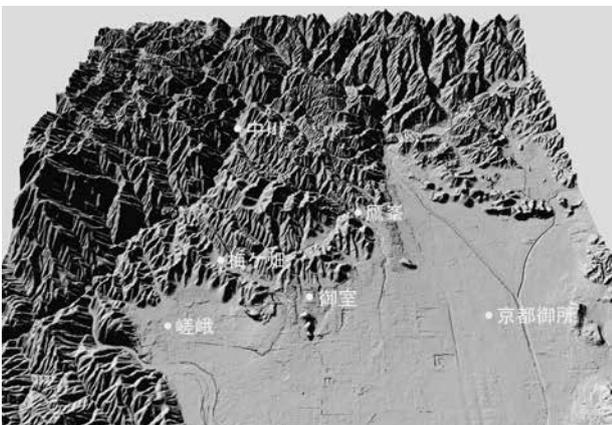


図1 京都市街と中川との位置関係



図2 中川で生産されてきた北山丸太

鷹峯（京都市北区）に至る道である。

菩提道は現在の市道中川1号線と市道鷹峯2号線に相当する。鷹峯は丹波に通じる交通の要地で、京の七口のひとつであった長坂口が設けられた場所である。中川と鷹峯を結ぶこの道を中川の人々は菩提道もしくは京道と呼び、かつては北山丸太などの林産物を頭上に乗せ、ここを通過して京へと運搬していた。中川の分岐点から鷹峯千束町までの距離は5.5kmで、勾配は5～7%と緩やかな山道といえる。女性の足でも片道2時間ほどで行き来でき、中川と京都市街は徒歩でも日帰り可能な位置関係にあった。北山林業最盛期には1日2往復することもあったという。中川は山間であって京都の市街とは隔絶された立地にあるように思えるが、実は至近距離にあり、非常に緩やかな道で京都市街と結ばれているのである。

（2）地質と北山丸太

菩提滝と磨き砂 清滝川の支流である菩提川は、右京区鳴滝沢の沢ノ池（溜池）から発し、沢山（515.6km）の西側を通過して北流し、中川の南端で清滝川に合流する全長4kmの河川である。この合流点から1.6km上流の標高275m附近に菩提滝がある（図3）。層状チャート中を1本の滝として落下しており、河床には滝壺があり、周囲は礫の河原になっている。

安永9年（1780）の『都名所図会』には「菩提瀧は鷹峯より一里ばかり西にあり」と記されているように、江戸時代から鷹峯の先にある名所として知られていたようである。明治20年（1887）の『京都名所案内図会』でも「菩提瀧」として挙げられ、「巽は向て飛泉せり」とある。

菩提滝の滝壺には上流から流れた砂が溜まっていて、中

川の林業関係者たちはここで北山丸太を磨く「磨き砂」（別名「赤子の砂」）を採取していた。丸太を磨くには菩提滝で洗い打たれた砂が最も良いとされた。その砂は沢ノ池の西側にある赤子山から流れる。

福本武明（1983）の分析によると、磨き砂は最大粒径がおおよそ3mm程度、50%径が0.5mmくらいで、細粒分を4.3%ほど含む砂であり、それは日本統一土質分類法では、粒度の悪いきれいな砂に該当するという。粒子は軟質なものだけでなく硬質なものも適度に混在している。中川の古老から「昔はこの砂で、木製の飯びつや弁当箱などもよく磨いたものだ」という話を聞いたとも記す。

なお、洗い砂の採取は昭和50年代頃まで続いたが、水圧バーカーによる皮むきが導入されてからはおこなわれていない。

鳴滝の砥石 北山丸太を育成するために特に重要な作業が枝打ちである。その枝打ちは床柱用では4年毎、垂木用では2年毎という頻度で繰り返され、常に鋭利な刃物でおこなわれる。丸太のまま材として使うため、出来るだけ枝の付け根を幹に沿って打ち落とし、その打ち跡が幹より出ないことが求められるからである。こうしたことから中川の職人たちは山に入るとき常に砥石を携帯し、枝打ちの作業中にも鎌や鉋を研ぐ。切れ味を維持するために作業中も1時間に1回は必ず鎌を研ぐほど使用頻度が高い。

この枝打ちに欠かせない砥石を、中川の職人たちは菩提滝の南側の山で採っていた（図4）。吉田家の山で、崖のように露出した部分をツルハシで砕いて採取したという。採取した砥石の原石は鋸で切って使いやすいサイズに加工して利用した。色は黒めで、中砥に適した硬さだった。30



図3 菩提滝



図4 菩提滝附近から産出した砥石

～40年ほど前まで利用していたが、人造砥石の出現により利用されなくなったという。

なお、中川の南、京都盆地との間にある鳴滝や梅ヶ畑では古くから砥石が採掘されてきた。特に鳴滝産のものは、黄褐色で、きめが細かく、仕上げに最上のものでして平安時代末期・鎌倉時代から優品とされて珍重されてきたのである。『都名所図会』（安永9年）には「鳴滝は仁和寺の西にあり、此処は砥石の名産なり」とあり、また、『日本山海名産図会』（寛政11年・1799）には「今は城州嵯峨辺鳴瀧高尾に出す物、天下の上品、尤他に類ひ鮮し」とある。砥石となる岩石は砥石型珪質粘土岩といい、三疊紀中期からジュラ紀中世にかけての層状チャート下位にある、厚い「はさみ」の淡黄～青灰色を呈する風化層が採掘の対象とされてきた。愛宕山を中心に、南東から北西へ、幅0.5km、長さ20kmにわたって続いているという。産出する層によって硬いものと軟らかいものがあり、硬い石は剃刀砥に、やや軟らかい石は木工具の仕上砥として珍重され、大工道具用の砥石としても最高位にあった。中川の職人たちはここで産出された砥石も利用してきたと考えられる。

現在は人造砥石や他産地の天然砥石が容易に手に入るが、以前はそうはいかなかった。磨き砂といい砥石といい、中川の人々は身近な地質の条件をうまく生かしながら、北山林業のかたちをつくってきたといえるだろう。

3 モザイク状の山と職住一体の里

(1) 育林・伐採作業と山林

中川では谷や山腹、尾根といった山の条件にあわせてスギやアカマツ、ヒノキ、雑木等を育て京都に人の手で出荷する山稼ぎで生きてきた。近世中期以降は、磨丸太など北山丸太の育林・加工技術を開花させることで「北山林業」と呼ばれる特別な林業の地位を築いてきた。

北山林業の特性は、丸太のまま製品となる高級化粧材であるという、北山丸太の商品特性に由来するものでもある。すなわち、太さに厳しい制約を持ち、無節で綺麗な表面を有し、そしてまっすぐであること、これを山の斜面上で実現しなければならない林業なのである。岩井は、そのために以下のような特徴的な生産・管理をおこなってきたと指摘する¹⁾。

① 品種の厳選

太りの度合いが小さくて真円に近く、かつ真っ直ぐに育つなどの諸条件を満たす品種を選んで挿し木苗を生産する。それは優秀なクローンを固定するためである。

② 密植

1haあたりの植栽本数が6,000本で一般林業の2倍以上の密植であり、間伐も弱度にとどめる。これによって立ち木間の競争をさせて太りを防いでいる。

③ 下刈りのくり返し

雑木雑草が植栽スギの成長を妨げて、曲がりを生じさせないように丁寧で多数回の下刈りをおこなう。一般林業の何倍もの労働力を投下する。

④ 強度で多数回の枝打ち

炭酸同化作用を少なくして太りを抑えるとともに、無節材および元と末の太さが限りなく同じ材、つまり本末同大材を作ることも大きな目的である。枝打ちには一般林業の枝打ちの10倍近い費用が投下される。

⑤ 30年～40年の短伐期

伐採樹齢としては一般林業の半分程度であり、生産の回転としては早い。

⑥ 風雪害に対する備え

真っ直ぐに育てるために植栽時の支柱立て・傾いた立ち木の修正・風除け林の設置をおこなう。また、1カ所に大面積の北山杉を植えると災害に対して危険なので、何カ所かに分けて植林し危険分散を図る。

⑦ 全国平均よりも低い地力

中川地域は秩父古生層であるが、土壌が浅いために樹木の成長はあまりよくない。全国的な地力からみても平均よりも少し低いと思われるが、これによって北山杉が太りすぎるのがコントロールされている。

以上のように、一般の林業では材が太る方が良いとされるところ、北山杉を育てるには徹底的な抑制栽培をおこなわなければならない。これが北山林業の最大の特徴といえる。高品質の北山杉を育てるには緻密な管理が必要で、そのため、山林所有者一人当たりの所有する山林規模も小面積になり、生産サイクルも家族単位の小規模なものが採用され、結果として中川の山林はモザイク状となっていった。他の林業地では見られない、中川独特の山の姿である。

(2) 加工作業と集落

伐採された北山杉は玉切り・搬出され、加工場に搬出されて乾燥や磨きといった作業がおこなわれるが、その時期

も絶えず丁寧な目配りの必要性が生じる。皮をむいたスギ丸太そのものが商品となるため、ほんの少しの割れでも商品価値を損なう。その結果、住居に隣接した加工場・保管庫が必要とされ、中川に生活空間と生業空間が混在する職住一体の集落景観を現出させた。

急斜面の谷地に集落が営まれる中川では、屋敷地は南北に長い短冊形で、民家のはほすべてが南面して建つ。民家の南側には前庭が広がり、そこに燃料や道具を保管する小屋や、北山丸太の乾燥・貯木・加工のための納屋が構えられる。また山主や問屋業を営む家には、取引業者滞在のために北山丸太で設えられた離れ座敷が備えられているのである。山間村にもかかわらず家屋や倉庫群などの建造物が密集しており、類焼を少しでも防ぐため、民家は基本的には土蔵造りの防火住宅である。

納屋の建築様式は独特で、2階建ての納屋の場合は、1階部分よりも2階部分の方が大きく、その下にめぐる深い軒下が広い作業空間を作り出している。2階にはテラスがあり、昼間にテラスで丸太を自然乾燥させ、夕方になると納屋の内部に収められる。中川は狭隘な谷間で土地に余裕

がないため、納屋1階の深く取られた軒下を雨天時にも使える作業場としたり、清滝川に架けた幅広の橋の上を作業場や駐車場としたりといった工夫を凝らしてきた。また、集落の至るところに、丸太を立て掛けて乾燥させるための「モタシ」と呼ばれる横木が備えられている。

中川では北山杉の育林と北山丸太の加工・販売がすべて地域内でおこなわれ、それぞれの行程において極めて労働集約的な作業がおこなわれ、それだけ多くの労働力を必要とした。すでに明治初期には、現在以上の数の民家が存在していたことから考えると、中川は狭い谷間であるにも関わらず、大きい人口扶養力を持っていたのである。これが民家や加工場が密集した現在の中川の独特の集落景観をつくり出したのである。

4 社会情勢の変化と景観の変化

(1) 山林景観の変化

潜在自然植生と谷底の北山杉 中川の潜在自然植生は、清滝川沿いの河辺植生を除くと、ほとんどがシキミーモミ

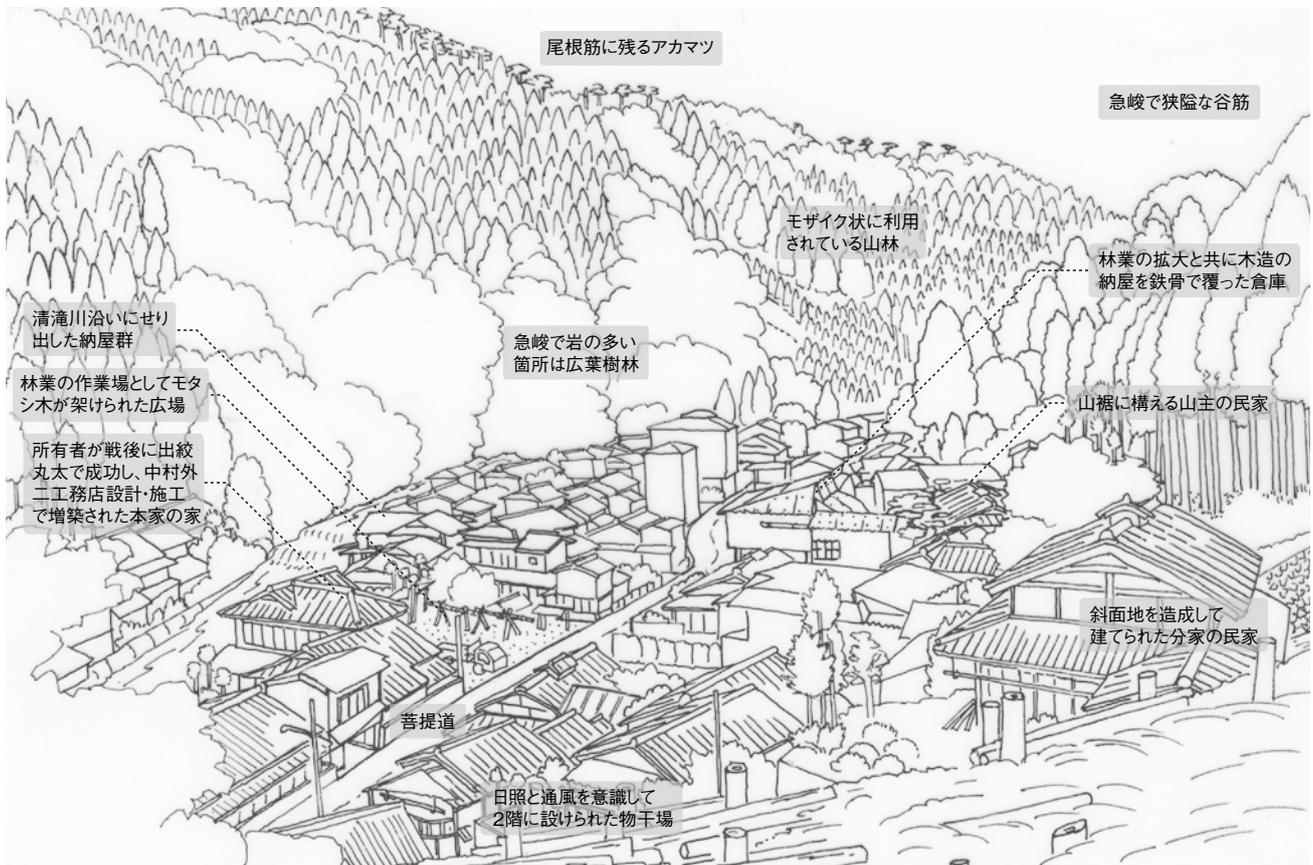


図5 中川集落全体の図解

群落である。この群落はヤブツバキクラス域上部の山地に成立する常緑針葉樹と常緑広葉樹の混交林で、モミ、カヤ、ツガ、ウラジロガシ、アカガシなどが立地により優占または混生する。中川では北山林業の展開に伴って山林の利用が進み、現在その面影はない。

北山杉が脚光を浴びる昭和30年代後半頃まで、中川の山は尾根から谷にかけて、アカマツ林→ヒノキ林・落葉広葉樹林→スギ林、という順の林相になっていたという。地力が限りなくゼロに近い尾根近くはアカマツ林、尾根から中腹にかけては落葉広葉樹林やヒノキ林、そして谷底の水分と養分が豊富な土地にスギを植えた。アカマツやヒノキは伐期が100年近くと長く、臨時の出費のための蓄えとしていた。薪炭材をとる落葉広葉樹林は伐期が約15年であった。

近世中期から中川やその周辺地域で育てられてきたスギはタルキを生産する台杉仕立てが主であった。台杉仕立てとは、スギの幹の地上高60～70cmのところから複数本の細い立ち木が立つように育てる方法である。明治時代に入ってから挿し木をして一本で育てる一本仕立てが開発さ

れた。一本仕立ては床柱の生産に特化した仕立て方で、台杉仕立てより成長が早いため瞬く間に普及した。岩井によると、明治期から大正期にかけて既存の台杉林の50%が一本仕立て林に変わったという²⁾。

一面の一本仕立て林 しかし、昭和30年代に入ると燃料革命が起こり薪炭の需要が激減し、落葉広葉樹林の必要性も低下した。昭和40年代頃からはマツ材線虫病によるアカマツの枯死が起こり、平成に入る頃にはほとんど枯れてしまった。さらに昭和35、36年(1960、1961)の建築基準法の改正によって都市地域の防火基準が強化され、外回りの軒下に化粧材を用いることができなくなった。それにより垂木材の需要が著しく減少し、タルキ生産が主であった台杉の価値も下落したという。一方、昭和30年代の高度経済成長期になると全国の一般家庭に床の間が普及したことで床柱としての北山丸太の需要は一気に高まった。その結果、アカマツ林や落葉広葉樹林、台杉林は昭和30～40年代にかけて床柱を生産する一本仕立て林へと大幅に転換していった。多様な林相から単一の林相へと変化したのである。

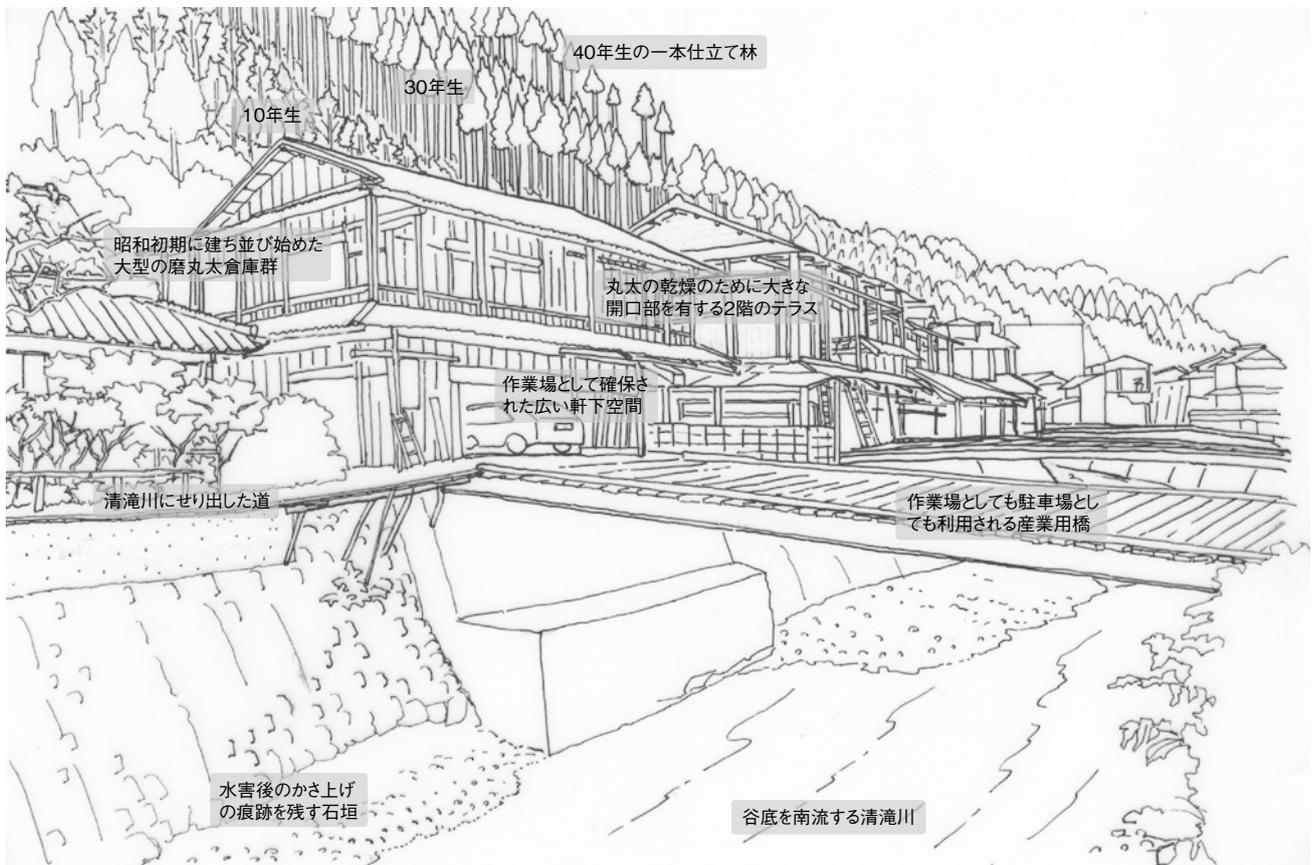


図6 複層の納屋群の図解

(2) 集落景観の変化

明治35年の周山街道の開通により、菩提道（京道）などを通して市中まで女性が徒歩で運んでいた林産物の運搬方法が、牛車運送やトラック運送に変化した。輸送力の増大により、中川に産地問屋が成立し、北山丸太の在庫を集落内で保管する必要が生まれた。また、世界恐慌の影響で丸太の価格が下落するという状況に対抗するため林業の組合化や企業化が図られたり、北山杉の育林や丸太の製造技術が改良されて生産量も増大したりした。これらの背景によって、林業の作業場が屋敷地から独立するようになり、集落内には乾燥と保管機能を併せ持つ複層の巨大な納屋が建ち並ぶことになる。

戦後になると育林・加工技術の機械化や林道の整備が進み、生産量が大幅に増えた。また、全国的一般家庭の床の間に北山丸太が普及し、需要がさらに拡大した。こうしたことを受け、昭和30年代になると作業場や倉庫の大型化がさらに進み、土地に余裕のある集落外に移転するようになった。

使われなくなった納屋や小屋といった付属屋は改築や改装が施されて居室となり、水回りは燃料革命を受けて改修が進んでいる。一方、土蔵造りの主屋はほとんど変わらない。

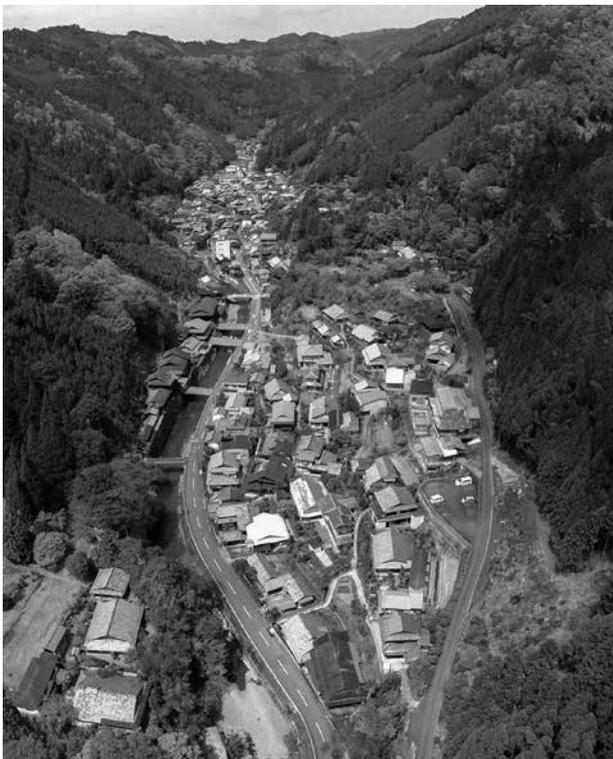


図7 モザイク状の山に囲まれた中川

5 変化の中の持続

中川は史料に登場する13世紀初頭以来、様々に変化してきた。変化の中にありながらも、山稼ぎの村としてあり続けてきたことに変わりはない。特に、中川というと北山杉一色の山並みや複層の巨大な納屋に注目が集まりがちだが、実はそれらは大正以降の北山丸太の需要の高まりに伴って出現したものである。文化的景観の調査から、その需要に応じるために本来はスギの生育に向いていない土地にも植林を広げていき都市の営みを支えてきた姿が浮かび上がってきた。一方、バブル崩壊から現在まで北山丸太の需要は低迷が続いている。考え次第であるが、かつての生産量に戻ったとも言えるだろう。

今後、中川が重要文化的景観の保護対象となるならば、谷底のスギ林や土蔵造りの主屋といった変わらず続いているものは保護し、中腹の山林や付属屋といった変化を受け止める部分は変わることを許容すること、工芸品にまで高められた林業の技術と暮らしの知恵の継承を積極的に進めること、一方でそうした無形の部分を出来るだけ記録しておき復活の際の手引書としておくこと、といったことが取組として考えられるだろう。（恵谷 浩子）

註

- 1) 国立文化財機構奈良文化財研究所文化遺産部景観研究室編（2019）、21頁。
- 2) 京都市文化観光資源保護財団編（2006）、37頁。

参考文献

- 岩井吉彌（1986）『京都北山の磨丸太林業－林業産地再編のメカニズム－』都市文化社
- 岩水豊（1975）『磨丸太のすべて』大日本山林会
- 京都市編（1993）『史料京都の歴史6 北区』平凡社
- 京都市編（2004）『史料京都の歴史14 右京区』平凡社
- 京都市文化観光資源保護財団編（2006）『文化的景観（北山杉の林業景観）保存・活用事業報告書』文化庁・京都市文化観光資源保護財団
- 京都大学農学部磨丸太研究グループ編（1977）『京都府を中心とした磨丸太林業の研究』京都大学農学部磨丸太研究グループ
- 斎藤清明（1992）『京の北山ものがたり』松籟社
- 相馬大（1977）『北山杉の里』白川書院
- 坂本喜代蔵（1970）『北山台杉と磨丸太』大日本山林会
- 坂本喜代蔵（1987）『北山磨丸太と古建築』大日本山林会
- 国立文化財機構奈良文化財研究所文化遺産部景観研究室編（2019）『京都中川の北山林業景観調査報告書』京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課

第6節 「京都の文化的景観」リスト

1 1次リスト

表1 「京都の文化的景観」1次リスト（その1）

	地域分類	エリア	キーワード
1	桂川上流域	広河原・花脊	農山村, 林業, 松上げ, 虫送り, 粽用の笹生産
2		黒田	農山村, 林業, 伏条台杉群, 板倉, 公民館建築
3		山国	農山村, 林業, 洗い場（イトヤ）, 鮎漁, 山國神社, 山國隊軍樂
4		弓削	農山村, 林業, 木材市場, 八幡宮社, 周山街道, 公民館建築
5	花折断層地帯	久多	林業, 志古淵神社, 松上げ, 花笠踊, 友禪菊
6		大原	小盆地, 高野川, 天台宗寺院（勝林院・来迎院・三千院等）, 江文神社, 農山村, 棚田, 赤紫蘇, しば漬, 茅葺民家（トタン被せ）
7		八瀬	高野川, かま風呂, 保養地, 八瀬赦免地踊り
8		比叡山	霊場, 延暦寺, 行者道, 登山道, 近代保養地
9	北山南縁	静原	農山村, 静原社, 烏帽子着
10		鞍馬	鞍馬山, 鞍馬寺, 門前町, 鞍馬街道, 街村, 元炭問屋の民家群, 鞍馬石, 木の芽煮, 鞍馬火祭
11		貴船	貴船山, 貴船神社, 貴船川, 料亭, 川床
12		雲ヶ畑	雲ヶ畑川（賀茂川源流）, 山村, 林業, 茅葺民家（トタン被せ）, 石垣, 松上げ
13		中川	清滝川, 山村, モザイク状の山林, 北山林業, 北山杉（台杉仕立て・一本仕立て）, 磨丸太倉庫群
14		小野郷	周山街道, 農山村, 林業, 山林地主の民家, 岩戸落葉神社
15		三尾（梅尾・横尾・高雄）	寺社（高山寺・西明寺・神護寺等）, 林業, 近代保養地, 川床
16	愛宕山麓	愛宕山	霊場, 愛宕神社, 火伏信仰, 千日通夜祭（千日詣）
17		水尾	農山村, 清和天皇社, 柚子, 石垣
18		檜原	農山村, 丹波から愛宕山への参道, 一の鳥居, 旅籠建築, 砥石, 棚田（鎧田）, 桃園地
19		越畑	農山村, 棚田, 茅葺民家（トタン被せ）
20		鳥居本	愛宕山への表参道, 門前町, 農村, 五山送り火「鳥居形松明」, 嵯峨鳥居本伝統的建造物群保存地区
21	東山丘陵	祇園界隈	八坂神社, 建仁寺, 花街（祇園甲部・宮川町・祇園）, 南座, 祇園新橋伝統的建造物群保存地区
22		古門前通・新門前通	古美術商の同業者町
23		清水界隈	寺社（知恩院・高台寺・清水寺等）, 霊廟（大谷祖廟・大谷本廟）, 歴史的参道, 茶屋, 土産物店, 産寧坂伝統的建造物群保存地区
24		五条坂	清水寺, 清水焼, 登り窯, 陶磁器商
25		泉涌寺界隈	泉涌寺, 天皇陵, 京焼, 伏見人形, 商店街
26		深草	稲荷山, 伏見稲荷大社, 門前町, 街道町, 琵琶湖疏水（鴨川運河）
27	桃山丘陵	伏見	宇治川・高瀬川・琵琶湖疏水（鴨川運河）, 近世城下町, 京阪奈の中継点, 酒造業, 伏見港, 御香宮神社
28		桃山	桃山, 天皇陵, 伏見城跡
29	紙屋川流域	鷹峯	鷹峯台地, 紙屋川, 京見峠, 山国街道, 街村, 船岡山, 御土居
30		衣笠	鹿苑寺（金閣寺）, 五山送り火「左大文字」, 近代住宅地, きぬかけの路
31		西陣	西陣織, 同業者町, 織屋建て, 商店街, 仕出し, 今宮神社
32		北野	北野天満宮, 花街（上七軒）, 天神市, ずいき祭, 御土居

表1 「京都の文化的景観」1次リスト(その2)

地域分類	エリア	キーワード	
33	御室川流域	御室・花園	段丘、双ヶ岡、寺社(仁和寺・龍安寺・妙心寺等)、土地区画整理事業
34		山越・鳴滝	低位段丘、植木生産地、造園業
35		原谷	谷中分水界、戦後開拓地、桜林
36	桂川谷口部	北嵯峨	扇状地、大沢池・広沢池、大覚寺、嵯峨七ツ塚古墳群、田園、嵯峨祭
37		嵯峨・嵐山	桂川、嵐山、寺社(野々宮社・天龍寺・清涼寺等)、竹林、保津川下り、製材業、西高瀬川
38	北摂山地東麓	松尾	桂川、松尾大社、西芳寺(苔寺)、洛西用水、神幸祭・還幸祭
39		檜原	山陰街道、物集女街道、宿場町、本陣建築
40		大枝	園芸農林業、京たけのこ、富有柿、桂坂ニュータウン
41		大原野	複合扇状地、大原野神社、園芸農林業、京たけのこ、洛西ニュータウン
42	鴨川扇状地上流部	上賀茂	賀茂別雷神社(上賀茂神社)、社家町、明神川、すぐき菜、賀茂なす、葵祭、上賀茂伝統的建造物群保存地区
43		深泥池	農村、粽加工、水生植物群落
44		北山通	高級住宅地、ケヤキ並木、土地区画整理事業
45		松ヶ崎	泉川、洗い場、菜の花漬、涌泉寺、題目踊り、五山送り火「妙・法」
46		下鴨	賀茂御祖神社(下鴨神社)、糺の森、泉川、景勝住宅地、葵祭
47		出町柳	賀茂川・高野川、枳形商店街、鴨川デルタ
48	鴨川扇状地中央部	東陣界限	中心市街地(上京)、御霊神社(上御霊神社)、相国寺、公家町跡、同志社大学、老舗、辻子、小川通、茶道家元、茶道具店
49		祇園祭山鉦町	中心市街地(下京)、和装関係問屋、銀行、町衆、祇園祭、六角堂
50		三条～四条河原町 界限	寺町、各種専門小売店舗、百貨店、商店街(寺町通・新京極通・河原町通・三条通・錦小路通・四条通等)、近代建築群、八坂神社御旅所
51		木屋町通界限	高瀬川、藩邸跡、寺社(瑞泉寺・廣誠院等)、花街(先斗町)、歓楽街、納涼床、みそそぎ川
52		二条～壬生界限	湧水、堀川、神泉苑、壬生寺、二条城、染色工場、木材問屋、西高瀬川
53	鴨川扇状地末端部	東西本願寺界限	本願寺(西本願寺)、真宗大谷派(東本願寺)、興正寺、門前町、仏具製造販売業、宿泊施設、龍谷大学
54		京都駅前	ターミナル駅、宿泊施設、飲食店街、京都タワー、柳原銀行記念資料館
55		島原	公許遊郭跡、大門、揚屋建築、置屋建築
56	白川扇状地	北白川	山中越、白川石、石材業、小倉町住宅地
57		吉田	吉田山、吉田神社、銅板葺住宅群、京都大学、学生街、山中越
58		哲学の道界限	寺社(慈照寺・本山獅子谷法然院等)、哲学の道、桜並木、景勝住宅街、五山送り火「大文字」
59		南禅寺界限	禅宗寺院、琵琶湖疏水分線、近代別邸群、疏水園池、琵琶湖・淀川水系の魚類、アカマツ
60		岡崎公園	大規模街区、琵琶湖疏水(鴨東運河)、平安神宮、文化施設群(美術館・動物園・ホール等)、時代祭
61	山科盆地	安朱	毘沙門堂、琵琶湖疏水(山科疏水)、文教住宅地
62		追分	旧東海道と奈良街道の分岐点、街村
63		清水焼団地	窯業の同業者町(窯元・問屋・材料屋等)
64		勸修寺	勸修寺、ブドウ畑、観光農園
65	鴨川自然堤防帯	上鳥羽	教王護国寺(東寺)、羅城門跡、鳥羽街道、街村、弘法市、らくなん新都
66		下鳥羽	鳥羽離宮跡、鳥羽街道、街村、らくなん新都
67	桂川自然堤防帯	梅津	自然堤防集落、梅宮大社、染色工場
68		久世	自然堤防集落、洛西用水、水田、西国街道、光福寺(蔵王堂)、久世六斎念仏
69		久我・羽束師	自然堤防集落、洛西用水、水田、久我神社、羽束師坐高御産日神社、
70	三川合流域	向島	宇治川、太閤堤、大和街道、堤道集落、生垣、巨椋池干拓地
71		淀	桂川・宇治川・木津川、城下町、興杼神社、競馬場、ベッドタウン

2 2次リスト

(1) 東陣界限 —— 中心地域の伝統景観

位置 京都市中心部。東は烏丸通、西は堀川通、北は鞍馬口通、南は今出川通を含む一帯。賀茂川と高野川が合流して鴨川になる地点のやや北西にあたる。

自然基盤・自然の使い方 鴨川扇状地のうち、扇中央部にあたる。鴨川右岸には、賀茂川の分水路がいくつか存在した。その一つは相国寺を通る御所用水として昭和初期まで存在した。また一つは小川として本法寺・法鏡寺・法恩寺の東側を南流した。近年に暗渠化されたが、その川の名残は今も小川通にみることができる。

地理的・歴史的な位置づけ 室町期に中心市街地として発展し、足利家の邸宅となった「花の御所」や相国寺など多くの寺院が立地した。応仁の乱ではこの一帯で東軍と西軍が争った。鎌倉末期に現位置に御所が移り、幕末には相国寺境内の一部が薩摩藩邸となり、明治期に同志社英学校が設立した。

現在の景観 小川通は、両側に本法寺や宝鏡寺、法恩寺、妙覚寺、妙顕寺など多くの寺院や、茶道家元、その周辺に茶道関係の建物が集まる。道路沿いには広範囲にわたる瓦付き塀や、茶道具を見せるショー・ウィンドウ、寺院の境内林などがみられ、電柱の地中化や石畳風舗装などの整備も進んでおり、落ち着いた雰囲気醸し出している。また、本法寺東側には小川にかかった橋の痕跡がのこる。

烏丸通東側には、相国寺や京都御所の大規模な土地利用がみられ、土塀や樹木が連なる。また今出川通には冷泉家住宅や二條家の塀の一部など近世まであった公家町の形跡を辿ることができ、一方、同志社大学ではレンガ造の近代建物をみることができる。

地域での活動 地域では「小川通・上御霊前通界限まちづくりの会」などの活動がおこなわれている。

参考文献

- 片平博文 (2017) 「12～13世紀における平安京北辺の風景と其の変化:西洞院川と小川との関係」『河角龍典教授追悼記念論集』立命館大学人文学会
- 小枝弘和 (2015) 「同志社のはじまりと京都—140年前の同志社と“八重の桜”のその後を考える」同志社女子大学生活科学49
- 林倫子ほか (2009) 「禁裏御用水の構成と周辺園池との関係」『土木学会論文集D』65 (2)



図1 茶道家元や茶道関係の建物が並ぶ小川通



図2 京都御所 (右) と同志社大学 (左) が並ぶ今出川通

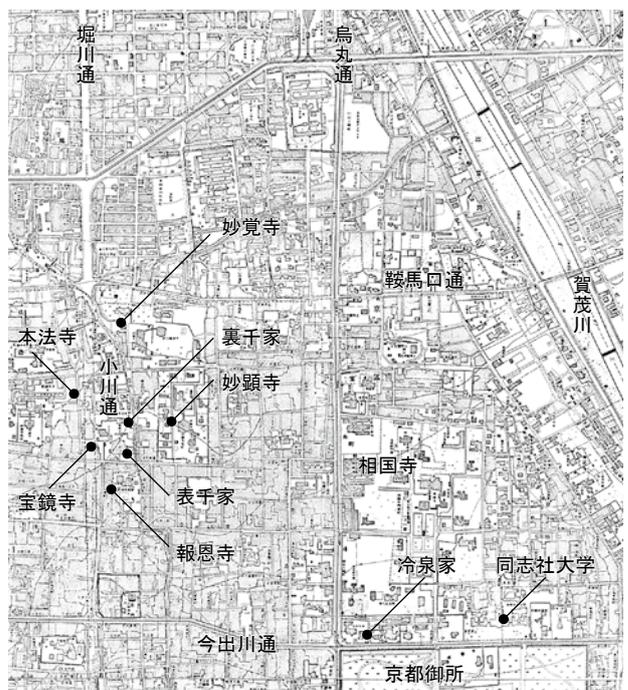


図3 東陣周辺
(大正11年〈1922〉京都市都市計画図に追記)



図4 西本願寺総門の先に並ぶ商店



図5 仏具店と本願寺伝道院



図6 東西本願寺界限
(大正11年京都市都市計画図に追記)

(2) 東西本願寺界限 —— 中心地域の門前町景観

位置 京都市中心部。概ね北は花屋町通、南は七条通、東は高倉通、西は大宮通の間にあたる。

自然基盤・自然の使い方 鴨川扇状地の末端部にあたる。両本願寺東沿いは川が流れ、堀を思わせるような構えとなっている。東本願寺では明治期に琵琶湖疏水に沿って設置された水源地から高低差を利用して本願寺水道が引かれ、東本願寺周辺の堀や渉成園の池などに供給された。

地理的・歴史的な位置づけ 秀吉や家康の寺地寄進により現在の西本願寺、東本願寺が建立された。周辺には大坂天満本願寺寺内町から移った住民等により寺内町が形成された。西本願寺北には日蓮宗の本圀寺が隣接、南には興正寺や坊官下間氏の邸宅があった。

現在の景観 西本願寺周辺の土地は、かつてあった本圀寺が西本願寺に、下間氏邸宅が龍谷大学に変わりつつ、興正寺とともに大規模な土地利用が受け継がれている。

寺の門前には仏壇、仏具、数珠、佛教書などの店が集まっている。これらの建物には下屋庇がつくが、現代の建物も周囲にあわせて同様な庇がつき、道路に面して軒が一行に揃っている。またこの通りには、明治期に本願寺を大株主とする真宗信徒生命保険株式会社の社屋、本願寺伝道院がある。煉瓦造建物でインド風のドームや中国風の高欄など随所に大胆な意匠がみられ、街並みにインパクトを与えている。

東本願寺門前には、江戸時代に全国からの参拝者が泊まる場所として設けられた詰所や、参拝者向けの布団貸出しから発展し、茶道具や幕などの貸出し、さらには会場設営へ発展した店などがある。

またこの一帯は京都駅から至近距離であることから旅館やホテルも多数立地している。

地域での活動 区役所では地元商店街や伝統産業事業者等によるイベントなど門前町の活性化を進めている。

参考文献

- 金度源ほか(2011)「近代の利水設備“本願寺水道”の保存と活用による環境防災水利の提案(都市計画)」『日本建築学会近畿支部研究報告集 計画系(51)』
- 西川幸治・山崎正史・西村章・木下年哉・篠田祐一(1978)「東本願寺周辺の景観の変遷過程と保全修景計画(都市計画)」『日本建築学会近畿支部研究報告集 計画系』18
- 渡邊秀一(2007)「東西本願寺門前町の伝統景観と変容」『京都地図絵巻』古今書院

(3) 嵯峨——周縁地域の景勝・遊楽景観

位置 京都市中心部より西に位置する。東は太秦，西は小倉山（標高 296 m），北は上嵯峨の山麓，南は大堰川（桂川）に囲まれている。

自然基盤・自然の使い方 南に大堰川が北西から南東に向かって流れる。往古は葛野川（現桂川）の溢水による沼沢地で，未墾地が大半を占めていたが，秦氏が川を改修し，^{かどの} 萩原堤の完成によって田野の開拓が進み，肥沃な地となった。桂川沿いの下嵯峨村は平安京と嵯峨・嵐山を結ぶ下嵯峨街道（三条街道）が東西に通じ，大堰川に接する地の利を生かして山国庄等からの筏材木の揚陸地として栄えた。明治期は大豆，菜種，大根，実綿，米，製茶，竹，鮎などが特産品だった。

地理的・歴史的な位置づけ 平安遷都後は禁野とされ，天皇・貴族が遊獵した。嵯峨天皇の嵯峨院（現大覚寺），後嵯峨上皇の亀山殿（現天龍寺）をはじめとする貴族の屋敷が建てられ，藤原定家などによって歌が詠まれるなど，文学の舞台となった。明治には西高瀬川が開通し，筏材木集散の中心地となり，やがて製材業に発展した。

現在の景観 広沢池の北方には嵯峨の山々がそびえ，池周囲には水田が広がる。一帯には多数の古墳があり田園風景のなかにも古墳の遺構をみることができる。ここには往時を偲ばせる風景が広がっており，嵯峨野歴史的風土特別保存地区にも指定されている。

広沢池や大沢池より西に位置する清凉寺から，清凉寺南門と嵐山の渡月橋を結ぶ直線の道が延び，これに並行または直行する道が続く。これらの道は，清凉寺の前身である^{せいかじ} 棲霞寺の頃（9世紀初頭）に整備されたといわれ，当時の地割が現代まで継承されている。

渡月橋附近に石垣や生垣で囲み，土地を嵩上げた寺院などが見られる。このあたりから桂川右岸の嵐山，そして保津峡にかけての一带は史跡及び名勝「嵐山」に指定され，さまざまな関係者との調整のもと保護が図られている。

地域での活動 区役所では，嵯峨において地域団体，大学およびNPO法人等との連携を通じて，活性化を図ろうとしている。

参考文献

金田章裕編（2007）『平安京—京都 都市図と都市構造』京都大学学術出版会

山口敬太（2015）「近世—近代の野と名所—嵯峨野の風景の生成と持続」『日本風景史』昭和堂



図7 鳥居形の山（曼荼羅山）から嵯峨をみる



図8 清凉寺門前の通り（嵯峨祭の様子）



図9 嵯峨一帯（清凉寺南門から桂川まで直線の道が延伸，大正11年京都市都市計画図に追記）



図10 伝統的建造物群保存地区内の社家と明神川



図11 明神川と菖蒲園川の間位置する瓦付き土塀と民家



図12 上賀茂周辺
(明治25年〈1892〉仮製地形図に追記)

(4) 上賀茂 —— 周縁地域の社家町景観

位置 鴨川上流の東側、神山の南、松崎山の西に位置する。

自然基盤・自然の使い方 鴨川扇状地上流部の三角地。北に神山（ご神体）が鎮座し、南に直線上に丸山・小山、上賀茂神社本殿が並び、境内より南に社家町が広がる。

賀茂川から上賀茂神社境内に引き込まれた川は「御手洗川」と呼ばれ禊にも使われた神聖な川となる。この川は丸山の北麓蟻ヶ池に源を発する「御物忌川」と合流すると、「^{みたらし}檜の小川」となって境内を流れる。境内を出ると、分流して一方は「菖蒲園川」として南下し、もう一方は「明神川」として社家町を流れる。明神川は広い屋敷地に取り込まれ、池を形成し、禊、庭園、洗い場などとして利用されている。

地理的・歴史的な位置づけ 上賀茂神社は古くは農作に水を潤す神として崇拝されていたが、平安遷都後、下鴨神社とともに王城の地主神として伊勢神宮につぐ格となり、歴代皇女が斎王として奉仕した。丸山・小山周辺は進駐軍によってゴルフ場となったが、今も敷地内に神が降臨する御阿礼所が守られている。

社家群周辺の農地では京野菜やすぐき菜が生産され、市街地で売られる。また上賀茂よりやや東に位置する深泥池周辺の集落では、祇園祭に用いる粽を作っている。

現在の景観 上賀茂神社前を中心に社家が残る。一部は重要伝統的建造物群保存地区である。明治期の「上賀茂村沿革調書」によれば、分家は二階建・破風路地門は禁止とされていた。やや低めの瓦付き土塀が連なり、塀の上からは白漆喰の主屋や土蔵、松や台杉の庭木が見える。緩やかな曲線の道に沿って明神川からの水が道路と屋敷地の間を流れ、敷地内に水を引き込み庭池としている家もある。また明神川の一部は暗渠化されたが、かつては屋敷前には橋がかかっていたという。東方には松崎山が身近に見え、至る所から水の流れる音が聞こえ、落ち着いた環境を醸し出している。上賀茂神社周辺よりさらに東や南へ行くと、田畑が増え、京野菜や酸茎漬を作る農家住宅が建っている。

地域での活動 区役所では伝統野菜や京野菜の消費（地産地消）拡大に向けた情報発信の強化を進めている。

参考文献

- 京都市都市計画局（1978）『上賀茂一町なみ調査報告』
- 京都市埋蔵文化財研究所編（2011）『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2011-1 史跡賀茂別雷神社境内』
- 熊澤栄二（1999）「上賀茂の場所と構造 —— 賀茂祭と賀茂神話の関わりから」『日本建築学会計画系論文集』64（520）

(5) 松ヶ崎・下鴨 —— 周縁地域の沿道・水辺景観

位置 京都盆地の北東、五山送り火の松ヶ崎妙法の火床となる妙法山と、賀茂川・高野川の二河に囲まれ、出町柳の両河川合流点まで続く三角地帯に位置する。

自然基盤・自然の使い方 賀茂川と高野川に挟まれた下鴨は古代より水害常襲地で、寛文10年(1670)には賀茂川右岸に寛文新堤が築造されたが、賀茂川左岸や高野川両岸に堤防はなく水害防備林のみで、この地帯は事実上、京都市中を守るための遊水池として機能していた。

一方、川に近いため用水を引きやすく、水利用の面では恵まれていた。1600年代中頃には高野川右岸に井出ヶ鼻井堰が造られ、松ヶ崎村と下鴨村の灌漑用水として泉川(前川ともいう)が引かれた。松ヶ崎では生活・防火用水のほか庭の園池にも利用された。

地理的・歴史的な位置付け 松ヶ崎は比叡山に近く天台宗派の強い地であったが、鎌倉時代末期、村全体が天台宗から法華宗(日蓮宗)に改宗した。「妙・法」の送り火や題目踊りはその記念に始まったと伝わる。

賀茂川と高野川に挟まれた三角地帯は近代まで条里型地割の田畑が広がっていたが、昭和初期の区画整理事業で市街地化が進んだ。下鴨神社の社家町を貫く下鴨本通の拡張には住民から反対運動が起きたが、後に住民による下鴨土地区画整理組合が結成され積極的に宅地化された。また大正12年(1923)から昭和49年(1974)まで下加茂撮影所があったことも関係し、昭和初期には下鴨は社家町から文化人が居住する新興住宅地へと様相を変えた。

現在の景観 現在の下鴨は、下鴨中通(鞍馬街道)沿いに農家造りと町家造りの形式が混在した町並みを残しつつ、その周囲に住宅地が広がる。高野川に並行する下鴨東通や賀茂川に並行する下鴨西通には大企業の役員宅など大きな敷地が立ち並ぶ。松ヶ崎では旧道「せせらぎ通り」沿いに泉川が流れ、土塀と生垣の屋敷構えが並ぶ。宅地化が進むなかに畑が残され、花菜が栽培されて花漬に加工される。

地域での活動 下鴨では第2住宅地区および第3住宅地区に建築協定が締結されている。また地元有志によって下鴨風土記研究会が定期的に開催され、地域の郷土の歴史や文化を学び共有する取組がおこなわれている。

参考文献

辻晶子・大場修(2011)「近世末期下鴨神社における社家町を含む周辺地域の構成」『日本建築学会大会学術講演梗概集』
網本逸雄(2013)『京都盆地の災害地名』勉誠出版



図13 下鴨中通の町並み



図14 松ヶ崎の泉川沿いに土塀と生垣が並ぶ町並み

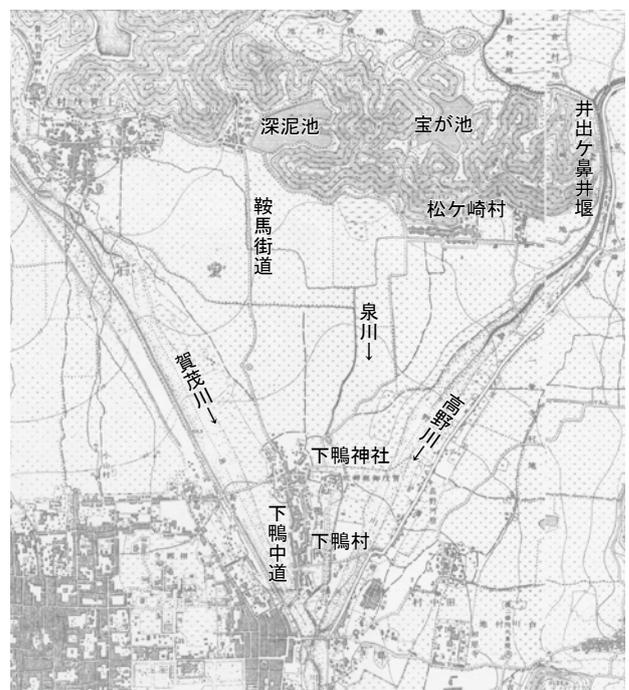


図15 松ヶ崎・下鴨周辺
(明治25年(1892) 仮製地形図に追記)



図16 薪炭を積んだ深い軒と鞍馬川を堰止めた「かわ」

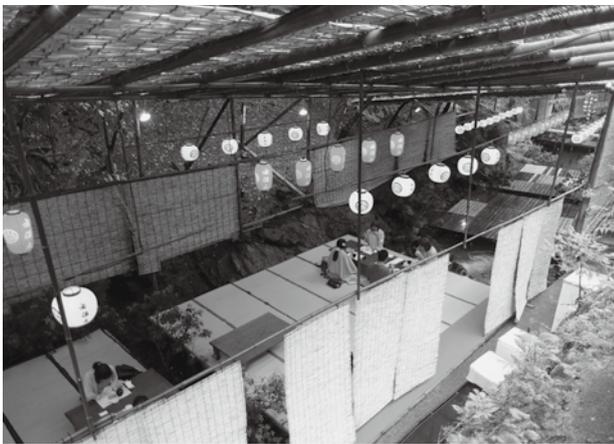


図17 貴船の料理旅館が営む川床

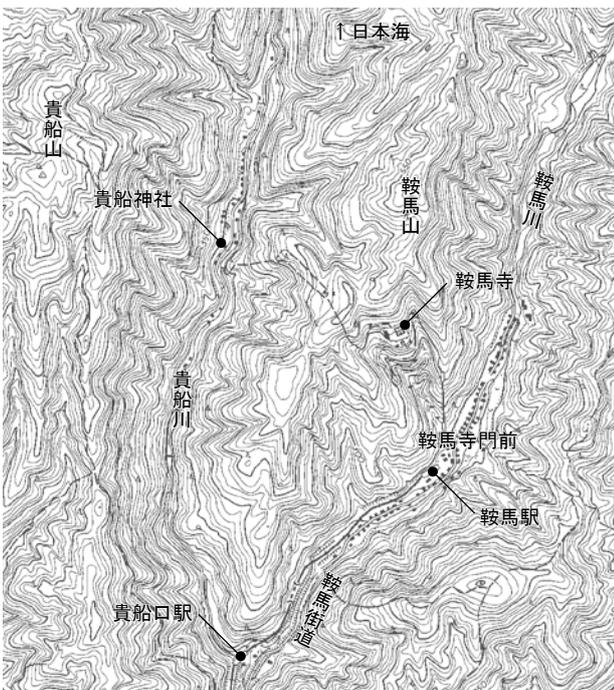


図18 鞍馬・貴船の位置図
(国土地理院数値地図 25000 に追記)

(6) 鞍馬・貴船 —— 周縁地域の信仰・街道景観

位置 京都盆地の北東、賀茂川の鞍馬口から鞍馬街道を10km程登ったところに鞍馬山(584m)があり、その西麓に貴船、東麓に鞍馬が位置する。

自然基盤・自然の使い方 鞍馬・貴船附近の山は賀茂川の水源地として重視されてきた。

鞍馬にある由岐神社の例祭「鞍馬火祭」では、松明の材料の一部である松やコバノミツバツツジ、クロモジなどを周辺の里山から採取する。また、この一帯から産出される鞍馬石や貴船石は庭石として珍重されてきた。

地理的・歴史的な位置づけ 鞍馬は鞍馬寺門前と鞍馬街道沿いの薪炭等の中継点という2つの性格を持つ。鞍馬街道は京都と丹波、若狭を結び、若狭から魚介類が運ばれ、山村から都へは黒木、鞍馬炭、柴、鞍馬石(庭石)、都から山村へは日用品が運ばれた。戦後の燃料革命によって中継集落としての基盤を失い今は市街地へ通勤する近郊集落となるが、門前は今もにぎわいを見せている。

貴船は平安時代以来、京の人々と関わりをもち、水神を祀る貴船神社が崇敬されてきた。夏になると納涼として貴船川に川床が出されるが、その始まりは大正時代に入ってからという。昭和5年(1930)に叡山電鉄が鞍馬まで開通すると貴船を訪れる人も増加。鞍馬山から降りてくる人々に向けて川床を出す店は徐々に数を増やしていった。

現在の景観 鞍馬では門前・街道の町並みがみられる。切妻、平入の建物が連なり、その間に薪炭を保管した納屋が点在する。薪炭を積んでいたことから主屋の軒は深く、炭間屋のたたずまいを残す。軒先には鞍馬川を堰き止めてつくった「かわ」が流れるが、現在は暗渠化されて駐車スペースとなる箇所も多い。また、鞍馬石が採取されることから街道沿いには鞍馬石を集積した場所もみられる。

貴船には15軒ほどの料亭が並び、夏になると貴船川の水面に川床が出される。川床は溪谷の樹木や岩なども景色に取り込んで設置され、京都の風物詩の一つとなっている。

地域での活動 鞍馬火祭保存会では京都市と管理協定を結び、松明の材料を守るために獣害対策や路網の整備などに取り組んでいる。

参考文献

- 京都市計画局(1982)『鞍馬一町なみ調査報告』
- 京都府教育庁指導部文化財保護課編(1985)『重要文化財滝沢家住宅修理工事報告書』京都府教育委員会
- 星野剛徳・早川紀朱(2016)『京都貴船の川床の実測研究』『中央大学工学部紀要』51

(7) 大原 —— 周縁地域の信仰・農業景観

位置 京都盆地の北東部から、高野川に沿って遡った南北3.5km、東西0.3～0.5km、標高200～240mほどの谷状の小盆地。南方5kmに比叡山（標高848m）を望見する。

自然基盤・自然の使い方 花折断層による断層角盆地において、断層に沿って南流する高野川が河岸段丘を形成したことで現在の地形が出来上がっている。この地形を基盤とし、東西両側の山裾に「大原八箇村」と呼ばれた旧集落域が展開し、川に向かって棚田・段畑が広がる風景が特徴である。周辺は山々に囲まれ、里に近い山からは柴、奥山からは建築用材を産出した。薪炭、柴などが特産品で、大原の炭焼きは平安時代や鎌倉時代の和歌に詠まれている。一方、奥山には禁裏用の御入木山があり、火焚きが禁止されて炭を作ることができなかった。

この他、しば漬けやその材料となる赤紫蘇、茶、麦粉が生産された。また大原北部の百井町、大見町、尾越町を中心に、祇園祭の厄除け粽に用いる笹が採取された。

地理的・歴史的な位置づけ 北は若狭へ抜け、西は静原または百井峠を介して市原・鞍馬方面と繋がる。若狭街道の中継地点として栄え、中世以後は大原女が大原薪を京都市街まで売り歩くなど近隣農村の性格も有する。歴史的には比叡山延暦寺の強い影響下にあり、勝林院、来迎院など天台宗の寺院が建立された。また、惟喬親王や建礼門院の隠棲地となった歴史から、実際の景観に寂寥感を伴う心象風景が重ねられることも多い。

現在の景観 大原では棚田等の山里景観が保たれている。来迎院町の三千院等の門前には、観光客が増加した昭和40年代から土産物屋が並ぶ。井出町では高野川の氾濫対策として石垣で敷地が嵩上げされ、道沿いには石灯籠と愛宕神社の御札を入れた箱が並んでいる。一方、野村町には大きな屋敷が多く、石垣が多いが水害はなく、川石が多く採れることから石垣をつくったという。

地域での活動 NPO法人京都大原里づくり協会を中心に、古文書研究、勝林院研究、水生生物調査、地域史跡調査、古写真収集、広報紙の発行などの事業が展開されている。

参考文献

橋本暁子（2011）「京都近郊農山村における柴・薪の行商活動—明治前期から1950年代の八瀬・大原を事例として—」『歴史地理学』53（4）

小原行央・山崎正史・板谷直子（2012）「京都大原地区の集落景観における沿道みどり空間の構成」『日本都市計画学会関西支部研究発表会講演概要集』10



図19 民家の石垣・石灯籠と脇に立つ愛宕の札の入った箱



図20 しば漬に利用する赤紫蘇の栽培

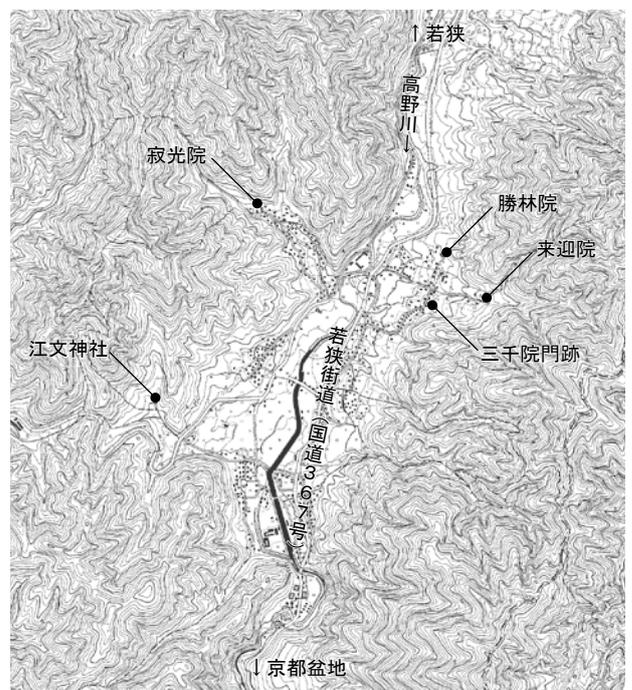


図21 中央を高野川が流れる大原の小盆地
(国土地理院数値地図50000に追記)



図22 東海道（右）と奈良街道（左）の分岐点



図23 街道沿いに立つ山科地蔵堂



図24 追分で西からの東海道と南西からの大津街道（奈良街道）が合流（明治25年仮製地形図に追記）

（8）山科——周縁地域の街道景観

位置 京都市東部，山科盆地の北縁及び東縁。

自然基盤・自然の使い方 山科は東西約3.5km南北約4.2kmの逆三角形の盆地で，三角形の頂点がそれぞれ京都，大津，醍醐（宇治・伏見）及び深草方面へ繋がる。北縁の扇状地上と，東部の黄檗断層沿いに近世でいうところの東海道（三条街道），奈良街道（東海道五十七次・大津街道・大坂街道・伏見道）が走り，これらは古代に遡る古道である。近代において盆地北部は街道沿いの市街地で，中・南部は田園地帯であった。明治期の特産品は茶，綿，石灰，薪，竹，竹の皮，筆，松茸，茄子のほか，砥の粉が著名であった。

地理的・歴史的な位置づけ 古くは天智天皇が都を遷した近江のヒンターランドとして藤原鎌足邸や天皇陵が築かれ，平安遷都後は京都の後背地となって，中世の山科本願寺造営に至る。近世には禁裏御料として，ほとんど武家支配に組み込まれることなく洛中との強い結びつきを維持した。古代から大津・京都を結ぶ交通，運輸の要地にあり，近代以後においても，東海道線や京津線といった鉄道が敷設されたほか，近代京都三大事業の一つとして琵琶湖疏水が建設された。明治12年（1879）に開通した当初の東海道線軌道跡は，昭和になって名神高速道路となった。

現在の景観 旧東海道沿いに点在する民家，道標，車石や，山科地蔵堂の手水に刻まれた「定飛脚」等の文字，日ノ岡峠の「亀の井」，奈良街道沿いの一里塚などにかつての街道景観の名残を留める。図22の中央に立つ道標は『伊勢参宮名所図会』にも描かれている。天智陵や山科本願寺の土塁は今も山科のランドマーク。疏水の水を用いた別荘開発は，安朱の住宅街に面影を残す。京津線三条-御陵間の地上軌道は平成9年（1997）の市営地下鉄東西線開業に伴い廃止されたが，軌道跡の一部が公園となっている。

地域での活動 「ふるさとの良さを活かしたまちづくりを進める会」が史跡部会，石造物調査部会，まちづくり部会などに分かれて，勉強会，町歩き，古文書整理，会報「ふるさと通信」の発行などをおこなっている。区役所でも，観光振興に力を入れるとともに，山科なす，清水焼等の伝統産業の活性化を進めている。

参考文献

足利健亮編（1994）『京都歴史アトラス』中央公論社
 佐野静代（2018）「琵琶湖疏水を利用した山科区安朱の地泉庭園群の形成—もう一つの“植治の庭”の系譜—」『景観史と歴史地理学』吉川弘文館

(9) 鳥羽街道界限 —— 周縁地域の街道景観

位置 東寺の西、かつて羅城門があった所から南インターチェンジ付近まで一直線に南下し、桂川沿いに納所ののうそを経て淀に至る道で、上鳥羽以北は平安時代に造られた「鳥羽の作道」^{つくりみち}を踏襲していると考えられる。

自然基盤・自然の使い方 桂川と鴨川の合流点である鳥羽には「草津」、桂川と宇治川が合流する納所には「淀津」と呼ばれる川湊が設けられていた。九条-鳥羽間は低湿地である代わりに平坦であり、この平坦さを利用して桂川の氾濫原を避けつつ、草津と京を一直線に繋いでいる。下鳥羽-納所間は豊臣秀吉が築いた堤防上を街道が走る。

地理的・歴史的な位置づけ 街道の成立は平安京建設時とも院政期（平安後期）とも言われるが、古代以来、淀川水運と陸上交通の結節点である草津・淀津と都を結ぶ幹線であったことは間違いない。院政期の鳥羽離宮（中島・竹田）を嚆矢として、中世の淀古城（納所）、近世の淀城など、沿線には時代毎に拠点施設が築かれたため、その重要性は衰えることがなく、運送業者である馬借や車借をはじめ多くの人々が往来した。天下の争乱時には軍路や陣地ともなり、鳥羽伏見の戦いでは街道そのものが主戦場の一つとなった。

現在の景観 街道沿いに店舗や住宅が並び、一部に長屋門や平入の瓦葺主屋、板壁の土蔵等が残る。特に、東西に延びる久世橋通や中山・稲荷通との交叉点には、大型の主屋や土蔵が集中しており、交通量も多く、物流が盛んだった街道の特徴が表れている。氾濫原であったため、30cm～1m程の高さの石垣をつくり、その上に屋敷を構えている。特に土蔵は長屋門や主屋よりも地盤を高くするところが多い。また、地盤の嵩上げは現代の建築においてもみられる。旧上鳥羽村には京への入口に祀られた六地藏の1つ浄禅寺がある。

地域での活動 区役所では景観の保全と散策ルートなどを作成して情報発信を進めている。

参考文献

足利健亮編（1994）『京都歴史アトラス』中央公論社
京都市・（財）京都市埋蔵文化財研究所「～文化財と遺跡を歩く～京都歴史散策マップ 32鳥羽作道」（リーフレット）
竹中友里代（2017）「近世鳥羽街道における牛車の活動」『京都府立大学学術報告 人文』69



図 25 古い町並みが残る中山稲荷道との交叉点



図 26 久世橋通旧千本の北東にみられる石垣

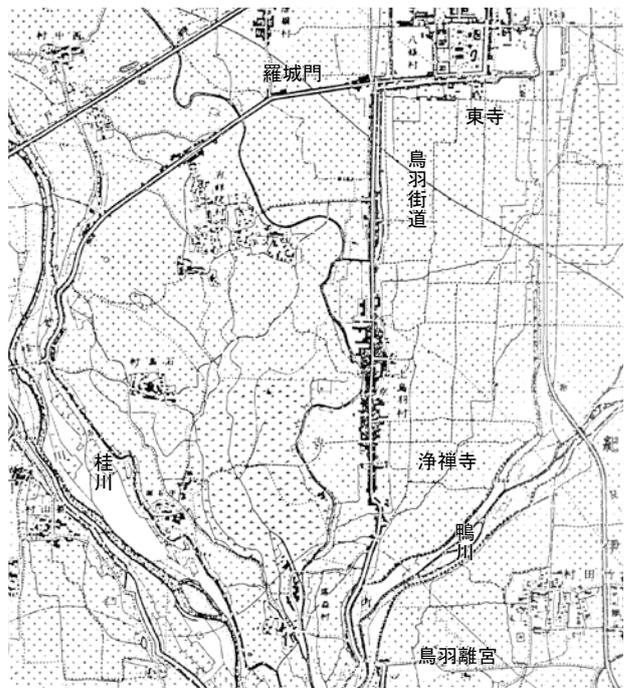


図 27 鳥羽街道界限の位置図
(明治 25 年仮製地形図に追記)



図 28 京たけのこを生産する竹林



図 29 大枝西長町の農家の軒先で売られる富有柿



図 30 大枝・大原野の位置図
(国土地理院数値地図 50000 に追記)

(10) 大枝・大原野 —— 周辺地域の園芸農林業景観

位置 京都盆地西縁の西山丘陵から向日丘陵にかけての
 一帯。京都市の西南部にあたり、大字堺は向日市や長岡京
 市と接する。

自然基盤・自然の使い方 京都盆地に海水が湛えられて
 いた太古から、盆地へ流れ込む河川の堆積と侵食によって、
 礫や砂、粘土から構成される地質と、西山丘陵とその末端
 の扇状地の地形が形成された。浅い谷底や扇状地の下部で
 は水田が営まれ、丘陵には竹林が、扇状地上部には柿畑な
 どの果樹園が展開する。京たけのこの用の孟宗竹の土壌には
 赤土のなかでも粘りのある白粘土が好まれる一方で、竹材
 用の真竹の竹藪は黒土とされ、地質・土壌に応じて農林業
 が営まれている。

地理的・歴史的な位置づけ 京都盆地縁辺の大枝・大原
 野には、山陰道や西山街道が通り、動乱や物語の舞台となっ
 た。こうした条件は、生業面にも影響し、近世までの大枝
 では商業活動が進展した。しかし、明治期の鉄道開通以降
 は農業活動が盛んとなり、京料理に用いられる京たけのこ
 や、数寄屋建築の材となる竹材、または栗や柿などの果樹
 といった高品質の農林産物を生産することによって、周辺
 地域の近郊農村として機能していった。そして、洛西ニュー
 タウンと桂坂ニュータウンが建設されベットタウンとして
 新たな展開を見せている。

現在の景観 山陰道や西山街道などの旧道沿いには街村
 がみられる。このエリアで特徴的なのは京たけのこを生産
 するための竹林で、手入れが行き届いた竹林は親竹が少な
 く、また林床には稲わらや茅が敷かれたり土入れがおこな
 われたりするため独特のものとなっている。大枝西長町で
 は富有柿の生産が盛んにおこなわれており、西山丘陵の斜
 面地いっばいに富有柿が植えられている。京たけのこや富
 有柿の収穫のシーズンになると街道に面した農家の軒先で
 直売される風景に出会うが、これは戦後にニュータウンが
 開発されたり車の所有率が高まったりするなかで生まれた
 ものである。

地域での活動 地域では「大枝アートプロジェクト」な
 どの活動がおこなわれている。

参考文献

村井康彦 (1991) 『京都・大枝の歴史と文化』 西洋環境開発
 大枝アートプロジェクト実行委員会 (2011) 『大枝・大原野 み
 どりの停留所をつなぐ』 ウインかもがわ

(11) 愛宕山麓 ―― 周辺地域の園芸農業景観

位置 愛宕山西麓の比較的傾斜の緩やかな場所を切り拓いて、南から北へ水尾・^{しきみがはら}檜原・越畑の3集落がある。標高はそれぞれ約250m, 440m, 390mほどであるが、斜面地であるため集落内で100m前後の標高差がある。

自然基盤・自然の使い方 3集落とも概ね西向きの扇状地に立地しており、扇中央付近を宅地とし、下位の土地を田畑として利用している。宅地が高い場所にあるのは、街道がそこを抜けていくことによるのであろう。

水尾は比較的急傾斜かつ狭隘であるため、日当たりがよいことを活かして稲作よりも柚子、柿、枇杷、柘榴などの栽培を選択している。檜原は石灰や砥石を産出し亀岡へ運んだ。中でも砥石は質が高いものとして珍重された。寒暖差が激しく菊菜などの高原野菜や、柚子が特産品である。越畑は、近世は薪、明治に灌漑用水が豊富となってからは稲作が盛んになった。寒暖の差が激しく花の色が綺麗なことから、近年はオミナエシなどの切花を売る。

地理的・歴史的な位置づけ 3集落を貫く府道50号線は老ノ坂峠や唐櫃越と並んで丹波国と山城国を結ぶ要路であり、近世には世木（南丹市、日吉ダムで水没）の鮎を嵯峨鳥居本へ運ぶ鮎の道でもあった。

水尾は早くから開け、奈良時代から天皇の行幸や遊獵があった。愛宕神社の麓にあり、近世には檜や笹を参拝者に、柚子や松茸等を洛中へ行商した。檜原は明治期まで原村といい、扇状地に広がる棚田は原の鎧田と称された。愛宕神社への裏参道があり、近世から明治期には茶屋や宿が並び、宮司や関係者も住んだ。越畑は、愛宕山参詣の便をよくするため、平安時代前期に開拓されたといわれる。

現在の景観 水尾は狭隘な土地であるため、民家の石垣が並び、柚子畑が広がる。檜原は棚田、愛宕への道標、宿場町としての建物などが残る。愛宕街道沿いは切妻造瓦葺き、街道から離れた所では入母屋造瓦葺きの建物が残る傾向がある。越畑は棚田と茅葺き民家が多い。中でも河原家住宅（明暦3年築・1657）は年代が明らかなものとしては市内最古の民家建築である。

地域での活動 大学やNPO法人と魅力をPRする事業、散策ツアー、藤袴の栽培などが実施されている。

参考文献

八木透監修（2004）『愛宕山と愛宕詣り』佛教大学アジア宗教文化情報研究所



図31 越畑の民家



図32 檜原の棚田

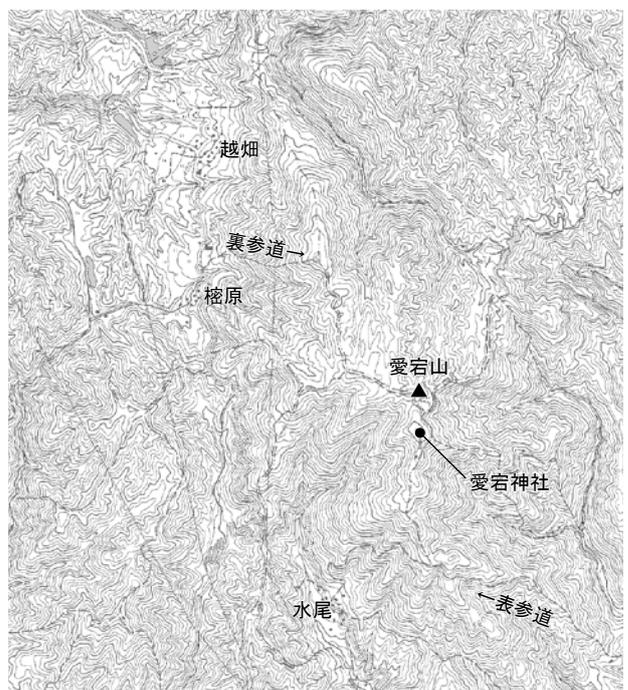


図33 愛宕山麓の位置図
(国土地理院数値地図50000に追記)



図 34 久多の北山友禅菊と茅葺き民家



図 35 川沿いの洗い場と川中央の川地藏



図 36 久多の位置図
(国土地理院数値地図 50000 に追記)

(12) 久多 —— 周辺地域の農林業景観

位置 京都市最北端に位置する山間集落である。朽木村（滋賀県高島市）の西に隣接する。安曇川支流の久多川とその支流大谷川に沿って5集落が点在する。

自然基盤・自然の使い方 山に囲まれた豪雪地帯で、川沿いに細長く小盆地がのびる。木材の供給地で、鎌倉時代から筏流し、江戸時代から炭焼がおこなわれた。田畑で稲作や麻栽培などの農業、里山で薪、炭焼、キノコ等の採取、八丁平等の奥山では狩猟や材木の伐採・搬出、炭焼、蔵等の庇下や家屋の縁側では麻の機織りもした。雪に閉ざされる期間も長く、家、田畑、山での作業は季節と空間を選んで利用された。炭焼は尾越の炭問屋を通じて鞍馬へ運ばれ、鞍馬炭として高値で流通させることができた。

近代には、鉄道の枕木が売れたが、ピークを過ぎてからは材木と炭焼が中心となった。戦後は梅ノ木町一近江間で車が通ったため、梅ノ木町へ卸すなど運搬経路や方法も変化した。小浜の市場へも材木を運んだ。

地理的・歴史的な位置づけ 京都と若狭を結ぶ若狭街道は安曇川沿いに沿って通るが、一方で京都から尾越・八丁平を経て久多に至り、針畑川に沿って若狭に至る街道も古くから機能しており、若狭との繋がりが深い。室町時代には関所も設けられていたという。

生業だけでなく、伝統行事として、今でもこうどの神こうどの殿が精進潔斎のために小浜の海水をかぶりに行くなど、若狭や近江との繋がりが深い。安曇川流域の地主神であり、筏の神という志古淵神を祀り、花笠踊、松上げなどの伝統行事が残るなど、独特の文化を持つ。

現在の景観 周囲を深い山に囲まれ、山裾に茅葺（トタン被せ）民家が点在し、川との間に水田が広がる。久多川・大谷川は溪流で大きくはなく、風景に占める比重は必ずしも高くはないが、筏流しの歴史や川地藏の風習などに象徴されるように、暮らしとの関わりには深いものがある。

地域での活動 久多への移住推進や、農家民宿などの活動をおこなっている。休耕田で北山友禅菊を育て、観光の1つのイベントとしている。

参考文献

京都市文化市民局文化財部文化財保護課編（1997）『京都市文化財ボックス第12集 久多の山村生活用具』
岩村文代（2002）「山村地域における伝統的景観への住民意識—京都市久多地区を事例として」『森林研究』（74）

(13) 京北 ―― 周辺地域の農林業景観

位置 京都市の北西部に位置する。桂川の上流（上桂川）一帯に広がる山間の町で、周山・細野・宇津・黒田・弓削・山国の旧5町村からなる。北は美山町、東は京都市左京区、南は京都市北区、西は日吉町と八木町に接する。

自然基盤・自然の使い方 面積約 217km²のうち9割以上が森林である。居住と耕作の中心となるのは、周山から上流の桂川及び弓削川沿いに形成されたV字形の周山盆地である。農業を主とするが、耕地面積は751haで、林業を兼ねる者や、市街地への通勤者も多い。上桂川が地域の中央を流れ、河川沿いの平坦部に集落が集まる。上桂川は材木の運搬とともに鮎漁も盛んで、今もおこなわれる。材木運搬は桂川への筏流しが利用された。また、マンガン鉱床が分布し、第二次世界大戦中を中心に1980年代まで採掘がおこなわれていた。

地理的・歴史的位置づけ 織豊期以降は京都・伏見・大坂の城郭や都市建設に大きな役割を果たした。近世には藩領・禁裏御料などが入り組んでいた。禁裏に鮎を献上した網役は、鮎の漁業権と自由販売権を有した。禁裏とのつながりから、明治維新に山国隊が官軍として活躍した。

現在左京区に属する広河原は、もとは昭和30年（1955）に発足した京北町の一部であったが、同32年（1957）に左京区に編入された。平成17年（2005）には京北町も京都市右京区に編入されて今に至る。

現在の景観 川沿いの平地部に材木集積場や民家、水田が広がる。民家には茅葺屋根（トタン被せ含む）も多くのこる。敷地入口に長屋門、庭に台杉、水路沿いに洗い場（イトヤ）もみられる。

地域での活動 立命館大学産業社会学部による「京北プロジェクト」をはじめ、地域と大学が連携したまちづくりの取り組みが進められている。地元のNPO法人ふるさと京北鉾杉塾により、朝市や小学生対象のイベントを通して地域住民と交流し、地域の活性化を進めている。

行政では、農林漁業体験を通じた地域活性化及び農林漁業者の副収入の確保として、農家民宿の開業を推進している。また平成27年（2015）からは、農家民宿開業に対する規制緩和の運用を開始している。

参考文献

京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課編（2008）『京都市文化財ボックス第22集 柚の国―京北・文化財のしおり―』



図37 栗尾峠から望む京北一帯



図38 民家と道路の間を流れる水路沿いの洗い場（イトヤ）

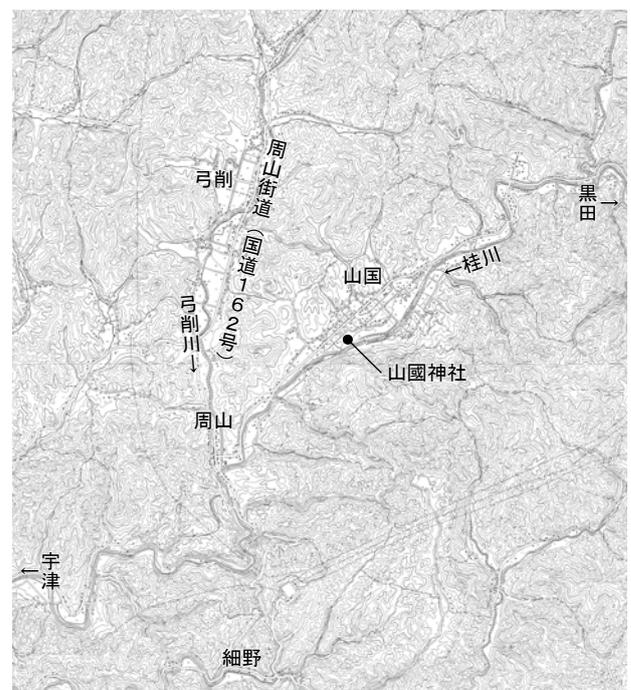


図39 京北の位置図
(国土地理院数値地図50000に追記)

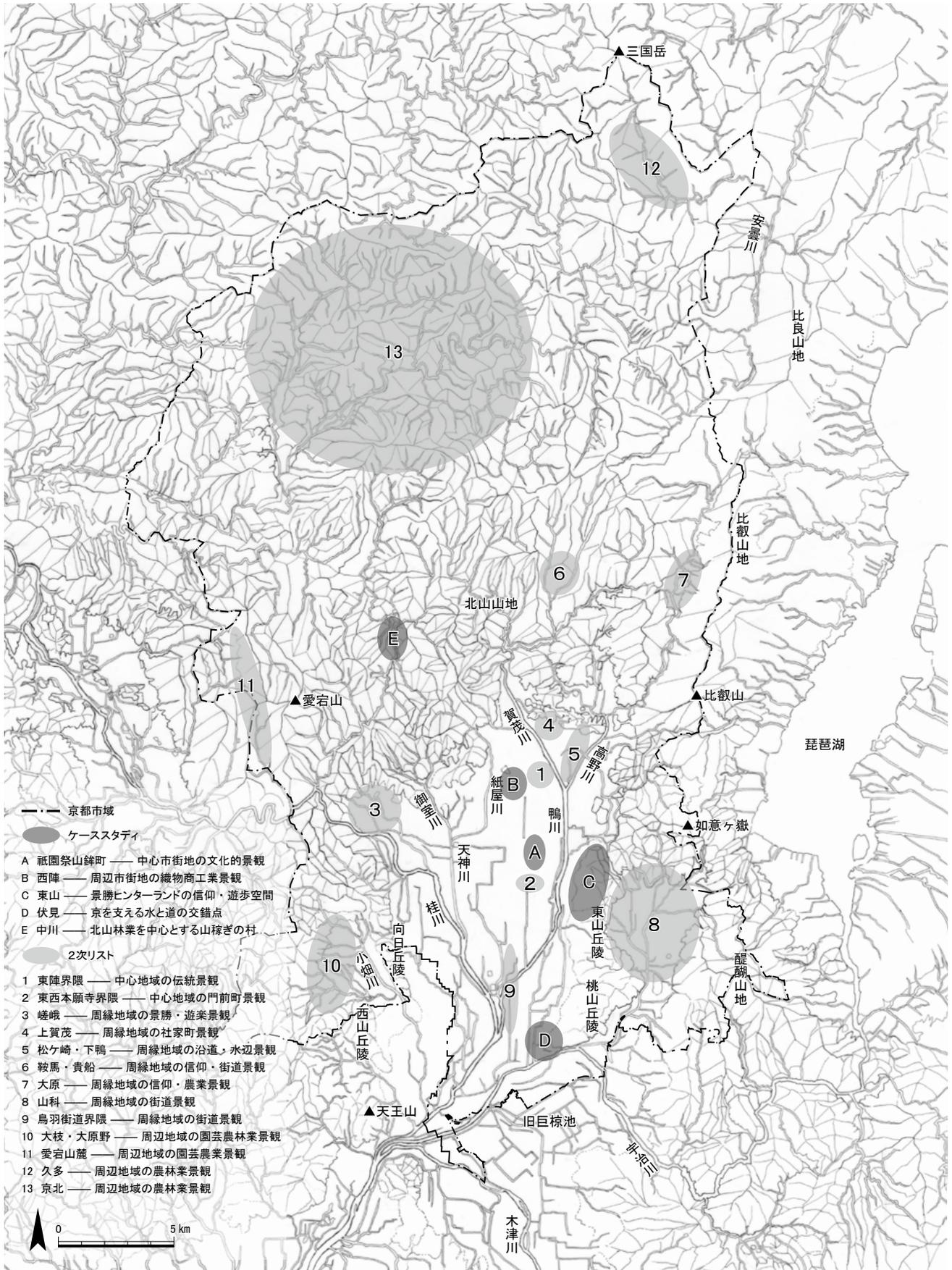


図40 ケーススタディ・2次リストの位置図